
タダシイ冒険の仕方2

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダシイ冒険の仕方2

【Nコード】

N4713Q

【作者名】

イグコ

【あらすじ】

フローラちゃんが大変だ！今度の旅はイグアナの餌を求める事に。イグアナって何を食べるんだ……？——冒険者育成の学園を飛び出し六人が向かうのは首都レイグーン。単なる護衛の旅が魔人が出たり悪魔が出たりと騒がしいことに。卵達の旅、二話目です。

魔女っ子、つかれる（前書き）

「タダシイ冒険の仕方」の二話目になります。

魔女っ子、つかれる

目の前の扉を緊張と共に睨みつけると、わたしは大きく深呼吸する。しばし目を瞑り気合いを溜め、意を決して静かに開けていった。がやがやと騒がしい室内を見渡していると入り口すぐの席から声を掛けられる。

「誰？呼んでやろうか？」

気さくな話し方の彼はきつと席の場所からしてこういう役目が多いのだろう。わたしが名前を伝えたと、彼は教室の中央に向かって声を張り上げた。

「おい！ヘクター、お仲間が呼びだぜ」

すると集団の中からひよっこり顔を出したヘクターにわたしは思わずにやける。彼はすぐにこちらに駆け寄ると、うるさい教室内を遮断するように後ろ手に扉を締めた。

「どうした？」

「うん、今日の放課後のこと伝えとこうと思って……。今日はミィティングルームじゃなくてローザちゃん家に集まるから、居残りとかあったら聞いておこうと思ったんだ」

あらかじめ決めておいた台詞を一気に言い終わるわたし。ち、ちょっと不自然だったか？

「あ、そうなんだ。大丈夫、何もないから。終わったらすぐそっち行くよ」

わたしの態度とは真逆に、ヘクターは実に爽やかに言った。わたしはブンブンと頭を縦に振る。

「わかった。じゃあうちの校舎の前で待ってるね」

「うん、よろしく。……あ、リジア」

ヘクターに呼び止められたのが予想外の展開な為、わたしは大分テンパる。

「はい？」

「それ、うん、その頭の、かわいいね」

ヘクターはわたしの頭を指差すと、その手を直ぐにポケットへと突っ込んだ。わたしは思わず自分の頭に手をやる。その動作で髪飾りの花の部分が指に当たり、これのことかと気づいた。

「え！あ、これ、ああ、うん。ありがとう」

自然に自然に、と思っても顔が真っ赤になってしまふ。そんなわたしを見たからか、ヘクターも少し照れくさそうに顎をさすった。

「じゃあ、また後でね」

わたしが慌てて取り繕うと、ヘクターも答える。

「うん、じゃあね」

手を振り扉を開ける。と、中からトーマスポールが現れたではないか。クラスメイトの数人が扉に張り付いていたのであろう、その状況を見て、ヘクターが冷ややかに言う。

「何だよおまえら」

「い、いや、ちよつと羨ましい状況かな、と」

その中の一人が答える。

廊下を戻りつつわたしが振り向くと閉まっていく扉の向こう、顔を赤くするヘクターと彼の怒鳴り声が聞こえた。

「面倒な事になったわよ」

ローザの放つ言葉にみんなの手が止まる。ローザの家は学園の裏手だ。歩いてすぐな上に彼、いや彼女の家は所謂お金持ち。午前授業になった今、家に行けばお昼ご飯も出してくれるここに集まるようになったのは自然のこと。今もテーブルに並んだごちそうを前にミィティングという名のおしゃべりを繰り広げていたのだが、ホストの一言で動きが止まってしまった。

「……どうしたんです？」

わたしの隣りに座るイルヴァがおずおずと尋ねる。本日のコスプレは東洋の「おいらん」というらしい。やたら派手なキモノをやや型

くずれに着て頭も結い上げている。もはや誰も突っ込まない。

「……フローラが何も食べてくれないのよ」

フローラとはわたし達が先日の冒険の際に報酬として貰ったイグアナ型ロボットだ。首元にあるスイッチに触れるとどういう仕組みなのか、中にある小部屋に入れる大変凄いものなのだが、中が如何せん狭すぎる為にまだ使用の機会はない。

「あらら……って、フローラってご飯いるの？」

わたしの質問にローザは溜息をついた。

「いるわよ。だって現に今、元気無くしてるのよ？」

フローラはイグアナの赤ちゃんそっくりで、人工知能のお陰で動きもイグアナそのもの。これをくれたバレットさんの話したと体も大きくなるそうだ。というわけで、とりあえず家の広いローザのアズナヴール家にお世話になっているのだが。

「だってロボットだろ？」

アルフレートの冷やかな言葉にもローザは首を振る。

「成長するって聞いたでしょ？ やっぱ栄養は要るのよ。それに現に先週までは果物なんかを食べてたのよ？ それなのにここ数日は食べってくれなくて……」

そこまで言つと、よよよ、と泣き出した。もうすでに愛着たつぷりというわけか。

「とりあえず見せてもらおうよ。そんな話し聞くと俺も心配だし」
ヘクターが言つとローザは顔を上げた。

「ありがとう……。やっぱこいつらの薄情っぷりとは違うわね……」

「悪かったな」

「冷静だといってほしいわね」

アルフレートとわたしの言葉をシカトしたままローザは立ち上がった。

「こっちの部屋にいるから。見てやって」

扉を開けるとそこは温室だった。

普通に廊下から他の部屋と同じように入ってきたのだが作りの全く違う異質な空間におったまげる。全面ガラス張り、植物の鉢がいくつも置かれ中央にはベビーベットのようなものが置かれている。まさかとは思うが、フローラちゃん用だろうか。私がぐくりと喉を鳴らすのと、フローラちゃんのしっぽが見えて来たのは同時であった。「どんだけ金掛けてんだ……」

アルフレートがぼやく。

「俺が紛れ込んで住んでもバレなさそう」

フロロがやや本気まじりに言った。

ベットを覗き込むとフローラちゃんが目を瞑っている。ローザがそつと背中を撫でるとうつすら目が開いた。確かに元気は無いようだ。「餌はずつとそこのお皿に用意してあるんだけど食べてくれなくてベットの脇に美味しそうな果物数種類が一口サイズに切って盛つてある。」

「でも先週までは食べてたんでしょ？」

「そうだけど……やっぱり口に合わなかったんじゃないかしら。あたし調べてみたんだけど、イグアナって南の方のヴィツタ島の生き物なんですって」

ほうほう、それで？

「やっぱりそっちの方の食べ物じゃないとダメなんじゃないかしら」「うーん……」

わたし含めメンバーは唸る。そうは言っても今現在、わたしたち学園の五期生は行動範囲が決まっている。この前の演習の合格から手続きすれば学園の用意したクエストに限りいつでも出かけられるのだが、五期生はこの国のクエスト限定になっているのだ。なぜそんな制限があるのかというと、六期生と違って授業参加が必須の単位が残っているからだ。ヴィツタ島といえばここから三つ国を跨いだ僻地。行くとすれば個人的に行く事になるが、そうすればその間は学校が休み扱いになる。とんぼ返りだとしてもひと月、二月はかか

るかもしれない。そんな期間休んだら、さすがに退学じゃないだろうか……。

みんな思う事は同じなようで渋い顔をしている。ただ一人ぼんやりした表情を浮かべていたイルヴァが突然、
ぱくっ

フローラちゃんの餌である果物を口に入れた。啞然と皆が眺めているともごもごと口を開く。

「流石に自分の行動が恥ずかしいです」

「口動かしながらいいな」

アルフレートが睨みつつ突っ込む。

「あのさ……」

「ほら、ヘクター、君からもガツンと言ってやれ。今は流石の私も本気でむかついた」

「いや、そうじゃなくて……」

ヘクターは困り顔でアルフレートに手を振る。

「何もヴィツタ島まで行かなくても大きい都市に行けば何とかなるんじゃないかな」

なるほど、別に現地まで行かずとも大きな都市であれば遠い国の食材であっても手に入るかもしれない。

「ああ、そっか。なるほどー」

簡単なことにわたしは思わず間抜けな声を出してしまった。

「でもここより大きい都市っていうと……」

わたしたちの住むここもかなり大きな都市だ。そしてここより大きな都市となると、

「首都レイグーン……しかないわね」

わたしの言葉にみんなが頷いた。

学園の中でも、首都に行きたい！という希望はやっぱり多い。大きな町に行けばそれなりに揃う物が多いしなにより刺激になる。動機の純、不純は置いておいて、首都レイグーンに出向くクエストは人気があるのだ。ましてやわたし達五期生が出来るのは最上級生である六期生が「つまんなそう」「めんどくさい」と蹴った依頼になる。レイグーンに行くことは決まったものの、希望が通る可能性は無いに等しかった。

のだが、

「あるよ、レイグーンに行くだけなら」

メザリオ教官の言葉にわたしは口をぱくぱくさせる。

「ただし、通るだけになるけどな。実際の依頼場所はさらに奥」

「っていうとかなり遠出ですね。レイグーンの方の学園に要請は無かったんですか？」

ヘクターがもつともな質問をした。レイグーンにも学園はある。この学園の分校のようなものだが首都にあるだけにそれなりに大きいらしい。

「目的地はレイグーンの先のフェンスリーだが、依頼人はこの町にいるからな。片道だけの護衛の仕事だ」

そこまで言うともザリオ教官は動きを止める。そして腕を組み、上を向いたりうなだれたり、しまいにはぶつぶつ呟き始めたではないか。

「……しかし、よりによってお前達に受けさせるのも……いや、毒をもって毒を制すとも言うが……」

な、なんか嫌な予感がするんですが。

「はつきり言う。この依頼は断られまくって回ってきたものだ。でもお前達にはいい経験になると思う」
わたしとヘクターは顔を見合わせる。

（ど、どうする？）

（どうしようか……こんな話しになるなら皆連れてきた方が良かったわね……）

小声で話し合うわたし達。

「どういう理由でたらい回しになってるんですか？」

わたしが聞くとメザリオ教官は首を振った。

「ちよつと訳ありで事情を知る人間は最低限に押さえなきゃならない依頼なんだ。受けないなら言えない」

あらら、予想通りのお答え。

「……しょうがないよ。レイグーンに行くのが第一目的だ」

ヘクターの言うことにわたしも頷いた。

「受けます。半日程度なら首都に留まっても平気ですよね？」

教官にヘクターが聞くと、

「どのみち野宿できない依頼人だ。嫌でもレイグーンでも一泊するようになると思うぞ」

メザリオ教官はそう答えつつ、ほっとしたような心配なような複雑な顔だ。

しかし野宿NGとは。依頼人はどつかのお偉いさんかなんかだろうか。乗り合いバスのような高速移動の乗り物を利用する以外に、町から町へ移動する時は野宿なんか嫌がっていられないと思うのだが。

「で？受けるって言うてきたの？」

ローザの質問に首を振るわたし。ここはミーティングルーム。演習を終えたグループに各自与えられる部屋だ。グループ単位の行動が増える為用意されたもので、狭いがみんなで集まって話し合うぐらいいなら申し分ない。初めから折りたたみの机に粗末な作りの椅子が何脚か置いてあったのだが、ローザの手によってゴージャス&乙女チックに変わっている。わたしはレースの折り重なったランブシェードをいじくりながら答えた。

「だってうさんくささ満載なんだもん。あんたたちに聞いてからじゃないとうるさそうだったから」

「私達を煙たがって二人で行ってきたくせに情けないな」とアルフレート。

前回でメンバーに対する教官の評価の低さを身にしみて感じたわたしは、リーダーであるヘクター一人で教官の元へ行ってもらう提案をしたのだ。その後ヘクターに頼まれて、結局二人で行ったんだだけど。

あの後やっぱりメンバーに聞いてきます、と断ったわたし達。ビビったともいう。

「返す言葉もございません」

ヘクターはアルフレートに頭を下げる。

「確かにうさんくさいわよねえ。野宿もしてくれないような身分の人間で、たらい回しにされるようなやつかいな依頼、ってことでしょ？いくらこつちが」とにかく首都に行けるなら何でもいい」って頼んだんだとしても、あたしたちに紹介しようとメザリオ教官が思うかしら」

ローザは紅茶を飲みつつ訝し気に眉を寄せる。

「フェンズリー、今治安良くないって聞く」

フロロの言葉にわたしは驚く。フェンズリーといえば首都に近い割に閑静な住宅の多い、上流階級の人達が住む町というイメージがあったのだが。

「そうなの？どこ情報？」

わたしの質問にフロロはニヤリと笑うだけだ。盗賊特有の情報網かはたまたモロロ族の情報網か……。

「野宿を嫌がるのは潔癖症なだけ、って可能性もあると思いますけど」

イルヴァはチョコレートをぱくつきながらこちらを見た。

「そりゃわたしだって学園にきてる依頼な時点でお偉いさんの可能性は低いと思ってるわよ。でもね、わざわざ条件に組み込んでるっ

ていうのが一般人っぽくない気がするのよね」

わたしが言つとイルヴァは首を振る。

「ここで考え込んでてもしょうがないですって。全てはフローラちゃんの為でしょう？やるしかないんですって」

「……ほんつと、たまにまともな事言い出すから気に食わないわね」
「同感」

わたしのつぶやきにローザが頷いた。

結局、首都に行けるチャンスがあるクエストがいつやってくるかわからないという判断から、わたし達はメザリオ教官の元に「受諾」の手続きに行く事となった。そろそろとやって来たわたし達一行に教官は一瞬眉間に皺を寄せたものの、

「そうか。……がんばれとしか言いようがないが、まあしっかりやれよ」

とカードに判子を押してくれた。カードとはグループごとに配られる、冒険の履歴書みたいなものだ。関連する依頼なら同じグループに依頼を持って行った方がスムーズだし、教官達も管理しやすいのだろう。

続けて机の上にあったバインダーを開くと、教官は一枚の紙を引っ張り出す。

「依頼人とクエストの概要が書いてある。前に言ったようにちよつと特殊な依頼だ。依頼人と顔を合わせるのも学園じゃなく、そこに書いてある場所になる」

そう言つてヘクターに用紙を手渡した。わたしは後ろからそれを覗き見する。と、なんだか拍子抜けしてしまった。

『依頼人 アレックス・レイノルズ』

依頼内容 娘、アンナをフェンズリーの町まで護衛すること。

道中の終日は最低限、宿泊施設が備わっている町、村に行き着く事。なお宿泊費、移動中の交通費は全て依頼人が保証する。

ウェリスペルト マーセスター通りA24』

特に面倒さを感じない内容だ。ローラス内の移動なんてわたし達でも十分できるし、費用のことも丁寧に書いてある。

「レイノルズさんって、あのレイノルズ議員？」

ローザが教官に聞くと、教官はゆっくり頷いた。あらら、本当にお偉いさんだったんじゃない。マーセスター通りって確かお金持ちが多い高級住宅地だっけ。

「ここにお邪魔すればいいって事ですな？」

ヘクターが住所を指し示す。

「そういうことだ。心配しなくても私から連絡は取っておくから。訪問は明日でいいよな？」

教官に聞かれ、ヘクターはわたし達メンバーを一巡すると頷いた。

「結構です」

「よし、ヘクターくん、頼んだぞ」

ヘクターの手を握りしめる教官の目は明らかに『キミにかかっているぞ』と言っていた。

家の中に肖像画を飾っちゃう人ってどんな身分の人なのかしら、とは思っていたがレイノルズ家はその『飾っちゃう』人たちであった。吹き抜けの立派な玄関を通され、入った先もこれまた立派な応接間。煉瓦造りの暖炉の上、油絵の中で微笑む男性は今日の前にいるアレックス・レイノルズその人である。

「よく来てくれたね」

そう言って握手したレイノルズ氏の手は金持ちらしく肉厚であった。朝っぱらからの約束を取り付けてきた依頼人に会う為に、庶民のわたしには縁のなかったマーセスター通りにやってきた。ウエリスペルトの中でも指折りの高級住宅地であるマーセスター通りは、道はやたら広いし各屋敷も門からやたら遠くにあるし、思った通りの別世界であった。依頼人のレイノルズ氏もでっぷり出たお腹といい、にこやかながらもどこか見下した目といい、お金持ちのイメージそのものである。

事前に聞いてきたローザ情報によると、このレイノルズ家、「旧貴族」とのことだ。ここローラス共和国は『共和国』と付くだけあって貴族制が半世紀程前に廃止されている。しかしながらいまだに国政に携わったりしているのはこういう旧貴族が多いのだ。その上レイノルズの間人はけちん坊、という噂があるので、だから正規の冒険者を雇わなかったんじゃないか、とローザは語っていた。

関係ないけどどうして金持ちって噂話が好きなのかしらね？各家庭の情報が筒抜けなのって、庶民より多かったりするんじゃないかしら。

「最近の学生は根性がないのかねえ。なかなか依頼を受けてくれる者がいなくて困っていたんだ。君らが来てくれて本当に助かるよ」レイノルズさんの言葉に引きつり笑顔のわたし。

「さて、と。もう知っていると思うが、頼みたいのは娘をフェンズ

リーまで護衛して欲しいということだ。娘は身体が丈夫じゃないんでね、集団が乗るような大型バスは嫌だと言うし野宿なんてもつてのほかだ。あまり安宿にも泊まらせないで欲しい。面倒だが最短距離を選ぶよりは町から町へと移動するような形にしてやって欲しいんだ」

「大丈夫です。きちんと道程は下調べしてありますから」

キリッと答えたのはローザちゃん。パパから言われたらしく、今日は「男」である。

「じゃあ早速、娘に会わせようか。……アンナ！」

隣りの部屋にいたらしく、すぐに1人の女性が部屋に入ってきた。レイノルズ氏と同じ黒髪の、目鼻立ちの整った人である。入ってきた瞬間から部屋には薔薇のような良い匂いが漂った。わたし達よりはちよつと年上世代か。気の強さが伺えるきりりとした眉に、大きな瞳。背が大きいが身体は細くて、でも出るところは出ている羨ましい美人さんだ。おおーっと感嘆したのは一瞬だった。

「……アンナでえす」

ぶつきらぼうに言うと、彼女はウェーブしたロングヘアをばさつと手でかきあげる。その言い方に一瞬にしてメンバーの顔が強張ったのがわかる。わたし達を順に見ていくと、

「ふうーん……。この子たちね？……まあいつか。こないだの連中みたいに不細工ばっかじゃないしい」

アンナの言葉にレイノルズ氏は溜息をついた。

「こないだの子たちはお前が『ブスと一緒に歩くのなんて嫌』なんて言うから、怒って帰ってしまったんだぞ？」

んなこと言ったのかい！……だんだん『たらい回し』にされた理由がわかってきたぞお。

アルフレートが大きく欠伸する。すでに彼の中で『興味が無くなった』という印だ。

「アンナをフェンスリーまで無事、送り届けるというのが君達の仕事だ。簡単だろう？」

にこにことレイノルズさん。フェンズリーまで行く、というのは簡単なんですよ。ローラスは比較的平和な地域だし。でもね、問題はあんたの娘のその態度になりそうだな！……とわたしは怒鳴りたい気持ちを押さえた。

たらい回し（とは本人たちは思っていないだろうが）を受けたこの親子、出来るだけ早く出発したい、とのことだったので話しもそこそこに早速出発することになった。このお嬢様が徒歩なんて……と思ったら案の定、一頭引きの馬車が用意されていた。三人乗りの小さなものだったが、これはありがたい。夜もある程度の宿に泊まることは保証されているようなものだし、考えようによつてはかなり楽な冒険だ。ぬるーい、とも言うが。

「もつとかわいい馬車がよかったあゝ」

とアンナさん。このノリに馴れてしまえば……あとは楽、なはず。さつさと馬車に乗り込んでしまったアンナの代わりに、やたら多い荷物を運び込んでいると、

「あ、それはあたしが持つていくから」

とアンナは小さな布袋をわたしから奪い取った。一瞬呆氣に取られるが、むかむかと怒りが込み上げてくる。

「どうどうどう……」

ローザに押さえられ、わたしは何とか怒声を飲み込んだ。

「とりあえず、今日は隣り町のオットーを目指しますから」

馬車の窓からアンナに声を掛けるヘクター。

「……ふうん？」

アンナはしげしげとヘクターの顔を凝視する。

「あなたは馬車に乗っていかないの？ずっと歩きっぱなしじゃ疲れちゃうわよ？」

「いえ、俺はいいです。ただ彼女たちが疲れたら乗せてあげてください」

ヘクターはこちらを手で指し示した。アルフレートが「私も私も」と顔を指差すが、アンナはつまらなそうに顔を引っ込めた。

フロロがわたしに近づいてくる。

「いいのお？お姫さんはあの兄ちゃん気に入ったみたいだけど」
「いやらしさ全開の顔に、わたしは遠慮なしのデコピンをやった。」

イエトリコの魔人

とりあえず向かう先は隣り町「オットー」。オットーさんの夫さんがおつとつとなんて言いながら作った町オットー。なんて冗談はさておき、オットーはウエリスペルトの東にある町だ。ウエリスペルトからも近いので交流は深い。引きこもりなわたしも何度か行ったことはあるが、針葉樹林の美しい閑静な街並みだ。ただこれといって特質するものが無いので、若い人は皆ウエリスペルトに出て行ってしまつらしい。学園にも出身者が多かったはずだ。

前回の冒険で出かけたチード村のあるアルフォレント山脈とは逆方向になるため、前回とは反対の門から出かけることになる。町外れまでやって来た時、イルヴァがわたしの肩を叩く。

「何？」

「あの、フェンズリーの町までつて結局どのくらいかかるんです？」
「そーいや、皆で地図にらめっこしながら道順考えてた時、こいつ寝てたっけ……。」

「……言っても無駄な気がするけど、一応教えとくわ。まず、今日は隣町オットーまで行って、次がコルトールの町を目指すけど、一日じゃ着きそうにないからやや南寄りに迂回しながら行く事になるわ」

「何ですか？」

「そうすると途中で村があるらしいのよ。フロロの話したと。その後がお待ちかねの首都レイグーン。で、その後フェンズリーの町ね。順調に行けば五日で着く計算だけど、まあ、一週間は見といった方がいいかもね」

「……それだと野宿前提じゃないですか？」

「首都に近づく程、冒険者目当ての宿泊施設なんかがぼつぼつあるらしいのよ。お嬢様のお気に召すグレードかは疑問だけど、他に手段がなけりゃ諦めてくれるでしょ」

「じゃあ間に合いそうですね」

うんうんと頷くイルヴァ。

「何に？」

「一月後に集会があるんです。私の趣味関係なんですけど。結構大きな集会になるんで外したくなかったんです」

「ああ……」

脱力するわたし。珍しく真剣に聞いてくるから何かと思いきや。本格的な冒険をする時期に入ったんだから、もうそろそろ足洗ってくんないかなあ……。イルヴァのフリフリなレースのビキニに羊の角のようなものを頭につけた格好を見て、わたしは溜息をついた。

「お腹すいた！」

お前は駄々っ子か！と言いたくなる言葉を吐いたのはアンナ嬢。無事オットーの町に着いた直後である。まだ夕刻になる前の到着だというのに。しかも自分は馬車の中でお菓子をやたらとパクついていたのは知ってるんだぞ！

「早くレストラン探して！あ、やっぱりその前に宿に入りたい！お尻いた〜い！」

旅の疲れ、というよりこのわがままを受け流す作業に疲れたわたし達は無言のままだ。赤く染まり始めたオットーの街並みは、シンボルの針葉樹林が本当に綺麗だ。その光景に現実逃避していると、

「もう！聞いているの！？」

耳元でアンナに叫ばれ、わたしは思わず怒鳴り返す。

「聞いてますよ！お尻が痛くてお腹空いてお尻が痛いでしょ！？」

「ちょ……、お尻お尻言わないでよ！」

アンナは顔を赤くしている。自分で言ったのに、よくわからない人だ。わたしは適当な宿を見つけ出すと、

「あそこです？」

と提案した。冒険者向けよりは2ランクは上の綺麗な外観だ。どう

せ費用はレイノルズ家持ちなのだ。遠慮はいらないだろう。わたしが「どうだ！」と胸を張る提案にも関わらず、アンナは暫し考え込み、

「えー……まあいつか。早く休みたいし、お腹すいたし」

と渋々といった感じだ。隣りにあるこ洒落たレストランに目が移っているのを見ると、よつぽどお腹が空いていたらしい。

「じゃあ俺、馬車を預かれるか聞いてくるから待ってて」

そう言つてヘクターが宿に入つていった。その姿を目で追っている
と、

「ねえ、彼、彼女とかいないの？」

アンナの言葉に嫌な予感がするわたし。たつぷり間を取ってから答える。

「……さあ？」

「んもつ、仲間なんだからそのくらい知ってるでしょー？好みのタイプとか！」

アンナが騒いでいるとアルフレートが近づいて来た。

「それを知つてどうするのか教えてほしいね」

「ど、どうするって……」

アンナは流石にたじたじといった感じだ。

「もし、彼がブロンドで背が小さく、大人しいタイプが好きだと言つたらどうするんだ？ちなみ君と真逆を言つてみたんだが。髪の色はともかく、外見を変えるのにも限界はあるな。性格だつてそうだ。自分を押さえ込むのか？それで幸せになるのかね？」

「な、なによー！このエルフ！」

あーあ、とうとうやりあったよ、この二人。

ギヤース力騒ぐアンナに、冷静に嫌味を言い続けるアルフレートを残りのメンバーがぼんやり眺めていると、ヘクターが戻ってきた。

「オッケーだつて。宿の人が裏に置いてきてくれるってさ。……つてどうしたの？」

「気にしないで。お腹空いて苛立つてるだけだから」

わたしが言つと、彼は「ああ！」と妙に納得顔になった。

宿に荷物を置くと、さつさと隣りのレストランに移動するわたし達宿といいこのレストランといいなんだか場違いな感はあるが、流石にアンナには見合っている感じはする。適当に注文を済ませるとわたしはアンナに質問してみることにした。

「そういえばフェンズリーには何しに行くんです？」

「お姉様に会いに行くのよ」

意外とあっさり答えてくれるアンナ。

「へえ、離れて暮らしているんですか？」

「お姉様はもうフェンズリーに嫁がれてるから。……うちと同じ旧貴族のお金持ちよ」

そう言つてうふふ、と笑う。

「二人姉妹なんですか？」

ヘクターが聞いた。

「ううん、うちは六人兄妹よ。あたしが末っ子」

へえ、結構大家族なんだなあ、とわたしが考えているとアルフレートがふふ、と笑った。

「典型的な金持ちの手駒作りつてわけだ」

……おい。

「ちよつとお！失礼でしょ！」

わたしが慌てて声を上げると、アンナは意外な程冷静に頷いた。

「いいのよ、馴れてるから。それに事実だしね」

この言葉にわたしはアンナの中にある気高さと、威厳ある家の生まれの寂しさを感じ取ってしまった気分になった。

「お姉さん、元気だといいですね」

場をフオーしようとしたのか、ヘクターが話しを変えようとしたのがわかる。

「……それがねー、元気だといいんだけど」

溜息つきつつアンナが語り出した話しは、冒険者であるわたし達には興味深いものだった。

アンナの姉、エデイスがフェンズリーの旧貴族の家バクスター家に嫁いだのは五年前のことだった。典型的な政略結婚とされていたが、当人同士は一目惚れのように惚れ合っただけの幸運な結婚だったらしい。フェンズリーの名家として代々国政にも人材を排出しているバクスター家は申し分ない上流家庭で、レイノルズ家としても相手に不足なし、と円満な縁組みが結ばれたわけだ。

しかし結婚から数年後、バクスター家にある事件が起きる。隣国のスパイを匿ったとして先代のメルヴィン・バクスターが逮捕されたのだ。結局は証拠不十分で不起訴に終わったが、周りからの目は冷たいものだった。これを苦に先代は自殺。今はアンナの姉、エデイスの夫であるマルコム・バクスターが一族の復興をかけて奮闘中らしい。

「スパイって……、結局無実の罪だったんですか？」

わたしが聞くと、アンナは大きく頷いた。

「あたしはそう思ってるわ。メルヴィンおじさまには何度も会った事があるけど、すごく愛国心の強い方だったし……」

「実力者だったからライバルも多かったって話しは聞いた事あるわ」

ローザが言くと、アンナは一瞬目を大きくする。

「ああ……あなたアズナヴール家の方だったわよね」

ローザはぎくりと肩を強張らせた。おかまちゃんキャラを隠すのを忘れていたらしい。誤魔化すように早口で話しを続ける。

「……とにかく、そんな事件のせいでバクスター家は国の中心から消えちゃったわけ。でも息子のマルコムは父親以上のやり手だって聞いたけど？」

ローザが心無しか普段より低トーンで話すのにわたし含め、メンバーは肩が震える。

「ええ、マルコムはがんばっているわ。お姉様もそれを支えるためにがんばっているし……。でも限界が近いみたいで、お父様のところに助けを求める手紙が来たのよ」

「それであなたが行くの？」

わたしは少し不自然さを感じ、聞いてみた。

「あたしからお父様に頼み込んだのよ。人を雇ってもし、大事な家宝を持ち逃げされても困るだろう、って。……ってまだ話してなかったっけね」

そう言つてアンナは布袋を取り出した。出発の際、わたしから引つたくるように奪ったあの袋だ。

「イエトリコの魔封瓶と呼ばれるものよ。中に魔人が封印されてるんだって」

そう言つてアンナが袋から取り出したのは、大人の握りこぶしほどのガラス瓶だった。砂時計を真ん中で半分に切ったような丸っこい形をしている。中には金色に光り輝く光の精霊のようなものがふわふわしていた。

「こ、これがそうなの？割れちゃったりしないの？」

わたしが焦り気味に聞くとアンナはくすりと笑った。

「大丈夫よ。落としても割れないし、コルバインが踏みつけても割れないでしょうね」

そう言つてから瓶の上に付いているコルク栓のような物を引っ張る。大げさな身振りで力を込める仕草を見せた。

「……この通り、普通の人間が封を切ろうとしても開かないしね。フェンズリーにいるある高名な賢者様なら開けられるかもしれない、って話して、それであたしが持つて行くのよ」

「願いを叶える異界の魔人ってやつか？」

アルフレートは苦笑する。いかにも彼らしい反応だ。

「実際、あたしの先祖が使ったものなのよ？インチキじゃないわ。一度現れると何百年もこの中で眠ったままになってしまいうらいけど」

アンナは瓶を仕舞うと、運ばれてきたライムのジュースを一飲みした。

実家からの支援というお金になるようなものだと思っていたわたしは、やや面食らってしまう。随分規模の大きな話だ。もしかし

たら『地位も名誉も全部回復してください！』とか頼んだりする
んだろうか。わたしは願いをぶつけられた魔人の反応の方が気にな
ってきってしまった。

「やわらかい」

わたしは普段には無い上質な羽毛布団に身体を沈めると、思わずうなり声を上げてしまった。宿に帰って各自部屋に戻った後である。隣りではイルヴァが手にマニキュアを塗っている。彼女の場合フアイターなんだからすぐに取れてしまうのでは？と思ったら、「塗る事が楽しいから良い」んだそうだ。わたしも魔術書の復読でもしよつかない……と考えた時、短いノックの後にローザが部屋に入ってきた。

「ああ……疲れた」

ローザは肩をこきこき鳴らすとわたしが用意しておいた簡易ベットに崩れ落ちる。

「おつかれー。無理しちゃうって大変だったね」

今日、取った部屋は三部屋。わたしたちのいる部屋と男チームの部屋、それにアンナさんの部屋だ。ローザはアンナさんの見ている前で女子チームの部屋に入るわけにいかず、隣りの男部屋に行っていたのだ。

「別に隠すこと無いんじゃないですか？ローザさんの個性ってことでいいじゃないですか」

イルヴァの言葉にローザは首を振る。

「彼女……というかレイノルズ家はお父様の知り合いなのよ。会う前にみっちり言われてきたから……無理」

なるほど、家のメンツというところだろうか。お金持ちって色々面倒くさい。

「……何日もつと思います？」

「……もって三日つてところじゃない」

わたしとイルヴァがこそこそ話しているとローザが睨んでくる。が、
「それより、どう思った？」

ふとローザが真顔に戻って聞いてくる。

「……魔人の話し？正直、想像の世界を超えててよくわかんないっていうところ」

わたしは正直に答える。

もつと『どんな魔人なのか』とか『呼び出してどうするのか』なんて突っ込んで聞いてみたかった気もするが、所詮わたし達には関係のない話なのだ。わたし達の仕事は彼女を無事、フェンズリーに送り届けることなのだから。そういうこともあってあまりしつこく聞くのも失礼な気がしてしまったのだ。

「魔人っていうと、おとぎ話の『三つだけ願いをかなえてやろう』ってやつが有名ですよね」

イルヴァの言葉に頷くわたし。

「もしかしたらアンナさんのご先祖が、魔人の力で財を成したとかなのかもね」

「あたし思ってたんだけど」

ローザが口到手を添えこちらに小声で話してくる。

「アンナさんの話しだと魔人は一度役目を終えたと何百年も眠っちゃうんでしょ？それをフェンズリーにいるらしい賢者に起こしてもらっちゃおう、って話しなんだろうけど、その場合って魔人が怒ったりしないの？」

うーん、確かに。魔人の何百年なんて人間にとっての時間と大分違う気もするし、いい気持ちで睡眠取ってたところを起こされて暴れたりしないんだろうか。

「でも一般的に言われる魔人、って精霊の一種よ？そんな暴れん坊じゃないと思うけど。……ま、そういう危険性があつたら賢者さんの方でお断りするんじゃないの？一番危ないのって起こす本人だろうし」

わたしは頬を掻きつつ言った。

それよりもわたしにはフェンズリーにいる賢者という方に興味があった。噂は耳にしたことがあったからだ。わたしもソーサラーのは

しくれ。賢者、なんて呼ばれちゃうような偉大な魔導師の存在ぐら
いだと話しを聞いた事ぐらにある。ましてや同じローラスに住んで
いるのだ。ソーサラー同士の話題にのぼらない方がおかしい。わた
しが知っている人物だとすれば、フェンズリーの黒魔導師と呼ばれ
る彼は相当な高齢のはずだけど。正直「まだ生きてるんだ……」な
んて考えてしまった。口には出さないようにしたけど。

上手い事行けば会わせてもらえたりするかなあ、なんて考えてい
た時だった。

「モンスターだ！通りにモンスターが出たぞ！」

宿の廊下、たぶん一階から聞こえてきた叫び声に、わたし達三人は
ベッドから飛び起きた。

窓を開けると異形な姿が目飛び込んでくる。町中にいたのである
う冒険者風の人たちがすでにそれらを取り囲んで攻撃を加えている
ようだ。鋼の音が響いてきていた。

「デーモン!?」

ローザがわたしの頭の上で叫ぶ。路上にいる生き物はどう見てもこ
の世界のものではない。

「行きましよう！」

わたしが廊下に飛び出ると、ヘクターとフロロがこちらに駆け寄っ
てくるところだった。斜め向かいにある扉からはアンナが不安そう
な顔で覗いている。ヘクターはわたし達を一瞥すると、

「イルヴァはアンナさんのところへ」

静かに言った。イルヴァは黙って頷く。

フロロがわたし達の間を走り抜けて行く。

「おっ先ー！」

つられるようにしてわたし達も廊下を駆け出した。階段を飛び降り
るように下り、踊り場の角にやってきたところでようやくアルフレ
ートが二階の廊下を悠々と歩いてくる姿を見つけた。

一階に降りると身を寄せ合うように立っている一般客に、おろおろ
とさまよう従業員たちが見える。

「危ないから奥に行つてなさい！」

ローザが叫ぶと、年配のおじさんが小刻みに頷いた。

「この町でこんな事が起きるなんて・・・」と呟く声が聞こえる。

普段は平和そのものの町だ。そう嘆くのもわかる。

そのまま外へ飛び出すわたし達。

「うわぁ・・・」

わたしは思わず鳥肌が立ち、腕をさする。通りにいたのは一目で異界のものだとわかる醜い姿のモンスターが、

1、2、3、4匹……。

すでにそれらに戦いを挑んでいるのはわたし達よりずっと先輩に見える冒険者たちだ。

「レッサーデーモン的一种にインプたちか。中々賑やかじゃないか」ひよい、と顔を出したのはアルフレート。

「デーモン！？あの一番大きいのが！？」

わたしが指差す先にいるのは黒い肌に体中から不気味な角を生やす巨体。他3匹は人間ほどの大きさに緑色の肌をしている。いずれも真っ赤な瞳で瞳孔がどこにあるのかさえわからない。

「デーモンの中でも小物中の小物だ。その辺歩いてれば出会える」アルフレートはさらりと言った。……わたしは出会ったことないんですけど。

すでにフロロは軽い身のこなしでインプ達を翻弄している。その隙に周りの冒険者が攻撃を加えていた。その時、デーモンに剣を振るっていた一人の戦士がデーモンの腕にはじかれ吹っ飛んできた。ずざぁ！と地面に身体をぶつける。

と、同時にヘクターがデーモンの方へ突っ込んで行った。そのままデーモンの脇腹あたり目掛けて斬りつけるが、肌を軽く傷つけただけだった。デーモンの方もヘクターに腕を振り下ろす。ガキン！とヘクターの剣とデーモンの爪が衝突した時だった。

がああああ！！

デーモンの咆哮が響く。喉を掻きむしるような仕草の元を見ると首

筋に一本の矢が刺さっていた。月の光で建物の上にかろうじてシルエットが浮かび上がる。その人物は再び矢筒に手を伸ばし、弓を構えようとしていた。

「大丈夫？」

ローザの声に振り返ると、先ほど飛んできた剣士に治癒の呪文を唱えてあげているようだ。

「すまない」

髭の剣士は苦しそうに微笑んだ。この場の雰囲気になんとか自分も動かなくてはいけない気分になってくる。

おおし！わたしもどうにか活躍してやろうじゃないの！

武器とデーモンの爪が交差する音、戦士の気合いの咆哮、町の人を誘導する盗賊の大声、それらを前にわたしは静かに呪文を唱えていった。

「エレクト・クラウド！」

わたしの力ある言葉に反応してインプの頭上に光源が現れる。

相手の頭上から電流で攻撃する呪文である。攻撃といったが痺れによる足止めの意味合いが強く、威力は低い分派手さは無いが簡単な呪文で唱えられるのでわたしでも制御できるはず！

ずどん！という音と共に崩れるインプとその周りの冒険者たち！

おや？

「うつつうつつ……」

「だ、誰だあ！今の呪文はあ！」

何とか周りは立ち上がるものの、インプは既に灰となって空へ消えていく。

「……どう見てもみんな感電してるじゃない」

ローザが耳元で囁いた。

「お、おかしいわね。こんなに威力のある魔法じゃないはずなんだけど」

まあ結果オーライということで。

「やったよ！アルフレート、敵に当たったよ！」

わたしが飛び上がった喜びと、彼は手でおでこを押さえながら首を振った。

その間にもう一匹、インプが他の冒険者によって倒されていた。絶命した瞬間、灰となって消えて行く悪鬼。元々この世界の者でないからなのか、こうした消え方をするらしい。

「おりゃああー!!」

ローザの手によって回復した戦士が気合いと共にデーモンに斬り掛かって行く。気合いに押されたのか、デーモンの方もヘクターから目がそれた。

どん!という風が起こりそうな衝撃で戦士のバスタードソードとデーモンの腕がぶつかり合う。

「今だ!!」

戦士が叫ぶ。すると、デーモンの背後に回ったヘクターが地面を蹴った。重い革袋を叩きつけたような鈍い音が走る。ヘクターの剣がデーモンの首を貫いていた。

スローモーションのような光景にわたしが目を奪われていると、

「きゃあああああ!!素敵!!かっこいい!!」

後ろから放たれる黄色い声。振り向くとアンナさんとイルヴァの姿。目をハートにしながらはしゃぐアンナさんと、対照的に不機嫌なイルヴァ。

その時、残りの一匹のインプが灰になって空に上がっていくのが見えた。

「にいちちゃん、やるなあ！」

ビール片手にヘクターの肩を叩くのは、先ほどデーモンと戦っていた戦士。

「いや、正直一人じゃきつかったです」

「またまた！あんたこれからいい剣士になるぜ、若いんだし！」
ヘクターの謙遜を笑い飛ばす。

「そおよお！あーもつと早くから見えてたかったあ！」

アンナさんがヘクターの隣りではしゃぐ。

むかむか……。

ここは夕方来たレストラン。騒ぎを収束させた冒険者たちに店主が飲み放題食べ放題を提案してくれたのだ。とはいってももう夜遅いわたし達もそうだけど夕餉の時間では無いため、みんなお酒とつまみが中心だ。わたし達は残念ながらノンアルコールドリンクだけど周りのテーブルでもわいわいと勝利の宴に酔っている。まあ、明らかに先ほどの戦いに参加していたよりも多い人数だと思うけど。イルヴァは戦いに参加出来なかったのがよっぽど不満だったらしく、眉間に皺寄せ料理をバクバク食べつつけている。

「お、もう1人のヒーローだぜ？」

戦士の言葉に振り返ると、1人の男性がこちらに向かってきた。

「よう、いい戦いだっとな」

そう言いながらわたしの隣りに座ったのはひよろりとした軽戦士。手に持つロングボウを見て、わたしは「あ！」と声を上げた。

「覚えててくれたかい、お嬢さん？君もなかなか活躍してたじゃないか」

あの時建物の上から矢を放っていた人だ。上から全て眺めていたのかも知れない。そう思って赤面する私。

「どう見てもひよっこの君らが出てきたときはどうなるかと思った

がな。……しかし、こんな平和な地域でデーモンの具現化が見れるとわなあ。運が良いつつか悪いつつか」

軽戦士のお兄さんはそう言ってテーブルにあったサラダのミニトマトを口に入れた。

「やっぱり珍しい事なんですか？」

わたしの質問にお兄さんはひょいっと首を傾げる。

「珍しいことだろうけど……まあ、デーモンの具現化なんてどの地域でもあり得ることだから……。『アヴァロン』の方なんか行けば日常茶飯事だろうし」

デーモンのような魔界の住民が何かの弾みでこちらの世界に出現することを具現化という。アヴァロンとは地域的に魔界との繋がりが深いのか、しょっちゅうデーモンが現れたりする孤島のことだ。

「良かったじゃないか。我々にとつては貴重な体験ができたんだ」
アルフレートの言い方に何か引かかるものを感じたが、わたしは少々眠くなってきたことから何も言わなかった。

朝日が輝く時間だというのにぼんやりと目が開かない。

「うひゅう……眠い」

わたしは欠伸をかみ殺す。馬車の中を見るとアンナはぐーすか寝てたりする。

「暖かいから余計眠くなっちゃうわね……ってフロロ！寝るなー！」
ヘクターに肩車され、その上鼻提灯を作っているフロロにわたしは怒鳴る。

昨日のオットーの町での出来事に少々はしゃぎ過ぎたわたし達。辛くとも予定はこなさなきゃならないため、急ぎ足で次の村に向かう。しかし眠い……。わたしは向かう先の名も知らない村が、あっちの方から近づいてきてくれないかしら、などとぼんやり考えていた。

「リジア、疲れたんなら馬車で休ませてもらえば？」

ヘクターのお優しいお言葉。しかし皆同じ条件でがんばっていると

アルフレートさえも

いうのに申し訳ない。それにアンナが横になっっているので無理だろう。

「いや、大丈夫……」

「いいわよ」

振り返ると馬車の窓からアンナが覗いている。

「いらっしやいな」

そう言うてにこっと笑った。嫌な予感がするのはわたしだけだろうか。

「あんた達っていつもこんな旅してんの？」

わたしが馬車で一息ついた時、アンナに尋ねられた。

「いやいや、わたし達まだ駆け出しなんでそんなに経験ないんですよ。ファイタークラスの……戦士二人の場合はちよっと違うみたいなんですけど」

わたしは学園での魔術師クラスとファイタークラスの普段の様子を簡単に話して聞かせた。ファイタークラスはいつもモンスターの巣窟の討伐に出かけたりしていること。魔術師クラスは反対に学園に閉じこもってねちねち勉強していること、などを。

彼女はふうん、と気のない返事をする。とわたしの顔をじっと見る。

「な、なんですか？」

「ちよっと頼みたいんだけど」

きたー、と叫びたい気持ちを抑える。はなからそういう話をするためにわたしが馬車に乗るのを快諾したのは目に見えていた。それを避けようとぺらぺらと話し続けていたというのもある。わたしが露骨に顔をしかめ溜息をつくのにアンナは顔色一つ変えない。……大物になる人間ってこういう風に周りの反応はおかまい無しなんだろうなあ。

「まあわたしに出来そうな事なら」

「そう、ヘクターにどんな女性が好みか聞いてきてもらえない？さ

りげなくあたしの事を匂わせる感じで」

ぶほっ！とわたしは盛大に吹き出した。

「ちよつとお！汚いわね！」

「むむむ無理ですって！絶対いや！大体そんなこと聞いたらわたしは気が……」

『気があるみたいじゃないか』という言葉を飲み込む。事実だろうといきなり告白みたいなこと出来るか！

わたしとアンナが押し問答をしていると、急に隣りから声がかかる。

「俺が聞いてきてやろうか」

振り向くといつの間にかフロロが隣りに腰掛けている。

「うお！どっから湧いてきたのよ、あんた」

「面白そうな話してたから」

全然答えになつてない事を言うつと、

「リジアじゃ女の子なんだし不自然なんじゃない？俺が聞いてきてやろうか」

再び同じ質問をしてくる。

『ほんと！？』

思わずアンナさんと声がかぶるわたし。そんなわたしを見てなのかフロロはニヤーっと笑うと大きく頷いた。

闇に蠢く二つの影、建物の二階部分にあるバルコニーに、身を隠すように潜んでいる。

……わたしとアンナさんだったりする。

わたし達が今夜泊まる事になった宿屋。小さな村にある唯一の宿なので高級感はないが、温かみのある佇まいのなかなか良い宿だった。夕食を終えたわたし達は一度昨日と同じ編成で部屋に入り、わたしとアンナだけ抜け出してきたのだ。

フロロに予め言われてやってきたのはヘクターたちが泊まる部屋に面するバルコニー。二階にある部屋は全てバルコニーが繋がっている。たので来るのは簡単だった。カーテンから微かに漏れる明かりを頼りに部屋の前まで来ると、そつと中を覗き込む。

……。い、いたー。三人が各ベットのの上に腰掛けて談笑中のような。くつろぐヘクターを見て和むと同時に、何やってんだわたし、と情けなさがかみ上げてくる。三人の様子からするに何かしら話しているようなのだが、冬場は寒冷地な故に窓が分厚くて何言っているのか全然聞こえない。

「ちよつと、これじゃ意味ないじゃない」

アンナさんの文句に人差し指を口元につけて『静かに』のジェスチャーをした時だった。

『……おつとあけるよ』

くぐもった声が中から聞こえる。フロロだ。彼はわたし達のすぐ側までくると少しだけ窓を開けた。これで中の声が聞きやすくなった分、こちらの物音にも気をつけなければならない。

「しかしまだ半分も行っていないことになるのか。面倒な旅だなあ」
アルフレイトのぼやきが聞こえてきた。

「首都に行くチャンスがあっただけでも良かったよ。あとはフローラの体力が持てば良いけど」

ヘクターの声も聞こえる。

「大丈夫だろ。実物のイグアナでも1週間ぐらい絶食したりするんだ。というかロボットだろう？」

「まあそうだけど、やっぱりたくさん食べれば大きくなるのも早いのじゃないかな」

フローラちゃんにはどういう仕組みか、異次元装置のようなものの中に居る小部屋がある。今は雑魚寝も出来ないような小ささだが、ゆくゆくは宿代もかからなくなるかもしれない。そうなれば便利なのだけど、とはわたしも思う。

3人は取り留めの無い話しをしていたが、ヘクターの一言で話しの流れが変わって行く。

「フロロのそれってさ、自由に動かせるの？」

ヘクターは興味深げに見ながらフロロの尻尾を指差し尋ねる。

「動かそうと思えば動かせる。でもあまり器用じゃないから意味ないけど」

へえ、そうなんだ。知らなかった。自分がいない場でのメンバーの会話もなかなか面白い。

フロロの話してからモロロ族の話になり、フロロ以外の二人が興味深げに聞いている中、意外な話しが出てくる。

「モロロ族は流浪の民。だから会えないけど俺には婚約者がいる。

今は会えないけど成人の儀式を終えたら迎えに行く」

一瞬、時が止まったようになった。ロマンチックな話しだけど……。この話し、確実に嘘である。

フロロがこんなからかい甲斐のある……。いや面白い話しをヘクターならまだしもわたしやアルフレートに話す訳が無い。彼はわたしが此処にいることを知っているのだから。普段の寡黙さはどこへやら、流暢に婚約者話をするフロロ。こういうところにも彼は盗賊なんだなあ、と感じてしまう。

アルフレートは片眉を上げたまま何も言わないがヘクターはというと、

「へえ、すごいなあ。婚約者かあ」

素直に関心していたりする。大変胸が痛む。

「ところでお兄ちゃんはどうなの？」

いきなり場末の風俗勧誘のような顔つきになるフロロ。はじめきよ
とんとしていたヘクターだが、手を振り笑った。

「俺は普通の学生らしい学生だよ。婚約なんて話しに出た事もない」
「そう、じゃあどういう子なら良いと思う？」

「うーん、どうだろうなあ……。結婚なんて考えたことないからど
んな人って言われても……」

「い、いやそうじゃなくて」

「単純にどういう娘がタイプかって話しだろ」

アルフレートがフォローする。

「ああ、そういう話し？どうだろう、そんなタイプ分け出来るほど
周りに女の子いないし」

ヘクターは笑った。

「もっと簡単に考えてよ。例えばブロンドの子が良いとか、黒髪
の方が良いとか」

フロロの何気ない誘導にわたしは喉を鳴らす。わたしの腕を掴んで
いるアンナの手にも力が入るのが判った。

「好きな子だったら何でもかわいいんじゃない？ブロンドの彼女が
黒く染めてきたらそれはそれでかわいいと思うよ」

「くっとうなだれるわたし、アンナ、そしてフロロ。このかわし方、
……もしかしてヘクターって天然！？」

「強いて言えば、何かにがんばってる子はかわいいと思うよ」

このヘクターの言葉にわたしは急に胸が熱くなる。良い言葉だ。そ
う感動すると共に期待が膨らんできた。それってそれって、ヘクタ
ーに褒められたことのあるわたしは印象良いと思っただけのかしら。
その後も「痩せ形がグラマーか」や「背は小さいほうが良いか高い
方が良いか」などフロロが質問責めにするも、はつきりとした答え
は引き出せない。その時、痺れを切らしたのかアンナがぼやく。

「ちょっとお、あたしのことどうなのか聞いてみてよ……、遠回しすぎてつまらないじゃない」

「ばかっ」

わたしはアンナの口を塞ぐ。と、そのままぐらりと体勢を崩し、二人とも尻餅を付いた。

「い、いたあい」

わ、わ、わ、聞こえるじゃん！わたしが慌てて手を振り回した時だった。

「……リジア？どうしたの、そんなところで」

ヘクターの声に振り返るわたし。見ると部屋の中の三人が揃って窓から顔を覗かせている。フロロとアルフレートは苦々しい顔だ。その中で唯一きょとんとしているヘクターに、アンナの上で倒れ込んでいるというどうしようもない状態のわたしは弁解した。

「ちょ、ちょっと星を見に来てたのよ、二人で」

翌朝はどんよりと曇っていた。

ローラスの春は曇ってしまうだけでぐつと気温が下がる。窓にも水滴が出来ていることが表の寒さを窺わせた。急激な気温の変化はこの時期はよくあることだが、やっぱり気分が落ち込むものだ。わたしは手をこすりながら部屋を出た。

「お前馬鹿だろう」

アルフレートの言葉にわたしはぐつと詰まる。

昨日の一件はやはり初めからバレていたようだ。考えてみれば精霊を目視できるようなアルフレートには、バルコニーにわたし達の生命の精霊がうろつろしているのが見えていたに違いない。それでも知らんぷりを貫いていたアルフレートに悪意を感じる。

宿の受付前にある待合室で残りのメンバーが降りてくるのを待つて

いたら、珍しくアルフレートが一番先にやって来たのだ。多分今の台詞を言いたいが為だろうけど。わたしはテーブルに置いてある水差しから一杯の水を酌むと一気に飲み干す。

「……はーっ。しょうがないじゃない、アンナさんに頼まれたんだもん」

「しかしこそそやって来て、何を企んでるのかと思えばくだらないことを」

「だーかーらー、アンナさんに言えればいいじゃん」

「貴様の態度も丸判りだから言ってるんだ」

アルフレートはしばしばこんな調子でわたしを怒る。わたしの祖母と知り合いだけに孫感覚なんだろうか……。それにしても丸判りとは？一体どこまで勘ぐってるんだこのエルフ！わたしが何とか探り出そうとした時だった。

「おはよー」

「おはようございます」

ローザとイルヴァも降りてくる。すぐ後ろにはフロロを肩車したヘクターの姿。このツーショットも見慣れてきてしまった。

「おはよう」

爽やかな顔で言われ、何だか照れくさいわたしは思わず目を反らしてしまう。

してしまった後に押し寄せる後悔。うわー！何やってんだ自分！絶対変だと思われたよ。っていうか失礼だよ。

とその時、アルフレートがいきなり叫ぶ。

「どうしたリジア！そんなに落ち込んでどうする！」

は？とアルフレートを見る全員。

「いや、今リジアがいかに魔術師として不甲斐ないかを説教していたのだ。予想外に凹んでびっくりしている」

それにローザは溜息をついた。

「あんたねえ、事実と違う事言えば『からかい』で済むけど、本当の事言ったらそりゃ傷つく……」

「その言葉も傷つけてますよ、ローザさん」

イルヴァの同調にも傷つくわたし。しかし弁解する気も起こらない。
「それよりアンナさんは？まだ起きてないの？」

ローザの質問にわたしは頷く。

「まだ来てないけど」

誰か呼びに行く？と言いかけた時、ちょうど階段からアンナが降りてくる。

「おまたせ」

うつと思わず顔をしかめるわたし。何を思ったのかアンナの顔はかなり濃い化粧が施されている。元が濃いお顔立ちなだけに舞台メイクか！？と言いたくなるくどさだ。それに加えて何とも甘ったるい香水の香り。

「さ、朝ご飯食べに行きましょう！」

明るく言うつとヘクターの腕を取り、引つ張っていく。

「いや、ちよつと、あぶなっ」

ヘクターが身体のバランスを崩し、上にいるフロロが頭頂部にしがみついているのが見える。

「どうしたの？」

ローザに耳打ちされるが、

「さあ……」

わたしは引きつった笑顔を返すしかなかった。

美味しそうな具沢山スープを前にしても、わたしの心は晴れない。

湯気の間こうではアンナがヘクターに向かって「あーん」など言っ
ってチーズの付いたブロッコリーを口元に運んでいる。

「いや、自分で食べられますから……」

丁寧に断りを入れているものの、ヘクターの顔は困り顔だ。

アンナさん、何を思ったのか「がんばってる子が好き」を曲解しているような感じだ。他の面々はというと、ローザは明らかに引きつ

り顔、イルヴァは無関心。フロロとアルフレートはというと、なぜかニヤニヤ笑っていたりする。ほんつつつとうに腐った奴らだなあ。わたしはむかむかする気持ちを押さえつつ、パンを噛み切る。

おお、美味しい。小さな村の数少ない御飯処だというのに、ウエリスペルト辺りでもやって行けそうな味だ。

「今日は天気が残念な感じだね。コルトールに着くまで降らなきゃいいけど」

アンナの手が懲りずに差し出されたのを牽制したのか、ヘクターが話を振ってくる。

「出来れば早め早めのペースで行きたいところだわね」

色んな野菜類や加工肉が挟まったクロワッサンを頬張りながらローザが答えた。少し不満そうな顔をしながらも自分の食事を始めたアンナさんを見てわたしは気になっていた事を聞いてみることにする。

「ところでフェンズリーの賢者って言われてる方って、『穴蔵のウオン』って呼ばれてませんか？」

いまいち格好良さは無い名前だが、わたしが知っているフェンズリーの賢者ならこの人だ。わたしの質問にアンナは目をぱちくりさせる。

「あら、知ってるの？」

「まあ、一応。存命とは知りませんでしたけど。変わった人らしいですね」

アンナは少し考えるような素振りだ。

「あたしは会ったことないから何とも言えないけど、そんな話しね。でもバクスター家では随分お世話になったりお世話したりって半親戚みたいな扱いらしいわよ。姉様達の結婚式には来てなかったけどね。人嫌いなんですって」

「上手くいくと良いですね、その……」

わたしが言い淀んでいると、察知したらしく大きく頷く。

「そうね……、うちの書庫で眠ってた文献だと知識を授けてくれる魔人が入ってるらしいから、そんなに暴れん坊じゃないんじゃない

かしら」

そう言っアアンナはふふふ、と笑った。こついつところを見ると魅力的ではある人なんだけどね。

村の外まで来ると気温が一段と寒く感じる。街道の脇に寂しげに揺れる草花も露を含んでいるようだ。

「うわー、嫌な雰囲気。リンドブルムでも出てきそう」

「ちょっと止めてよ……」

わたしの冗談にローザは本気で嫌な顔をする。リンドブルムは伝説のドラゴンだ。こんなところにひょっこり出てこられた方がびっくり、というか相当な運の持ち主かも知れない。

天候のせいか皆いつもより大人しく歩いて行く。アンナだけは窓から顔を出してヘクターに話しかけることに必死だ。

「ねえねえ、乗って行けば？ ちよつとぐらいいいじゃない」

そこまで必死に馬車に誘い込むのって、乗り込んだら何するつもりなんだろう……。取って食うつもりなんじゃないかという雰囲気になつた。わたしも目が離せない。ヘクターは苦笑し無言で手を振る。

「んもう！」

アンナは不満げに息をついた。ふとわたしと目が合うと、ちよいちよい、と手招きする。

「乗っていきなさい」

命令形かよ！と突っ込みそうになったが、わたしが乗ればヘクターにしつこく絡むこともないだろう、と乗り込むわたし。後ろからちやっかりアルフレートも付いてくる。

「なんであんたまでくるのよ」

アンナが睨むがアルフレートは涼しい顔のままだ。

「まあいいわ、ついでだからあんた達二人に聞くけど、今の状況ってどうなの？」

アンナの言葉に「？」が頭に点るわたしとアルフレート。思わず同じ台詞を吐く。

『何が？』

「だから！あたしとヘクターのことよ！」

どうって……正直、何も始まってないと思うのですが。

「何だか押しても響いてる気がしないのよねー。ここだけの話し『
どれだけ鈍感！？』って感じ」

「いや、会って間もない人間に毎晩誘いに来られたら流石に引くだ
ろ」

「ちょ、何！？そんなことしてたの！？」

アルフレートの台詞に食いつくとわたしはアンナを睨んだ。

「いいじゃないの！減るもんじゃなし！」

アンナが真っ赤になつて反論する。で、誘いは成功したのかどうか、
が一番気になったりする。

「で、どうだったの？」

顔を近づけて聞くわたしにアンナは顔をしかめた。

「……ちょつとお、なんでそんなにしつこく聞くのよお！」

わたしはぎくりと肩を震わせる。いかん、これ以上追求したらバレ
そうだ。

「上手くいくわけないだろ。あんな獲って食われそうな雰囲気であ
られたら、いくら男でも引くだろう」

アルフレートが「けっ」と吐き捨てた。その言葉にアンナさんは怒
り、わたしはほっと胸をなで下ろす。しかし良い情報もあった。押
し過ぎて引くものなのね。

わたし達三人が馬車の中で大騒ぎをしていると、外では雨が降って
きていた。

「とうとう降り出したな」

アルフレートの呟きにわたしは我に返る。

「大変、みんな大丈夫かな。交代してあげた方がいいよね」

そう提案した時だった。フロロが窓の淵に手をかけて顔を覗かせる。
「この雨、多分もつとひどくなると思う。雨宿りしようと思っけど
どうする？」

「適当な場所があればその方がいいな。馬も雨は嫌がってるはずだ」

アルフレートが言ったのでわたしも賛成した。

方針が決まりしばらくすると、街道の左手に山の斜面をえぐり取ったような窪みを見つけた。これ幸いとばかりに逃げ込むわたし達。馬車から降りて馬を休ませる。

皆の吐く息が白い。わたしは窪みの下にある、まだ濡れていない木片を集めると『ティンダー』の魔法を唱える。小さな火種を起こす簡単な術だ。フロロとヘクターも薪を持ってきてくれる。

わたし達は一息ついて地べたに座り込む。そういえばアンナに地べたは可哀想だな、と何か貸してあげようとするが、すでに自分のハンカチをお尻に敷いてヘクターの隣りに陣取っていた。

「こういう経験したことないから、結構面白いわね」

そう呟く彼女はどこか寂しげだ。

「子供の頃にも無いんですか？外でどろんこになって遊ぶとか」「イルヴァが聞くが彼女は首を振る。

「まさか。お父様が許さないわよ。ただでさえあたしは末っ子で大事にされてきたから」

『大事に』と彼女は言うが、本心でそれを望んでいたんだろうか。それでもその言葉を選んだ彼女の父親に対する絶対的な信頼を感じた。が、どこか脆さも感じるのは考え過ぎだろうか。

「よく許してくれましたね、今回のこと」

わたしは聞かずにはいられなかった。

「……エディス姉様は一番仲が良かったから。兄弟の中では2番目と一番下だから年は少し離れてるんだけど」

「へええ、でも6人中4人は女の子じゃなかった？レイノルズ家って。あたしは一番上の長女さんしか会ったことないけど」

ローザは言ってから慌てて口を塞ぐ。アンナは手を振った。

「いいわよ、もう。『そういう方』なのはもうわかったから」

そりゃそうだろう。ローザ、アンナと直接話す時以外は普通にしゃべってるんだもん。

「お前も馬鹿だな」

アルフレートが冷たく言い放った。……『も』っていうのはわたしのことだろうか？

「性格は正反对だったけど、なぜか一番気が合ったのよね」

そうアンナは自分と姉エディスさんのことを語った。

「正反对つてことはお姉さんは大人しくて控えめと？」

思わず本音が漏れたわたしをアンナが睨んでくる。わたしはそつと目を反らした。

「まあ本当にそうなんだけどね。姉様は兄弟の中でも一番大人しくて可憐で、絵に描いたようなお姫様だった」

あなたもある意味絵に描いたようなお姫様ですよ、という言葉は言わないでおいた。これ以上言つと本気で怒られそうだ。

「姉様が結婚するつて決まった時はそりゃあ悲しかったわ。でも幸せそうな二人を見て、諦めがついたの。だからこそ、ずっと幸せなままできて欲しかったのに……」

エディスさんの嫁ぎ先、バクスター家の落日の日でも思い返されたのか、アンナは爪を噛んだ。

「あの何とかの瓶つてやつ、本当に役に立つんですか？」

「イエトリコの魔封瓶、ね」

イルヴァにわたしは答える。アンナはまた瓶を革袋から取り出すと眺めた。

「だつて見るからに何か力を持つてそうじゃない？こんな閉じ込められて光の粒になつても、しかも何の力も持つてないあたしでも何か感じるものがあるもの」

アンナはふとわたしを見ると、

「そつえばあなたは魔術師なのよね。見てみて、何か感じることはない？」

そう言つて瓶を渡してくる。急に手渡され、おっかなびつくり手に持つて眺めてみる。中はヒカリゴケとも違う、実態が無い光の塊のような球体がぶかぶかと浮いている。これが表に出てくると魔人の姿になるのだろうか。わたしは絵本でみた青い肌の筋肉たくましい

姿の魔人を思い浮かべた。『汝の願いを三つまで叶えてしんぜよう』とか言うのかしら。それよりまず、賢者はどうやって封を切るんだろう。『ひらけゴマ』みたいな呪文でもあるのかしら。

そんなことを思いながら何気なく瓶の上部にあるコルク栓に手をかけた。何の手応えも無くぼろりと栓が抜ける。

え？

「ち、ち、ちよつと……」

アンナが乾いた声を上げる。

「ななななななあんてアンタがあけちゃうのよおお!!」

「し、し、し、知らない!知らない!」

アンナとわたしの絶叫が響いた。次の瞬間、一瞬にして辺りが光に包まれ、空気を切り裂くような爆音が響く。反射的に目を瞑り、静寂が戻った時ようやくよく恐る恐る目を開けた。

「な、何よこれ」

ローザの声がかるうじて耳に届く。わたし達の上空に浮かび上がる異形の姿。漆黒の肌に不気味に光る赤い目。ドラゴンと人の融合のようなその姿は有に二階建ての建物ぐらいはある。オットーの町でデーモンを見ている経験があつたからわかる。これはそんな生易しい存在じゃない。

これが魔人なの?わたしが口を開きかけた時だった。目の前のそれが口を大きく開けたかと思うと、そこに光が収縮し出す。まるでドラゴンがブレスを吐き出すかのように。攻撃される、そう思った時にはもう遅かった。耳に不快な高音と共に光の筋が放たれた。鼓膜がどうにかかなりそうな轟音、息が出来ない程の高温が襲いかかる。ああ、わたし死んじゃうんだ。こんな訳わかんないまま終っちゃうんだ。

そう思ったのもつかの間、いつまでも朽ち果てることのない意識に我に返り目を開ける。

「アルフレート!」

わたし達の前に立ちあがるのは、巨大な光の魔法陣を右手に携え

たアルフレート。これは、シールド？アルフレートは首だけこちらを振り返ると静かに言い放つ。

「……これは魔人なんかじゃない」

ふ、と魔法陣が空に消える。

「これは、悪魔だ」

疑惑

悪魔……、それは神話時代から、人間の守護者である善神と対を成す存在。人間が邪神と呼ぶものに仕える異界のもの。

ローザのように特定の神に信仰がないわたしにとって、善神でさえ遠い世界の話だった。にも関わらず、目の前の存在は見るだけで肌の泡立ちが止まらない。彼の力の何分の一をわたしは感じられているのかもわからないが、震えが止まらないのだ。

漆黒の肌の悪魔は一度の攻撃の後は何もしないまま、にやりと笑うと、そのまま黒い翼を大きく揺らがせた。黒い羽根が宙にいくつも舞う。わたしは場違いに「きれいだな」と考えていた。

雨が降り続ける空を何度か旋回すると、黒い悪魔はどこかへ消えていつてしまった。あとにはただ呆然とするわたし達。アルフレートの大きく息をつく声を聞き、わたしは我に返った。

「アルフレート！」

わたしの声に彼はゆっくり振り返った。見ると額には少し汗が浮かんでいる。アルフレートの中でも大きな力を使ったということだ。

それにしても、エルフであるアルフレートが『召喚魔法』を使えるとは思わなかった。わたしは変なところで感心してしまう。彼の手から放たれていた光の筋、魔法陣が召喚魔法である証だ。精霊と友好的な態度で『お願い』して力を出す精霊魔法とは違い、召喚魔法は『強制的』に精霊に始まる異界のものの力を使う。この性質から召喚魔法を使う精霊使いは少ない。「精霊は友達！」から『言う事聞けやオラ』になるわけだから当然だろう。魔法陣はこちらの世界にくるゲートであり、異界の者が直接姿を現して法撃を行う場合と、先ほどのように魔法陣のみが現れる場合がある。

「大丈夫なの？」

わたしが聞くとアルフレートはひょいと肩をすくめる。いつもと変わらない彼の姿にわたしは安心した。

「明らかに、味方って感じじゃなかったわね……」
長い放心状態から回復したローザが立ち上がった。

「……そりゃそこのお嬢さんに理由を聞けばいいんじゃないか？」
アルフレートはアンナを見る。アンナは紙のように白い顔でただただ啞然と空を見つめていた。

「どうぞ」

わたしはアンナの前に熱い紅茶の入ったマグカップを置いた。アンナはじつとカップから立ち上る湯気を眺めた後、

「ありがと」

呟くように言って紅茶をすする。今夜の宿泊地コルトールの町まで無事にやってきたわたし達。辺りはすっかり闇に包まれている。いつの間にか雨は上がったようだ。わたし達は一軒の食堂兼宿泊施設となっている冒険者用の店に入ると、腹ごしらえに一階にやってきた。

あの後、漆黒の悪魔が去っていったからは皆無言だった。初めて暗黒の息吹に当てられてショックを受けていたのもある。しかし一番大きな理由はといえば、瞳に光が無くなったように呆然とするアンナに何も言えなかったのもある。現にこの町には所謂高級宿泊施設が無かったのだが、大人しく冒険者が多く集まるようなこの宿屋に付いてきた。この態度を見るだけでも、アンナは瓶の中身が姉エデイスを救う魔人が入っていると疑っていなかったことがわかる。それともう一つ、わたしは考えないようにしても頭の中にある事が浮んでしまう。それはわたしの勘としか言いようのないものだが。

アンナは誰かから故意に騙されたと思っている、のではないかということだ。家宝であり、先祖が実際に使ったとされる「魔人を封じ込めた瓶」が偽物でした、というだけでもショックを受けるのは充分わかる。でも、この長い沈黙が不可解な気がしたのだ。偽物だと知ったショックだけなら、すぐに怒りに変わっていきそうな人である。

では誰がアンナにフェンズリーまでイエトリコの魔封瓶を持っていたように指示した？その人物に騙された事がショックなのではないだろうか。

「どういう経緯で、『これ』を運ぶことになった？」

アルフレートが空になってしまった魔封瓶を指で触れながら言った。

「アルフレート……」

ローザがたしなめるように腕をつつく。

「これが『こういうもの』だと疑っていなかった？父親は？本当に何も知らないのか？」

「ちよつと……」

「お父様よ」

わたしの声を遮り、アンナはきっぱり言い放つ。俯いたままだが強い口調だった。

「お父様がこの瓶の話しを出してきたの」

「……それは姉からのヘルプがあつた後のことか？」

アルフレートの質問にアンナは頷く。

「バクスター家がなかなか立ち直れないのは知っていたし、エディス姉様が助けを求めるなんてよっぽど苦しい状況だろうから、つてお父様が地下から持って来たの。その時魔人の伝説を聞かせて貰ったのよ。あたしが見たことある家系図の、一番先頭に出てるご先祖様の名前が出てくる話だった」

こくん、と唾を飲むような音を鳴らす。途切れ途切れになるのは記憶を思い返しているのだろうか。

「二百年ぐらい前の人で魔導をかじってるような方だったらしいわ。人から譲り受けたイエトリコの魔封瓶を開けたら、中から魔人が出てきて『古の力』を授けてくれたんだって。……それでそのご先祖様は財を築いたって」

アンナの話しはわたし達が予想していたような内容だ。

「『古の力』とは？」

今度はわたしが質問する。

「……よくわかんないわ。半分おとぎ話みたいなもんだっだし。例えばローラスの歴史だって何百年も前の話しだどこまで本当なのか、半分作り話みたいなのが多いじゃない」

なるほど、確かにそうだ。古い話ほど王様と女神の息子だとか嘘か真かわからないものが多い。歴史というものを紐解く上で絶対に出てくるのが、事実の誇張、強引なつじつま合わせだ。

「でも」

アンナは続ける。

「そんな一族の礎になったような大切な話なのに初めて聞いた話しだったのよ。だから……少し違和感はあるけど、まさかこんなことになるなんて……」

「じゃあ、あなたは父親が真実を知っていてこの瓶をバクスター家に持って行かせようとしていたと思ってるってことね？」

ローザの質問に一瞬ひやりとした。わたしが気になっていたことをズバリ言われたからだ。アンナは無言のまま、頷いたかどうか微妙な仕草の後、

「あたし、もう休むわ……」

席を立つ。

「ねえちゃん御飯はいいのか？」

フロロが後ろ姿に呼びかけたが、そのまま食堂を出ていった。

「Aセット『キノコとサーモンのホイル焼き』おまちー！」

場違いな明るい声と共に若い女の子の店員がテーブルに料理を置く。

「……食べよっか」

わたしはイルヴァの真っ直ぐな視線を感じ、提案した。わたし達まで落ち込んでいてもしょうがない。どことなく力無く食べ進める皆をぼんやり見て息をついた。

「どう思う？」

わたしは隣りでトマトとフレッシュチーズをからめた物を食べ進めるアルフレートに質問を投げかける。

「論外だろ」

アルフレートは素っ気なく言い捨てた。口をナプキンで拭きつつこちらを向く。

「ま、面白い事はわかったがな。あのお嬢さんはどうやら父親に罪を着せたいらしい」

「違うつてこと？」

「あんな典型的な金持ちの『一族繁栄思想』の男が娘にそんなことやらせるわけがないだろう？下手すりゃ娘はテロリスト扱いだ。そうなりれば一族は終わりだ」

「知らなかったのかもしれない」

ヘクターが言うがアルフレートは首を振る。

「尚更ありえない。そんな詳細もわからん怪しいもの送ったりするもんか。あの手のタイプなら『自分で試してから』だろうな。大体あんな見てすぐにわかるものを……」

「あんたわかつてたのね!？」

わたしがささず突っ込むと、いささか居心地が悪そうにしたものの、すぐに「当たり前だろ」と高圧的な態度に戻った。

「ああ、本当に人間というのは不便だなあ。周りの精霊は狂気にやられてるし、真っ黒いオーラで一杯だったじゃないか。オットーの町じゃ惹かれて出てきた奴らもいたなあ」

「あのデーモンね!」

ローザの声にアルフレートは頷いた。

「……なんで言わなかったのよ」

わたしが睨むと、

「そんなことはさておき」

シカトする。

「娘には金でも送れば良い話だろう？なんでこんな馬鹿げたことするんだ」

実はレイノルズ家も火の車で、ということは無いだろう。こんなのにびりした旅に娘だけのみならず駆け出しの冒険者まで雇って旅費を出す余裕があるのだ。けちん坊とは言われながらもそれなりに潤

ってはいるのだろう。

「……そうするように頼まれたから、エディスさんに頼まれたから」わたしの言葉に全員の動きが止まる。

「アンナが父親のせいだとほめかしたのは、父親より大事な存在を庇う為なんじゃないの？……エディスさんしかないじゃない」

「で、でもリジア、何の為に？」

ローザが聞いてくるがわたしには答えようがない。バクスター家の暮らしに嫌気が差したから？いやいや、そんな無鉄砲な。悪魔召喚なんてことしたってフェンズリーが火の海になるだけだ。そんなことをしようとしているなら精神が病んでいるとしか思えない。会ってみなければわからないが、普通に考えてそんなことは無いだろう。

「もーまた探偵ごっこですか？話しに付いて行けなくてつまらないです。ねえヘクターさん」

「えー！」

イルヴァに同類に認定されたからかヘクターが肩をビクン、とさせた。

「何がわかんないのか言ってみればいいじゃない」

わたしが呆れた声をかけると速攻で返ってくる。

「なんでリジアがああ瓶開けられたんですか？」

う！わたしは思わずエビのフリッターを喉に詰まらせる。

「封印が弱ってて丁度お目覚めの時間だったんじゃない？アンナの話しがどこまで本当かわかんないけど」

ローザが言々とアルフレートが手を振った。

「それもあるだろうが、封印自体がでかい魔力に反応するタイプなんだろ。良かったな、賢者とやらと同等だぞ」

「嬉しくないわよ……。あとは？」

「俺もわかんないことあるんだけど」

フロロが手を挙げた。

「あの『悪魔』どこ行っただの？」

わたしとローザは顔を見合わせ、アルフレートを見る。が、彼も首を振った。

「さあな。溜まった鬱憤晴らす為に破壊活動開始してるんじゃないか？」

「そ、それってかなりマズいんじゃないの？」

「なあに、世の中には我々など足下にも及ばない強者がいるもんだ。人任せかよ！」

難題ばかり積み重なった状況にわたしは溜息をついた。

「明日、アンナにもう一度話を聞くしかないわね。明らかに彼女はまだ何か知ってるんだから」

わたしが言っているとメンバーは皆頷いた。

翌朝、目を覚ますとローザがもそもそと起き上がる姿が見えた。

「おはよ」

わたしが声を掛けると眠気眼をこちらに向けた。

「おはよー」

二人揃ってベットから起き上がる。

「イルヴァ起こして」

最早慣例となった台詞を言う。素早く着替えるとイルヴァの耳元で大声を張り上げるローザに声をかけた。

「ちよつとアンナ見てくる。心配だから」

ローザのオツケーの合図を見るとわたしは部屋を出た。

アンナの部屋の前までくるとノックをする。……反応がない。あれ？起きてないのかな。もう一度、ノックを強めにする。……またも反応はない。

寝てるんだろうな、とは思ったものとりあえずフェンスリーまで行くことに決めたわたし達は、あまりぐずぐずしているわけにもいかない。

「失礼しまーす」

わたしは扉を少し開けて様子を見てみる事にした。部屋の中はまだカーテンが引かれていて薄暗い。完全に寝ているようだ。

怒られてもいいや、わたしはベッドに近づいた。と、ベッドに全然膨らみが無いことに気づく。

「あれ？もしかしてもう起きて下に行った？」

独り言の後、何気なく布団をめくった瞬間わたしは凍り付いてしまった。

『1人で行くことに決めました。リジアたちはウェリスペルトに戻ってお父様から依頼料を受け取ってください　アンナ』

羊皮紙に書かれた短い文章。わたしはそれを引つたくと慌てて廊下に飛び出した。

「あ、リジアおはよ」

部屋から出たところでヘクターに出くわす。

「おは、おはよ！これ！これ！」

「ど、どうしたの？落ち着いて」

わーわーと騒ぎながら羊皮紙を振るわたしの両腕をヘクターが掴んで顔を覗き込んできた。

わ、ちよつときめく状況だわあ。

なんてことを考え、一瞬頬を赤らめてしまったが、我に返ったわたしはヘクターの目の前に羊皮紙を突き出した。

「いないの！アンナさんがいないのよ！」

アンナがいなくなった。それはわたし達の依頼が失敗に終るということだ。

アンナはウェリスペルトの町に戻るように書き置きしていったが、それでのこのこ帰ったところで彼女の父親に怒られるだけだろう。何しろわたし達の今回の依頼は「フェンズリーまで瓶を届ける」ことじゃない。「アンナを護衛する」ことなのだから。

「本当にアンナの字なの？」

わたしの横を歩くローザが聞いてきた。誘拐などの線はないか、という意味だろう。わたしは無言で頷く。女性の文字だったから、だけが根拠の自信ではない。二つの理由からわたしはアンナ自身の書き置きであると確信していた。

一つは「リジアたちはウェリスペルトに戻ってお父様から依頼料を貰ってください」という文だ。この間抜けさがアンナだと感じさせ

た。

どこの世界に「娘さんいなくなっちゃったけど依頼料ください」なんて言っただけはいはい渡してくる親がいるのか。アンナ本人はよかれと思って、という感じだろう。

もう一つが馬車が消えていたこと。誘拐なんかだとすれば馬車まで持って行っても邪魔なのではないか。

馬車が無くなってしまったので、わたし達は完全な徒歩で首都レイグリーンまでの街道を歩き続けていた。コルトールを過ぎると一本道しか無いので初めから予定でもこのルートだったのだ。アンナに追いつくにはなるべく早足で、しかない。

コルトールの町で聞き込みをするか迷ったがフロロの、

「何がわかったところで追いかけるのは同じ」

という言葉で町を出ることを決めたのだ。

わたしは自分でもわからないくらいだちで一杯だった。頭にかつかと血が上る。アンナへの怒り？何も言わずに消えた彼女に対してなのか。自分への怒り？何もしてやれなかったことに対する後悔だろうか。

小鳥が鳴きながら羽ばたいた。前方、街道の右手から何かが飛び出して来る。ギギギ、と不快な鳴き声をあげる浅黒いモンスター、ゴブリンだ。何やら仲間数匹で合図し合っている。ヘクターとイルヴァが武器を身構えた時だった。

「どきなさい！」

わたしのファイヤーボールの呪文が完成する。一筋の光が指先から伸び、空を走っていく。

次の瞬間、お腹に響く轟音と共に熱気が広がった。

「おお……」

アルフレートの呟きが漏れる。わたしの呪文はゴブリンどもに加え周りの木を根こそぎなぎ倒していた。

「お、怒ってんの？リジア」

ローザの言葉にわたしは「さあ」とだけ返した。

急いで進んではいたが、もともと一日じゃレイグーンには着かない道のり。途中ですっかり暗くなってしまったところでアルフレートが立ち止まる。

「疲れた」

子供か！と怒鳴りたいところだったがわたしも大分足にきている。

「キャンプ張るか、どこか宿でも見つけるかだね」

ヘクターが言うのを待ってましたと言わんばかりにフロロが耳をピンと立てる。

「……たぶんこっち側に建物がありそうな感じ？」

とても曖昧な表現だ。聴覚だけでは流石に限界があるか。そう思ったのだが、街道を少しずつれてフロロの指差す方角に歩いてきたら明かりが見えてきた。小さな掘建て小屋の集合だ。そのうちの明かりが漏れている小屋に近づくと宿屋の看板があったではないか。

「ここに泊まれる……の？」

ローザの言う事ももっともだ。どう見ても宿を経営する広さは無い。とりあえず扉を叩く。すると中から白髪まじりのおじさんが出てきた。髭といい恰幅のいいお腹といい、人間というよりドワーフのよきな風貌だ。

「どうなされた？お泊まりかね？」

やっぱり宿を経営しているらしい。わたし達が頷くとおじさんは、「どうぞどうぞ中へ」

と部屋へ招き入れてくれた。おじさんに勧められるまま長椅子とテーブルの椅子に各自座る。部屋を見渡すが、どう考えても外からの様子だとこの一部屋しか無さそうなんです。

おじさんがホットミルクを出してくれる。

「お食事は？」

「あ、頂けますか？」

わたしの言葉につこり微笑む。

「ここで食べて行きますか？それとも部屋に行かれますか？」

「あの、部屋って……」

ヘクターの言葉におじさんは窓の方を指差した。

「隣りの小屋でいいですか？もう一つしか空いてないですが」

聞くと周りの小屋全てがこの宿のものらしい。バンガロー形式というやつだろう。小屋には机などの家具が無いとのことなので、ここで食事を頂くことにした。

「若い黒髪の女の子ねえ」

夕食を頂きながらわたしがした質問に首をかしげるおじさん。

余り物ですが、といって出された夕食だったがボリュームも味も充分なものだった。クリームスープにパン、ハムステーキに温野菜。お腹の減っていたわたし達は恥ずかしいくらいにがつつく。

「結構身なりのいい感じの人です。冒険者じゃなくて」

ヘクターの言葉におじさんは首を振った。

「なら尚更見てないなあ。ま、どっちにしろ今夜は行商人の集団がお泊まりに来てるだけだから若い娘さん自体いないけどね」

フロアの情報通り、この辺りはここ意外にも宿が点在しているらしく「その何処かかもね」とのことだった。アンナをその何処からシラミつぶしに探して行くとしても、そこまで距離は近くないらしいので軽く夜が明けてしまうだろう。

わたしたちは食事のお礼をすると部屋の代金を払い、隣りの小屋へ向かう。途中でアルフレートが、

「部屋代がかかるようになったのが痛いな」

と言って顰蹙を買ったが、正直わたし達の持ち金でこれからフェンズリーまで行くのは確かにキツイ。最悪バクスター家で帰りのお金を工面してもらうはめになったらどうしようという不安も浮かんできました。

小屋の扉を開けるとおじさんにもらったランプを天井中央からぶら下がっている掛け金に引っ掛けた。あとは二段になっている寝台が三つ。丁度6人は寝られる。わたしは寝相の悪いイルヴァを下の段に押し込むと上の段に横になった。

暫くすると早くもあちらこちらから寝息が聞こえてくる。皆疲れていたんだな、と思うものの、逆に冴えてくる自分の頭。疲れ過ぎていて眠れない……そんなパターンかも。

とりあえず目を瞑り数を数えていく。

……あの悪魔、何て言う名前なんだろう、いかんいかん。

……アンナは1人で向かってるのかな。いや、無理だろう。誰か護衛でも雇ったか……でもそうなるわたし達と離れた意味は何？

ああ、だめだ。眠れない。

わたしはむくり起き上がると頭を振った。深く息を吐き出すと周りを窺い、少し夜風に当たりに行く事にした。

表に出ると深く息を吸い込む。吐き出す息と共に頭の中のモヤモヤまで出ていくような感覚に、わたしは微笑み改めて伸びをした。空を見上げると雲の切れ間に満月にはやや足りない月が浮かんでいる。「この天気じゃ女神ルナはご機嫌斜めかしらね」

わたしは満月の晴天の日に地上へと舞い降りるという伝説がある女神の名前を口にする、ゆっくりと歩き出す。

林の木がザワザワと騒ぐ音が胸に響く。なぜかこんな誰もいない夜道を見るとウキウキしたような気持ちになる。根暗なのかしら。そんなことを考えていると、

「眠れないの？」

後ろから声が掛かった。振り向くと上着を肩にかけた姿のヘクターが立っていた。

「え、あ、うん……」

久々に二人きりになったせいか緊張してしまう。

「眠くなるまで話し相手になろうか？」

「いやいや逆効果ですから！とは言えるはずもなく、頷くわたし。ヘクターはこちらに歩いてくるとわたしが見ていたように月を見上げる。

「満月……には早いかな」

「もうすぐだね。明日明後日にはまん丸になるんじゃないかな」

月は雲に隠れたり出てきたりを繰り返していた。

「心配？」

ヘクターの言葉に一瞬首を傾げるがすぐにアンナのことだろうと理解する。

「そりゃあ、うん。1人じゃ何も出来なさそうなのにまさかいなくなっちゃうなんて思わなかったし、色々聞き過ぎたのかもって……」
シヨックをうけている彼女に矢継ぎ早に質問したのは間違っていたのかもしれない。

「でも何で？」

「リジアは特に仲良くなってたから」

何か勘違いされている気がしなくてもない。でもそう言われて悪い気はしなかった。

「わたし、兄弟いないからわかんないけど、大好きなお姉ちゃんに会いに行くの楽しみにしてたと思うのね。届け物することよりよっぽど重要なことだったんじゃないかな」

だからこそ、わたし達が一瞬考えたように魔人の瓶を望んでいたのが姉エイスだとしたら？アンナが私たちを置いて行ったのにはその辺に理由がある気がする。

「リジア一人っ子なんだ。俺と一緒にだ」

「そうなんだ！他のみんなは兄弟いるんだよね。だからちよつと羨ましかったんだけどね」

「みんな兄弟いるんだ？」

「うん、ローザちゃんはお姉ちゃんが二人いるでしょ、イルヴァはお兄ちゃんに妹弟、フロロは妹がいるって言ったかな？アルフレートは……よく知らないけど」

ヘクターは「ああ」と言って笑った。二人とも何となく月を見上げながら会話を続ける。

「わたしが小さい時に、両親が『兄弟ほしい？』って聞いたらしいんだけど、わたしが『お姉ちゃんがほしい』って答えたらしくて、それでじゃあいいや、ってなったんだって」

「かわいい受け答えだなあ」

笑いながら言ったヘクターの台詞に思わずドキリとする。い、いや『受け答え』の部分がかわいって言うてるのわかってるんだけどね。顔の赤さは薄暗い中見えないだろうけど、誤魔化すようにわたしは質問する。

「ヘクターの家族は？どんな人？」

「うち両親いないんだ。俺、じいちゃんばあちゃんっこだから」

思わぬ回答にわたしは絶句してしまった。自分ばかりぺらぺら喋っているな、と思ってした質問が裏目に出ってしまった。

「あ、両親が死んだのはもう何年も前の話だから気にしないでいいよ」

いつもと変わらない優しい笑顔に少し泣きそうになる。うかつだった。そんな思いから話しが出て来なくなってしまった。

「死んだ両親ふたり共剣士だったんだけどね。俺が言うのもなんだけど家庭を持つのに向いてない人たちだったなあ」

のほほん、と言うヘクター。じ、実の息子に言われるってどんな人たちだったんだろ。

「生きてる時からいつも家にいなくて、二人で冒険に行ってた。フラッと帰ってきちゃ土産話なんかして、数日するとまた二人揃っていなくなっちゃうんだよ。……正直、死んだって聞いた時も『あやっぱりか』って感じだったな……。もちろん悲しかったけどね」ヘクターは再び空を見上げる。わたしもつられて見上げる。

「お父さんお母さんに憧れて学園に入ったの？」

わたしが聞くと横で首を振る気配がした。

「よくわかんないけどね。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。俺を放ったらかしにしてた事をじいちゃんもばあちゃんも怒ってたけど、俺が学園に入って剣術を学びたい、って言うても何も言わなかったな」

そう言って「諦めてるのかもね」と笑った。

「リジアはどうして学園に入ったの？」

ヘクターの質問に『魔法がかっこいいから！』と即答しそうになっ

たが、締まらない自分の答えに口籠る。

「わたしも何となく、だよ。うん」

ふへへ、とだらしなない笑いで誤魔化すわたし。と、ヘクターがわたしの顔をじつと見ている。適当な答えに怒ったのだろうか、とも思ったが別に怒った顔ではない。

「え、何？」

焦りながら聞くが、

「いや、何でもないよ」

ふ、と笑みを漏らした。なんか誤魔化された？食い下がるうか迷った時、月が雲に完全に隠れ、辺りが真っ暗になってしまった。ふ、と頬に髪の毛が触れた感覚がした。静寂がただただ広がる。

「そろそろ戻るうか」

冷えてきた腕を擦りわたしは言った。

「眠れそう？」

そう聞かれ、わたしはあの妙な頭の冴えが消えていることに気がついた。

「うん、大丈夫」

二人して小屋まで帰る。他の皆を起こさないように静かに寝台に戻ると毛布に包まる。目を瞑って自分でもわからないうちに、わたしは夢の中へと入っていった。

首都レイグーン

宿屋のおじさんへの挨拶を終えて街道に戻ったわたし達。

「たぶんお昼過ぎには首都に着くんじゃないかな」

ヘクターの上からわたしを見下ろしフロロが言った。ずっと肩車してて疲れないんだろうか。そりゃフロロは軽いだろうけど。

「はい、リジアの分」と言ってローザが綺麗な紙に包まれた何かを手渡してきた。

「何これ？」

「宿のおじさんがくれたキャンディ。旅の人にはみんなにあげてるんだって。幸運のお守りだとか」

「お守り、って食べていいの？」

「いいんじゃない？ 気持ちい大事よ」

促されて口に入れると、爽やかな柑橘系の香りとはのかにミントの香り。甘酸っぱくて美味しい。

「んあつ、これハツカが入ってますう。ローザさんあげます」

「いらないわよ！ あんたが口から出したやつなんて！」

イルヴァとローザのやり取りによりやく日常が戻ってきたような感覚になる。いや、何も進展してないしのんびりしてる場合じゃないんだけど。

気温の上昇を肌を感じてきた時、見晴らしのいい景色の中に建物が見え始める。

「もしかしてもう首都に着く？」

わたしが聞くとヘクターが意外な答えを言った。

「『もう着いてる』って言うてもいいんじゃないかな。レイグーンは町の周囲に壁がないから」

「へええ、それでどんどん大きく膨らんでいった経緯があるのかな」

レイグーンは大昔はそれ程大きな都市ではなかったらしい。私たちの住むウェリスペルトの方がよっぽど大きな町だったらしいのだ。暫く歩き続けていくと、確かに建物の数が増えて行き賑やかになってきた。露店のような姿もちらほら見受けられる。それを見てわたしはポンと手を打った。

「一番大事なことを忘れてた」

何も反応が無いことにわたしは言葉を続ける。

「ほら、ローザちゃん、一番大事なことよ」

わたしの言葉にローザは首を傾げた。

「フローラちゃんの餌！そのためにわざわざ首都行きを決めたんだっただじゃない」

ようやくハツとした顔になるローザ。

「……まさか忘れてたんじゃないわよね」

「な、何言ってるのよ、そんなわけないじゃない。あんたこそ忘れてたんでしょが」

ウソクセーという言葉は置いておいて、わたし達は近くにいた行商人らしきおじさんに訪ねる。

「果物なんかが売ってる所？だったらフォルフォル通りに行った方が良くないかな。あそこは地元の主婦の台所だから」

わたしの質問に朗らかに答えてくれたおじさんにお礼を言い、町の中心部に向かうことにした。次第に家々が密集した風景になり、子供たちが路上で遊んでいる姿も見えるようになる。上空に目を向ければ首都レイグーンの名所といえる国会議事堂、通称『キャンドルハウス』の屋根も見えた。円形の本庁をぐるりと囲む八本の塔がまるでバースデーケーキのキャンドルのようだから、こんな言い名が付いたらしい。

「あ、あれ地図じゃないかな」

住宅街の通りを抜けて広場に出た時、ヘクターが前方を指差す。花壇やベンチ、石像が並ぶ広場の中央に升目が沢山書かれた看板が立っているのだ。近寄って見てみると『首都レイグーン』の文字と大

雑把だが通りの名前なんかを書いてあった。

「フォルフォル通り……ってここかな？」

わたしは背伸びしつつ地図の上部を指す。

「うはは、リジア届かないでやんの」

フロロが嬉しそうにフォルフォル通りの地名をさすった。

「あんたは肩車してもらってるからでしょーが！」

「くだらんことで喧嘩すんな」

アルフレートが押しのけてくる。

「この方向がキャンドルハウスなんだから、なんだ近いじゃないか。この地図でいうと我々は上から来たわけだ」

ほうほう、と全員が頷き、さっそく行ってみることにした。

「おおっ、これは……」

わたしは思わずうめき声をあげた。丁度お昼時ということもあるだろうが、フォルフォル通りとやらにやってきたわたし達の目に飛び込んだできたのは人、人、人の山。今まで通ってきた道も人通りは多かったが「まあこんなものか、ウェリスペルトと変わんないじゃん」ぐらいの気持ちでいたのだが……。ちょっと比較にならないかも。

「ここに全員で突っ込んでいったらほぐれるかもね。待ち合わせ場所決めて行動した方がいいかも」

わたしが提案するとアルフレートがさっと手を挙げる。

「私が待っててやろう。あそこで待ってるから行ってこい」

そう言って一軒のカフェテリアを指差す。人混みが苦手なんだろうし別に良いけど無意味に偉そうなのが気に食わない。が、わたしの文句も聞かずにアルフレートはさっさと行ってしまった。

残りのメンバーで話し合った結果、わたしとローザで露店を回ることにして他の皆はアルフレートと共に待ってて貰う。

「さ、行きましょ」

ふん、と鼻を鳴らし気合いを入れるローザ。とりあえず人の流れに

乗って一通り眺めていくことにした。

「はー、色んな物があるのねえ」

わたしは感嘆の溜息をつく。よく見るものから初めて見る野菜まで色とりどりのものが並ぶ店、氷の器に魚介類を並べた店もあれば巨大な肉の塊もある。魔術の道具か？と疑うような怪しい干物もあった。

「キノコだけ売ってる人もいるよ。あれ全部食べられるのかな」

「見てリジア、あれ全部スパイスみたいよ！」

一々注目して眺めてしまうせいか、あんまり進んでいない。もしかしてわたしとローザじゃサクツと済ませるには向いていなかったんじゃない……。そんな予感がビシバシしてくるが楽しくてしょうがないまあいいか、ちよつとぐらいの息抜きも必要だね。勝手に納得してローザと一緒にキヤツキヤと騒ぐ。

通りの半分程に來た時だった。

「あれ、果物屋さんじゃない？」

ローザが指さした。確かに一段と色彩鮮やかな売り場がある。見たことないぐらい巨大な緑と黒のシマシマ模様の球体が目立つ店。近寄るとわたしも何度か食べたことのあるスイカ、でも大きさがわたしが両腕を回しても届きそうにない巨大なものに『リサのフルーツ屋台』と彫ってある。看板なのだろう。ここなら南国の物もありそうではないか。わたしは屋台の向こう側にいる人物？？どう見てもリサではなさそうなおじさんに声を掛けた。

「すいません」

「はい、いらつしやい。何にする？このシュミシュミなんてどうだ、ジャムにしたら美味いぜ」

「いや……」

「ならこつちのカパランなんてどうだい？そのまま丸かじりも美味いが酒に漬けてもイケる！」

わたしはポンポン飛び出す宣伝文句に負けまいと、勢いつけて質問する。

「探してるものがあるんですけど！イグアナって生き物の餌を探してるんです！」

わたしの言葉におじさんはキョトンとした顔だ。

「イグアナ、って……あの爬虫類の？」

「そうです」

フローラちゃんは厳密に言えば爬虫類ではなくロボットだが、ややこしくなるのでおいておく。

「爬虫類って、確か昆虫とか食ってるんじゃないのか？」

「違うわよ、お父さん」

屋台の奥から可愛い顔が覗いた。十歳ぐらいの女の子だ。この子がリサなのかもしれない。

「イグアナは草食の爬虫類よ。葉っぱを食べるの」

え！そうなの？わたしはローザの顔を見た。

「お前よく知ってるなあ」

「友達の家にいるのよ。果物も食べるけど、あげ過ぎは良くないんですって。その娘のうちではコマツナとかあげてたわよ」

コマツナ……。とってもピュラーな野菜で癖のない葉野菜だ。私の家の近所にある八百屋でも常にあるような野菜。スープにいれると美味い。

「……だって」

「……そう、みたいね……」

ガックリと肩を落とすローザ。

「あげたことなかったの？」

わたしが言つとローザは涙目になる。

「だ、だって……知らなかったし。温室に成ってたベリーの実を食べてたから、てっきり……」

フローラちゃんに温室を宛がった際に、元から置いてあったベリーの木に成っていた実をフローラちゃんは勝手に食べていたらしい。それを見て「ああ、果物を食べるのか」と解釈したローザは果物のみをせっせと与えていた。が、本来は葉を食べる性質なので食傷気

味となった、ということ……らしい。ていうかロボットのはずだろ！ 変なところにリアルで面倒くせえ！

呆気ない幕切れとなったフローラちゃんの餌探し。わたしとローザは町の通信センターへと来ていた。

「皆には言わないで！」

とローザがわたしの肩を揺さぶりつつ叫んだ為、とりあえず解決しておこうとローザの家に連絡を取ることにしたのだ。皆、と言っていたがアルフレートとかアルフレートとかアルフレートとかのことだろう。

フォルフォル通りより町の中心に行った所の商業施設の並ぶ通りに、一際目立つ紫色の建物。大きめの町に一つはある通信センターだ。

魔導による遠距離でのヴィジョンのやり取りや音声のみのやり取り、『コール』が出来る。中に入ると受付のお姉さんが出迎えてくれた。コールの方が値段は安めなので今回はこっちをお願いする。

「こちらへどうぞ」

案内されるまま部屋に入ると、数台の魔導機器の前でグラス状の受話器を持った人達が話し込んでいた。何度か見たことあるけど、やっぱり不思議な光景だなあ。

自宅の所在地に魔導機器の番号を伝えと、係のおっさんはてきぱきとコールを操作していく。ローザのうちには個人のヴィジョンとコールがあるのだ。お金持ち。数秒後、おっさんは手で促してきた。こほん、とローザは咳をするとグラスの形をした受話器を口に当てる。

「もしもし？ ああ……ねえさん？ お父様は……いや、いいわ。ちょっと頼みたいことがあるんだけど……うん、そう。温室にあたしのペットがいるでしょ？……違うわよ！ お、ん、し、っ！ もう、使えないわね……ってごめんなさい！ ごめんなさい！ 切らないで！」
値段が時間制なのを忘れていいのか、イライラしてきたわたしはローザの腕を突いた。

「温室にいるフローラにコマツナをあげて欲しいのよ。コマツナよ。」

ねえさんがやらなくてもお手伝いさんにやってもらって。……え？
嫌がる？わかんないじゃない！かわいいし大人しいから大丈夫！…
…え、あたし？うん、まだまだ懸かりそうで、うん、大丈夫よ。…
…はい、気をつけます」

一通り挨拶が終ると、長い溜息とともにおっさんに終了を伝える。

「はああ……レイノルズのお嬢さんによろしく、だって」

「いなくなった、とは？」

「言えるわけじゃない……」

ローザの言葉にわたしはこくりと頷いた。

帰り際、料金をどうするかという話しになったが、ローザの「ここはあたしが出す」という言葉であっけなく解決した。

皆の待つカフェテリアに行くとフロアの姿が無かった。

「盗賊ギルドに顔出してくる、ってさ」

ヘクターがそう言いながらカップを渡してくれる。ホカホカと温かいココアだ。

「ありがとう」

お礼を言っ一口。ほろ苦さと甘さが口に広がった。

「盗賊ギルドって、何しに行ったの？」

わたしが聞くとヘクターは首を傾げる。

「さあ？何も言ってなかったよ」

盗賊ギルドは他の職業ギルドと違って、どんな小さい村にも必ず一カ所はある力の強いギルドだ。各町のギルドとの横の繋がりも大変強く、どの町に行っても影響力は強い。ただしその場所は一般人には判別不可能。その場所を探しあてるのも一流の盗賊としての必要不可欠な能力らしい。力が大きい分、柵が多くまた反面、有益な情報売ってくれるのだ。

ということはアンナの情報でも聞きに行ったか。

「で、どうだったんだ？何も戦利品が無いようだが」

アルフレートが聞いてくるがローザは聞こえない振りを決めたのか窓の外の通りを見て、紅茶を飲んでいる。が、イルヴァがその顔を無理矢理テーブルへ向けた。ぐきり、と嫌な音がする。

「いたあ！何すんのお怪力娘！」

「オカマに言われたく無いですう。早く結果を言え、ですう」

ローザはわたしをチラリと見ると溜息をついた。

「……黙ってるわけにいかないわよ、ローザちゃん。まあ別にローザちゃんのせいだけじゃないし、わたし達皆知らなかったことなんだから」

わたしが促すと渋々といった様子でローザは果物屋での出来事を話

し出した。

「コマツナ、って……あの何処でも売ってるアレ？」

何気なく傷をえぐったのはヘクター！

「何処でも年がら年中売ってるやつですねえ」

イルヴァは確実に嫌味で言っている。絶対。アルフレートは案の定爆笑していた。

「だーかーらー！全員知らなかったでしょうがっ！連帯責任！」

わたしが声を張り上げるとヘクターは「ゴメン」と謝ってくれる。

「いや、そういうわけじゃ……」

わたしは慌てて取り繕う。ローザはぶちぶちと、

「だから言いたくなかったのよ」

などと呟いていた。

「いやはや、首都まで出向いたのに何も用は無かったわけだ。しかも此処に来る為に受けた依頼が面倒なことになってるとはなあ。お前らも大変だな」

「なに人ごとみたいに言ってるのよ、アルフレート……。ま、あとはアンナさんを見つけるだけ、ってすっきりしていいじゃない」

「リジアってばまた、あの逃げてった悪魔のこと忘れてますよ」

イルヴァに言われてはつとめるが、決して『逃げてった』わけではないだろう。

「あいつに関しては……、アンナさん捕まえたらアンナさんのお父さん、レイノルズ氏に何とかしてもらった方がいいわね」

わたし達にどうこう出来る次元を超えているのは認めなきゃいけない。今回の発端がレイノルズ氏だろうとそうじゃなからうと、どうにかしてもらわなきゃ。もしかしたら第二の魔封瓶（空）みたいなものもあるかもしれないし。

そんな話をしている間に、フロロがひょっこり帰ってきた。

「あーお腹すいた」

「おかえり。何か良い情報聞けた？」

わたしの質問にもただ「お腹すいた」と答えるフロロ。

「……じゃあ、お昼食へに行こうか」

そう言うのにやり、と笑い、

「じゃあ話しは御飯食べながらということだ」

と言ってさっさと出て行く。こんなにのんびりしてていいんだろうか……。さっさとアンナを追いかけるべきでは？という気持ちと、フェンズリーに行くことはわかってるんだからとりあえずは大丈夫、とも思うが。

「どうしたのよ、リジア。御飯に行かないの？」

ローザに言われて我に返ると、皆どやどやとカフェを出て行くところだ。全員『まずは御飯』という思考なのか……。

「まあバクスター家のことはフェンズリーのギルドで聞いた方が詳しい事きけるぜ、なんて言われちゃったんだけど」
そう前置きしてフロロは話し出す。

「首都の人間から見たバクスター家、っていうのも一応聞いこうと思ったわけ。典型的な『都落ち』一族みたいな扱いみたいだね、首都じゃ。あの姉ちゃんはずいぶん親戚だからか、あんまり悪く言いたくなかったみたいだけだよ」

話しながらもクリームスープパスタをはぐはぐ食べるフロロ。

「親戚？」

アルフレートがキラリ、と目を光らせる。

「そう。レイノルズ家とバクスター家、元は同じ一族の出なんだってさ。言っても随分昔の話らしいから『遠い遠い親戚』だけだね。前当主のメルヴィン・バクスターが？……」

「アンナのお姉さん、エデイスの旦那さんのお父さん、って人のことね？」

ポケーっとした顔のイルヴァのためにわたしは復唱した。まあ意味

ないだろうけど。

「そう、あのスパイを匿ったとかいう容疑で逮捕寸前までいったとかいう……簡単に言えば『嵌められた』親父さんのこと」

「私から言わせれば嵌められる隙があった時点で能無しだ」

アルフレートの言葉にローザは頬をひくつかせる。とんでもない暴言だけど、まあそういうことなんだろうなあ。

「今の国政を動かす連中にとっちゃ、昔は領土争いしていた関係がそのまま政治の場で同じように争ってるらしいからね。足の引っ張り合いで誰が一番上まで登り詰めるかしか考えてないんだってさ。その争いに敗れた哀れなメルヴィン・バクスターは地位も名誉も失ってフェンズリーに引っ込んだ、っていうのが旧貴族の間の認識らしいね」

「それってさ、ローラスは平和だからいいけどどこかと戦争、なんて日がやってきたらやばいんじゃないの？」

ヘクターの疑問ももつとモダ。ローラス共和国は凶悪なモンスターも少ないし、何かとトラブルの原因になりやすい古代遺跡なんてのも少ない。一見平和でのどかな国だが内情がこんなじゃ、住んでる身としては心許ない。

「そう思うのは人間ばかり。いつだって争い事大好きな連中だよ、君らは」

アルフレートは面白そうだ。

「こんな時だけエルフみたいなこと言わないでよ……」

わたしはカボチャスープを嚙りつつ呟いた。

「ま、アルの言う事はモロ口族の俺からしても気持ちちはわかるけどね。ええと、とにかくバクスター家の今の評判はそんな感じ。で、それより前にメルヴィン・バクスターがバリバリ国政の場でがんばってた頃の話は」

「ねえねえリジア、デザート頼んでいいですか？」

「好きにしていいいから黙っててよ、イルヴァ」

結構強めの口調で言ったにも関わらずイルヴァは顔を輝かせてメニ

ユーを捲りだす。食べることが一番重要な娘なのだ。

「やり手だからこそ敵が多いタイプだったみたいだね、先代は」

フロロは続きを話し出す。見た目が子供にしか見えない彼がこういう話しをする姿はなんとも不思議だ。

「自分の故郷のフェンズリーに恩返しみたいな事もやりつつ国に尽くす、ローラス共和国に忠誠を誓ったような熱い男って感じだったんだってさ。実際、逮捕劇なんてことが起こるまではギルドの方でも黒い噂なんてのは掴んでなかったらしいから……まあこういうタイプを煙たがる人間は少くないからね」

「じゃあ本当に無実の罪だったんじゃないの？」

わたしが聞くとフロロは首を振る。

「さあね。ギルドの人間も、俺も、本当のところはどうだったかなんて興味は無いし。ただこの辺はフェンズリーでもう一度聞いた方がいいかもね。あとは……ああ、そうだ息子のことだ。メルヴィンの息子、マルコム・バクスター。エディスの旦那」

「ああ、それ聞きたい。あたしもあんまり知らないのよね。家でもあんまり話しに上らない人だったから」

ローザが言つとヘクターがおずおずと手を挙げる。

「あのさ、気になってたんだけど、ローザはなんでそういうのに詳しいの？」

「ぼかん、とするわたし達。何を今更、と思ったが、そうか、ヘクターは知らないんだっけ。」

「ローザちゃん家は貴族みたいなもんだから……」

厳密には違うけど。

「あなたさ、あたしの名前知らないの？」

ローザがフォークを振り振り尋ねる。

「え？ああ、なんか強そうな名前だったよね」

ヘクターの言葉にローザを除く全員が吹き出した。

「……アズナヴールよ。上の名前は出さないでいいわ。……で、プラティニ学園の真面目な生徒であるヘクター君は当然、今の学園長

の名前は知ってるわよね？」

しばし考えるヘクター。と、驚愕の表情に変わる。

「あーあ、アズナヴール！思い出した！アズナヴールだ！……って、え、ええ！？」

「あの一、続き話していい？」

何度目の脱線かわからない話しの進まなさにいい加減、フロロも不機嫌顔だ。わたしはどうぞ、と促す。

「息子のマルコムは親父に輪をかけて切れ者って話したよ。若い頃は何年か外に勉強に行かされたりしてたんだって」

勉強、といっても別に家でも出来ることをわざわざ家から出てるってことは武者修行みたいなものだろうか。政治だけじゃなく、世界を見て回るようなこともしたのかも知れない。

「万を持して実家に戻って、結婚もして、子供こそいないけど非の打ち所の無い跡取り様になったのに、親父がヘマやらかしてお家は落ちぶれちゃった。それでもがんばって復興の為にあれこれ策練してる間に親父が自殺。それでまた悪い噂が立ったもんだから、案外息子は先代を怨んでたりするかもね。もともと先代より優秀な代わりには尖った部分も多かったから。……っていうのがギルドの人の話し」

フロロはふう、と満腹になったお腹をさすった。

「あ、そうそう、アルが喜びそうな話しがあった」

「なんだ？」

「レイノルズのあの旦那、偉そうにしてたけど入り婿なんだってさ」「なんと、じゃあ女系一家なのか。そのへんがバクスターから名字が変わった原因になるのかな？」

「そうかもね。あの親父、俺らには『現当主の……』なんて言ってたけど、厳密に言えば当主じゃなかったってわけさ。ケケケ」

「ふふん、じゃあそのへんを突けば依頼料アップなんて話しも……」わたしとローザが同時に、異種族コンビの頭を叩いた。

「つたく、この二人は本当に……」。

お昼御飯を終えたわたし達はまだ日の昇っている時間であることだし、名残惜しいが首都を発つことにした。とはいってもフェンズリ―に行くには今いる場所から反対方向に出なくてはならないので、町を出るだけでもかなり時間を食ってしまうが。

「北から入って来たんだから南の方向に行けばいいのよね」

わたしが確認するとヘクターが道を指差した。

「こつちに行けば一本道で南まで行けるってさ」

傍らには地元の人であろう籠を持ったおばさんが立っている。

「ありがとうございます」

「いえいえ、気をつけてね」

ヘクターに頭を下げられたおばさんは頬を赤くし手を振っている。

恐るべき天然女性キラー。

教えられた道に出ると大きさからしてメインストリートらしいが、人はフォルフォル通りに取られているような感じだった。

「あーあ、もつと買い物したかったです。せつかく首都に来たのに」

イルヴァがばやく。気持ちはわからなくない。アンナと一緒になら許可とって一泊ぐらい出来ただろうけど。

「しょうがないわよ。また来れる機会を作りましょ」

わたしが言つとイルヴァは頷く。

「そうですね……今回は私もコスプレの集会に間に合うよう帰らなきゃいけないし……」

そっちかい。

黙々と歩き続けていると、町の南端までやって来た為か町の警備団の人が警護にあたっている姿が見えてきた。

「町の外に出るのか？」

先には来た時と同じように建物がちらほら見えるが、一応ここが終

点らしい。わたし達が肯定すると警備団の男性は顎をさすりつつ顔をしかめる。

「どこまで行くんだ？」

「フェンズリーまでです」

わたしが答えると表情が少し緩んだ。

「なら大丈夫かな……。まあ暗くなったら無理せずどこか宿でも探した方がいいぞ。フェンズリーまでなら街道のはずれにちょこちょこ宿屋をやってる所があるから」

「……何かあつたんですか？」

わざわざ警告する出来事でもあつたのだろうか。

「いや、まだ被害は無いみたいだが上級のデーモンの姿の目撃報告があるんだ」

う……。青くなる私たち六人。

「どうした？」

「い、いや、怖いなーって思ってた」

わたしは冷や汗かきつつ誤魔化す。考えてみれば悪魔が出現したつて、普通に国家レベルで動く話じゃないか。改めて事の重大さに気づいたりする。

「少し前に一人でフェンズリーまで向かった女性がいたんだ。もし良かったら軽く目に留めてやってくれよ」

「そ、それって!？」

わたしは皆の顔を見る。

「黒髪でおっぱいでかかった？」

フロロが下品な尋ね方をしたせいで警備団の人は暫し口籠るが頷いた。

「そうそう、キツイ感じだけど美人だったよ」

アンナだ。やっぱりフェンズリーには向かっている。それがわかっただけでも十分だ。警備団のお兄さんに手を振ると、わたし達は首都を後にした。

「作戦会議よ」

わたしの一言にアルフレート以外がこっくりと頷く。場所はフェンズリーまであとちょっとの宿屋。警備団の人の助言もあって昨日と同じ明かりがないと厳しくなってきた辺りで宿を取ったのだ。やっぱり狭い宿なので全員同じ部屋になってしまったけど。

宿の人に聞いた所、アンナらしき人物の話はまたしても聞けなかった。馬がいる分、フェンズリーまで一気に行ってしまったのかも。しない。

二つのベットに六人が向かい合わせに座り、話し合うことにする。隣りにヘクターがいるせいで動悸が止まらなかったりするが冷静を装うわたし。ベットに並んで腰掛けるってエロくない！？意識すぎだろ、という突っ込みは無しで。

「このまま行けば明日にはフェンズリーに着くけど、たぶんアンナはわたし達より早く進んでる。バクスター家には先に着いてると思っただ方がいいと思うの。問題はお姉さん夫婦にどう言い訳したのか、ってことなのよね」

「……正直に話した方がいいんじゃないかな。まあ少しは咎められるかもしれないけど、アンナ自身が自分からいなくなっちゃったわけだし」

ヘクターが言った。

「そうね、でも問題は『エデイスが今回の黒幕なんじゃないか』っていうのがあるのよね」

ローザが腕を組みつつ溜息をつく。その話し自体わたしとアルフレートの憶測に過ぎないんだけど。

「そもそも何で『イエトリコの魔封瓶』を持ってこさせたのかがわかんないのよね。アンナの反応からして、その『持つて行くよう指示した人間』っていうのは確実にイエトリコの魔封瓶が本当は何なのかを知っていた人間だと思うのよ。仮にエデイスだとして考えてみるわよ」

わたしの言葉をアルフレートが引き継ぐ。

「他にアンナが庇いそうな人物がいるか？あの置き手紙が決定的だろう。なんで我々を帰らそうとした？エデイスに会わせたくないからだ。結果を伝えたら一悶着あると踏んだんだろう。しかも父親にも報告されるかもしれない。そうなれば今後、父親は援助なんて切るかもしれない。大体、我々にはあれだけ父親の引き金だと臭わせて、そこに帰れとはいかにもあのお嬢様がやりそうなポカミスだ」「で、本当にエデイスさんが知っていて魔封瓶を欲しがっていたとして、何に使うつもりだったのかがわかんないのよ」

「やけ起こして、とかじゃないわよね」

ローザが心配そうに言った。

「わたしもそれを一番に考えたけど……。あとは考えたくないけど戦争の道具にしようと思ったとかね」

一族復興の為に一発逆転を狙って、大きな手柄を立てようとしていたら。そんなことすれば国内外から非難轟々だろうけど、そのくらい狂人になってたら。

「デーモン一匹出てきただけで右往左往している人間が悪魔を使いこなせるわけなからう」

アルフレートの言うことはもっともだが、わたしはある人物のことが頭にあった。

「そこで、よ。賢者のことがあるのよね。元々魔封瓶は賢者に開けて貰う予定だったんでしょ？彼に何とかして貰おうと思ってたんじやないかしら」

「ウダウダと考えるのが好きだねえ、君達は」

お前が言うな、アルフレート。

そう突っ込みたいが、確かにエデイスさん達に会ってもみない内に、あれこれ考えるのもおかしいのかもしれない。

魔女っ子、うるたえる

翌日、わたし達は一軒の屋敷の前にいた。ぐるりと高い石壁に囲まれた城塞という言葉が思い浮かぶ家だ。クリーム色を基調とした柔らかな雰囲気をしているが、なぜか暗い様子が伺えるのはわたしの先入観からか。

フェンズリーにあるバクスター家である。町きつての名家だからか、家の場所は町民の一人に聞いただけであっさりわかった。はつきり行って無策である。あんだけウダウダと考えてみたが「結局、前に進んで無いですね」というイルヴァの一言で、とりあえず訪ねてみることになったのだ。

どうしようか、と思索しているとメイドらしきおばさんが箒を持って現れた。

「あの、バクスターさんのお宅ですよ」

わたしが問い掛けると、胡散臭さそうな顔でしげしげと睨んできた。

「わたし達レイノルズさんの使いで……」

レイノルズ氏の名前を出した途端、メイドのおばさんは目を見開く。

「まあまあ、旦那様にお使いですね？どうぞお入りになつて」

大きなお尻のメイドさんに促されるまま屋敷内に入って行く。きちんと手入れされた庭と同じように屋敷内も綺麗だ。レイノルズ家よりも『お金持ち！』といった雰囲気は無いが、センスが良いのだからか荘厳な、という言葉がよく似合う。

客間らしき部屋に通される。

「少々お待ちください」

そう言つてメイドのおばさんが姿を消すと、わたし達はソファに崩れ落ちた。

「この反応ってことは、まだアンナは来てないっばい？」

「かもしれないな」

わたしの言葉にアルフレートは頷いた。

暫くすると、ぱたぱたという足音が近づいて来た。先ほどのメイドさんである。

「お待たせしました。こちらにどうぞ」

付いていくと長い廊下を歩かされる。屋敷の奥に通されるということとはプライベートな空間じゃないだろうか。重厚な扉の前に来るとメイドさんはその扉をノックした。

「入りたまえ」

中から聞こえてきたのは若い男性の声。噂の切れ者マルコムだろう。大理石のようなマーブル模様のダイニングテーブルが目を引く部屋、二人の人物が席に着いている。中にいたのは茶の髪に青い瞳という珍しい組み合わせの男性。仕立ての良さそうな服にマントをしている。隣りにいる人物は一目でわかった。アンナにそっくりな黒髪に意思の強そうな眉。しかし受ける印象は正反対である。柔らかくほんわかした雰囲気の女性、エデイスであろう。

「アンナがいないようだが……、君たちは？」

わたしが目配せするとヘクターが答える。

「俺たちはレイノルズ氏の依頼で来たプラティニ学園の者です。アンナさんの護衛でここまで来たのですが、途中で予期せぬ出来事がありまして別行動になってしまいました。アンナさんはまだ到着していないんですね？」

二人はよくわからない、といった様子で顔を見合わせた。

「来ていないが……、君たちがアンナの護衛だったんだろう？ 話がよく飲み込めないんだが」

「あなた、まずはゆっくり話を聞きましょう？」

女性が低音だが心地よい声で夫をたしなめる。さて、どう言い訳したものの。

「それより皆さんに座って頂きましょう？」

女性が優しく言つと、男性の方も我に返ったように雰囲気が柔らかくなった。

「どうぞこちらへ」

わたし達は部屋の奥に進み、手で勧められた席に座る。

「マルコム・バクスターだ」

「ヘクター・ブラックモアです」

二人が握手する。

「こちらが妻のエディスだ。アンナに似ているだろうからすぐにわかったと思うが」

エディスさんは頭を下げる。

「さて、じっくり話を聞いていこうか」

下手にごまかすよりは素直に有りのままを伝えた方がボロは出ない。わたしはヘクターにゆっくり頷き、話を任せる。彼の話し方なら不快感を持たせることは無いだろう。ヘクターは短く咳ばらいすると話し出した。

「まず断っておきたいのが、俺たちが受けた依頼というのはアンナさんをここまで連れて来るということであって、その点でまだ完了しているとはいえないと思うことです」

「それはそうだな。ところでさっきは『まだ来ていないのか?』と尋ねられたと思うが」

マルコムは静かに聞いてくる。ヘクターは淡々と今まで起きたことを話し始めた。学園にきた依頼内容から、アンナが見せてくれたイエトリコの魔封瓶、瓶から出て来た悪魔のこと、彼女の様子が見るからに沈み込んで、翌朝いなくなっていたこと、彼女の置き手紙のこと。もちろんわたし達の勝手な推測を省いた全てである。

「彼女を一人にしたのが軽卒な行動だったと言われるなら、それは甘んじて受けようと思います」

ヘクターはそう締めくくり、黙った。

「それで、アンナは、あのこはどこに行ってしまったのでしょうか」
エディスの言葉には誰も答えられない。わたしは何となく空気を軽くしようと口を開いた。

「あの……わたし達の進みが早くて、まだ彼女一人では着いていないだけなのかもしれないです」

それはそれで心配でもあるが。わたし達としてはアンナを捜す途中で此処に寄ったようなものだ。「いなくなっちゃったんですよ、てへへ」で終わらせる気はないが、それをどう説明すべきか……と考えていると、マルコムが意外なこと提案してきた。

「引き続きアンナを探してもらえないだろうか。君達の寢床ぐらいいは用意出来るし、アンナにもしものことがあつてはお義父さんにも顔向けできないんでね」

これはわたし達にとつてもありがたい。わたしは考えるまでもなく頷いた。

マルコムの提案はこうだ。わたし達はフェンズリーを中心出来るだけアンナの搜索を続ける。七日経ってもアンナが見つからなかった場合はレイノルズ氏に連絡をする。続いてイエトリコの魔封瓶の話になった。

「本当に悪魔が出てきたのか？」

マルコムが眉間に深く皺寄せ聞いてきた。

「……じゃああれは本当にレイノルズ家の先祖が願いを叶えてもらったものだと思わつていたんですか？」

わたしは逆に聞いてみる。エディスに向けてだ。レイノルズ家の物なのだから彼女に聞いても不自然ではないだろう。エディスはわたしの視線が自分に向けられているのに戸惑いの表情を見せたが、これは大勢の前で喋ることに慣れていないからのように見えた。

「あれは……触れてはならない物、とだけ教わってきました。もともと一族に纏わることは長女のグレイスにしか父も母もあまり話そうとはしませんでしたから……」

「そもそもそんなものを送ってくるなんて聞いていなかった。君達には悪いと思うがフェンズリーで封印が解かれるなんて事が起きなくて良かったと思うよ」

マルコムの素直な感想だろう。

「ということは、やっぱりレイノルズ氏の独断だったんですか？」
ヘクターが聞く。

「そうなるかな。アンナが来ることだって君達が出発した後ぐらいに便りが来て知ったんだ」

「……私が軽率だったんです。ほんの少しでも大変さをこぼせば父がどういう行動を取るかは分かっていたはずなのに」

エデイスは目を伏せた。

えーと、取り合えず整理してみると、エデイスさんが実家に『毎日毎日、大変だわあ』と愚痴をこぼしたら、父親のレイノルズ氏が袈裟に受け取って『何か送ってやる!』となったと。それを聞いてアンナも『姉様心配! 会いに行きたい!』と名乗り出たってこと? イェトリコの魔封瓶のことはやっぱりこの二人も知らなくて、それどころか本当に全員、『何かよく知らないけどすごい魔人が入っているらしいから』って認識だったって可能性もあるわけか……。わたしは思わずアルフレートの方を見る。が、彼は窓の外をのんびりと眺めているだけだった。

『夕飯には戻って下さいね』というなんとものんびりしたメイドさんの言葉を受け取ってから、わたし達は再びフェンズリーの町へと出た。アンナを探す為である。町の中を探しても意味がない。町に着いているならアンナは無事なはずなのだから。一旦町の外へ出ることにした。

途中フロロが、

「ちよつと抜けるよ」

と言って路地裏に消えていく。

「まだ何か調べる必要あるんですか？」

イルヴァがフロロが消えていった薄暗い道を見つつ首を傾げた。

「必要なさそうか？」

アルフレートがイルヴァの顔を覗き込む。

「だって……結局、不慮の事故だったみたいじゃないですか。あの悪魔の行方追った方がいいと思いますけど」

わたしは首を振った。

「忘れないで。アンナは『自分からいなくなった』のよ。その理由がまだわかってない。何もなければそれでよし、何かあったのなら」

「あったのなら？」

そう聞くイルヴァの大きな瞳にわたしは言った。

「アンナが口封じに消される可能性だってあるんじゃない？」

わたし達がやらなきゃいけないのはいち早くアンナを見つけること。そう、バクスター家の二人より早く。ふんわりとした雰囲気のエデイスさんに町の実力者然としたマルコムを疑うのは悪いと思うが、とにかくアンナが消えた原因がわからない以上は警戒するべきだ。その時、空から一羽の鳥がわたし達の元に降りてきた。クルクルとわたし達の間を飛び回ったかと思うと、アルフレートの肩に止まる。アルフレートはその鳥が首元に付けている小さな筒を取ると、短く

何かを唱えた。すると鳥はアルフレートの肩から再び飛び立っていく。アルフレートは鳥から取った筒をいじくると、小さな紙切れを取り出した。

「……ほら、面白いことになってきた」

にやりと笑い、紙切れをわたし達の方へと向けてくる。

『カホウ ハ ヤシキノ チカニ イマモ アンチ サレテイル
シキユウ アンナ ヲ コチラニ カエスヨウ オネガイシタイ』

「家宝は、屋敷の地下に、今も安置されている。至急、アンナをこちらに帰すようお願いしたい……でいいのかしら？」

ローザが眉間に皺寄せながら読み上げる。

「これって……まさか」

「ウェリスペルトのレイノルズ氏からのお返事だ。首都から電報を送っておいただね。ようやく返事が返ってきた。ああ、人間の発明品は不便だなあ」

「ちよつとふざけないでちゃんと説明してよ、アルフレート」

わたしは少し苛立ちながら尋ねる。

「レイノルズ氏の疑いを晴らしてやらないと可哀想かな、と思ったんで、ちよつと質問を送ってみたんだよ」

アルフレートは指で紙片を挟み、こちらに振ってくる。

「なんて、……なんて聞いてみた答えなの？これは」

「お嬢さんが来る途中で大事な家宝を無くしたんだが、どうすりゃいい？って聞いたのさ」

予想を超える展開に一瞬頭がぐらぐらとする。

「……レイノルズ氏は、家宝を送るって話し自体知らなかったってことね？」

「そういうことだろうな。レイノルズの屋敷で一度もそういう話しが出ていなかったのが気になっていた」

「あ……」

わたしは言葉を失う。確かに出発前、レイノルズ氏からは一言もその話しには触れられていないのだ。言われてみれば不自然だ。そんな大事なものを運ぶのなら、しつこいほど注意を重ねるのが普通ではないか。それに加えて先程のマルコム言葉、『そもそもそんな物送ってくるなんて聞いてない』と言っていたのだ。マルコムにはレイノルズ氏から連絡が行っていたのだから、娘に何を持たせたのかぐらいはばかしてでも伝えるのが普通だろう。

「ごめん、話しが飲み込めないんだけど」

ローザの声にわたしは我に返った。わたしはローザの顔を見ると説明を始める。

「『家宝を無くしたんだけどどうすればいいか?』って質問に、レイノルズ氏は『地下にあるよ。アンナを帰してくれ』ってトンチンカンな返事を寄越してるのよ。……始めから家宝を送る手筈なら『地下にあるよ』なんて返事しないんじゃない?」

『ワスレテイル』『ジュンビフソク』『テチガイ』……こんな単語が列ぶんじゃないだろうか。少なくとも家宝を安置する場所を教える訳がない。では何故そんな軽率なことをしたのか、といえば恐らくはアルフレートの便りを受け取ったレイノルズ氏は「家宝」の文字を見て慌てて実際のレイノルズ家の家宝を見に行ったのだ。地下に安置されているそれを見て、「なんだあるじゃないか」となった後、「じゃあアンナは何を勝手に持って行ったんだ!」となり、アンナを至急家に帰してくれ、と思い至ったんだろう。

「これで魔封瓶を欲しがった人間は絞られるだろう?初めから目星をつけていたエディスカ、はたまたその裏で旦那であるマルコムが指示していたのか。あとはアンナ自体とも考えられるな」

「な、なんでそうなるのよ」

アルフレートに慌てて反論するわたし。

「なぜ?アンナは言っていたじゃないか。姉が結婚した時、『悲しかった』と。今は応援する素振りを見せていて、実は姉を実家に帰したいと願っていたら?フェンズリーをめちやくちゃにした後、姉

を取り戻そうとしていたのかもしれないじゃないか」

「それならアンナは初めからイエトリコの魔封瓶の中身があのどでかい悪魔だってわかってたはずじゃない。そうだとしたらわたし達に魔封瓶自体をほいほい見せたりしないわよ」

わたしは辺りを見回しながら言った。アルフレートは「面白いと思つて言ったのに」と言いながら肩をすくめた。だから面白がるなっつーの。

夕闇にフェンズリーの町が染まって行くのが、ここからだともく見える。もう少し暗くなればモンスターたちも活動を始めるかもしれない。そう思つたときだつた。

「誰が犯人でもいいじゃないか」

低いうなり声のようなしゃがれた声にわたし達は一齐に振り向く。視界で黒衣の男を捕らえると同時に背中が泡立っていく。

「君たちはここで死ぬのだから」

呪いをぶつけるような悪感情むき出しの声が、耳に響いていった。

「ウィル・オ・ウィスプ！」

ローザの声に反応して、無数の光の球が現れる。ローザの指の動きに従い、光は男に向かって飛んで行く。ジジジ！と熱い油に水を注いだような音がし、男の周りに漂っていた何かを打ち消した。

「良い反応をするじゃないか！」

黒いローブに覆われた顔はよく見えないが、口元を見るに老人だ。「ふっ！」

気合いと共にイルヴァ、ヘクターが突っ込んで行く。二人が同時に武器を振り下ろした時、ガツ！と嫌な音がする。見えない魔障壁でも張られているのだらう。黒衣の男に届く前にはじかれた。

「何者よ！」

わたしが叫ぶと男が笑つた、ように見えた。

「哀れな魔術師め。過ぎた力を持っているばかりに余計な詮索をす

るはめになつたな」

男は真つ直ぐわたしに向けて言った。何のこと？と考える間もなく、男の手元から一筋の光の束が伸びてきた。

「リジア！」

わたしの身体はその光の束に絡めとられる。ホールド・ウィップの呪文だ。魔法のロープで縛られた身体は痛みはないものの動かない。が、この魔法にはわたしは思い当たることがあった。

「こおんなもの、きくかあああ！」

音こそ立たないが、ぶちぶちと面白いように切れていく魔法の一筋。何て事は無い。男の魔力を私の魔力が上回った結果だ。何となく見た目が乙女としては恥ずかしい。

「なんと！」

男は感嘆の声をすると笑い出した。

「面白い、実に興味深い！」

笑っている隙が命取り。アルフレイトの呪文が完成する。

「アンチ・プロテクティブ」

男を中心にして巨大な白い光のサークルが現れた。マナの暴走によって起きる暴風があたりを巻き込む。わたしは足を踏ん張った。

これで男のシールドは消えたはずだ。それに気づいたのか、男が慌てて呪文を唱え出した。が、

「がっ……」

男の口から血飛沫が飛んだ。脇腹をヘクターの剣が、太ももをイルヴァのウォーハンマーが薙いでいる。ほっとした息を漏らしたのもつかの間、

「ええ……！」

わたしは男を指差す。

「消えた……」

ヘクターが呟くと、ハッとしたように手に持つ剣を見る。

「血は付いてますね」

イルヴァも自分のウォーハンマーの先端をしげしげと眺めた。

「へー、面白い事があったんだね」

フロロはわたし達の話を聞いて間抜けな声を出した。

「何も面白くないわよ」

ぶすつとわたしは答える。

すっかり暗くなってからバクスター家に帰ると夕食がすでに準備されていた。

「遅かったですねえ。旦那様たちはもう、済まされてしまいましたよ」

というメイドさんの言葉を受けて夕食の席にはわたし達のみであった。メイドさんの言い方も夕食の席に揃わないことを咎めるというより、しっかり食べてくれなきゃ！という母親っぽい優しさを感じた。

「でも俺、リジアが魔法のロープをぶちぶち切るところなんて見たかったよ」

フロロは空豆のスープを飲みつつしみじみ言う。

「あんな芸当できるのリジアだけだもんなあ。貴重な光景だ。あの男が隙を作るのもわかる」

アルフレートに言われても全然嬉しくない。

「わたしの話はもういいから！……結局あの男、なんだったのよ」
あの後、男のいた場所を調べても飛び散った血の跡を残すのみで何も手がかりは残っていなかった。血が飛んだのだし、幻を見せる魔法『イリュージョン』のたぐいだとは考え難い。それでもきれいなつぱり消えてしまったのは男が実態を持っていなかったような気がするのだが。

「敵なのは確実ですよ。斬り難い相手っていうのが不満ですけど」
「同感」

珍しく意見が合うイルヴァとヘクター。

「……やっぱりわざと急所ははずしてたんだ」

ローザが聞くとヘクターは苦笑する。

「捕らえて話を聞きたかった……ってというのは言い訳で、やっぱり人間相手ってというのは、ね」

「イルヴァは魔法使うのが嫌だったですう」

イルヴァの言葉に少々顔を引きつらせるヘクター。話しが合ったというのは幻想だったのだ。

「で、フロロの方はどうだったの？」

ギルドに行ってきたはずのフロロに問うと、フロロは目線だけを部屋中に泳がせる。

「……聞かれちゃまずいことは部屋に戻ってから、ってことで」

そうか。バクスター家について聞いて来たはずなので、食堂で堂々と話すのはまずいか。この屋敷に留まることが出来たのはエディスとマルコムに目を光らせるには丁度良いが、話し合いに場所を選ぶ。

屋敷の二階部分に宛てがわれた部屋に移動する。パーティーションで一応区切られているが、全員同じ一室だ。しかし相当広い。わたしは部屋の中央にある一人掛けソファに沈み込むとフロロに問いかけた。

「で、どうだったわけ？」

フロロはベットにごろりと転がると枕をクッション代わりにお腹に抱えた。

「……どっちの話しからが良い？」

「よくわかんないけど、インパクト強い方で」

「あそう、リジアが言ってた『穴蔵のウォン』って賢者、もう死んじゃってるって」

「ええ！？」

わたしはソファから跳ね起きた。

「インパクトあった？」

「……あつた」

フロロに答えるわたしにローザは不思議そうな顔をした。

「元々高齢なんでしょ？ アンナが知らなかったのは単なる連絡ミスかもしれないし、いちいち連絡しないだろうしね、懇意にしてる賢者が死んだなんて」

「そうだけど、……もしかしたらあの黒衣の男がウオンだったんじゃないか、って思ってたところだったのよ」

高齢であることに加え、黒魔術師として有名な人だったのだ。黒ずくめの格好にも頷けるし、彼がわたしに言った『過ぎた力を持つばかりに』というのはわたしが魔封瓶の封を解いたことを言っていると思ったのだ。ウオンだったとしてもわたしが開けたことをどうやって知ったのか疑問は残るが、少なくともイエトリコの魔封瓶の存在を知っている人物で当てはまる人物像そのものだったからだ。

「黒魔術師がネクロマンサーにレベルアップした、のかと思ったらネクロマンサーに使われる側に堕ちてしまったのかもしれないな」
アルフレートが感慨深げに呟いた。

「で、でもウオンって賢者だったとして、なんであたしたちを襲ってきたわけ？」

ローザの問いには誰も答えられない。わかるわけがない。

「とりあえず、フロロの話しを聞いてからにしましょ」

わたしはフロロに話しの続きを促した。

「この家の一族の話しはあんまり目新しいことは聞けなかったんだよね。評判は良かったよ。先代も今の当主も、フェンズリーの町にお金を落としてくれるし、盗賊ギルドを締め出すようなまねは絶対しないし、で」

それって今も困窮してはいないように聞こえる。経済的に困っていないのにわざわざ実家に愚痴を言ったエディスさんって、やっぱり怪しい？

「ああ、大事なことを忘れてた。アンナ姉ちゃん、やっぱりもうフェンズリーにいるみたいね。このへんをバクスターの嫁さんによく似た

女がうついついてるのを見たって聞いたんだった」

ぶほっとローザが紅茶を吹き出す。

「な、なんでそんな重要な話を真っ先にしないのよ!」

「下じゃしにくかったから黙ってるうちに忘れてた」

「下じゃしにくいつて、エデイスさんたちにも言った方が…… って
そうか」

残念ながらあの二人の容疑が晴れないうちはアンナには会わせたくない。しかしアンナもどうして訪ねてこないのだろう。

「どっちかに会いたくないんだろうな」

わたしの心を見透かしたようにアルフレートが言った。

「……わたし、屋敷の周り見てくるよ」

わたしが立ち上がるとローザとイルヴァも立ち上がる。

「あたしも行こうか?」

「そろそろ行っても目立つただけだろう。屋敷の人間にも、アンナにも見つかる可能性が高くなるだけだ。アンナは我々にも会いたくないんだぞ?」

アルフレートは静かに言った。

「……俺が行く。リジア一人じゃ危ないから」

ヘクターがゆっくりと立ち上がった。

屋敷を出る途中、エディスさんに遭遇したが、

「散歩に行ってきます」

と言うとにこやかに「気をつけてね」という言葉のみをくれた。二人だけでデートだとも思ったのかもしれない。悔しいがアルフレートの『ほーれ、だから言っただろう?』という言葉が聞こえてきそう。ここで六人そろそろ揃っていたらもつと不思議がられただろう。

屋敷の門をくぐると満点の星空が見える。

「とりあえず、屋敷の周りをぐるっと回ってみよう」

ヘクターの提案にわたしはこくりを頷いた。格好つけているわけではない。緊張で声が出ないのだ。ゆつくりと二人並んで歩いていく。屋敷の周りは閑静な住宅街なのでとても静かだ。

「……ヘクターがいればアンナも出てくるかもしれないね」

黙っているのも気まずいのでわたしは口を開いた。……我ながら選んだネタは最悪だと思う。

「なんで?」

ヘクターは一瞬の間をおいて聞いてきた。なんで?と聞かれるとうも答えにくい。

「アンナが……気にしてたから」

ややぶつきらばうに答えてしまった。恥ずかしさからだけど感じ悪かったかも。

ヘクターが歩みを止めるのに気づいてわたしは振り返った。ヘクターの顔が明らかに困っている。喉のあたりがちくちく痛んだ。困らせるつもりはなかった、と言いつつ訳したくても出来ない。わたしがこの話を振った時点で良くなかったんだろう。

「アンナは俺の事気に入ってたのかな」

いや、気に入るってレベルじゃないと思う。ヘクターは珍しく少し

不機嫌に見えた。そんな様子を見てわたしは動揺してしまった。馬鹿なことだがいつの間にか彼のことを「絶対に怒らない人」と見ていたことに自分を殴りたくなる。何か言わなきゃ、何て誤魔化そう。卑怯な考えだが、そんなことがグルグルと頭を回る。

「すごく、仲良くなりたがってた。……す、好きだったんだと思う」わたしは自分でもなんでこんな事を話しているのかわからなかった。話さない方がいいことだとわかっていのに、一度開けた栓はなかなか蓋をしてくれない。

「どんな色が好きなんだろう、とか、どんな食べ物が好みなの、とか……どんな女の子が好きなの、とか。……わたしもよくわかるから」

言いながら思う。わたしがアンナを信じられる理由がようやくわかってきた。こんな、こんなことを想う彼女が恐ろしいことなんて考えるはずがない。わたしは自分でもびっくりするほど大量に流れ出る涙を止める術がなかった。

ヘクターの手がわたしの頬に触れる。少し冷たかった。

「アンナ、出て来なかったね」

わたしの手を引きつつヘクターが言う。

「リジアの勘違いだったんじゃないの？」

何のことだろう？と考えるからさっきの話しかと思い、手を振った。

「いやいやいや、ていうかみんな気づいてたから」

わたしが言う「そう……」とまた困り顔になる。屋敷を一周した辺りで、

「俺、好きな色、白だよ」

ヘクターが急に言った。唐突すぎて何かと誤ってしまった。どう返そうか困惑したが、律儀に答えてくれた彼の気持ちが嬉しかった。

「……食べ物？」

「うーん、アボカドとか好きかな。肉も好き。甘いものも好きだよ」

「嫌いなものは？」

「あんまりないけど卵の黄身が嫌い」

思わずわたしは少し笑ってしまう。

「じゃあ好きな女の子のタイプは？」

「んー、内緒」

……ちえ。今ならさらりと聞けそうだったのに。

「リジアは？」

わたしは少し考えてから答える。

「好きな色はピンクとか赤とか紫」

ヘクターが少し笑った。わかりやすいからだろう。

「食べ物？」

「好きなのはエビとか貝とか、嫌いなものは油っこいの。……わたしも甘いものは好き」

そう言っているとヘクターと目が合った。

「じゃあリジアはどんな男が好き？」

「……内緒」

わたしがうつむき答えるとヘクターは「同じじゃん」と笑った。

二周したところで諦めて部屋へ戻ることにする。屋敷内を歩いていると、今度はマルコムと遭遇した。

「おや、こんな時間まで見回りかい？」

わたしがどう答えたものかと迷っているとヘクターが答える。

「もしかしたらアンナさんが来ているかもしれないので」

マルコムは「そうか」と呟くと、早く寝るように言ってきた。

「明日も町の外に出るんだろう？あまり無理しない方がいい」

わたし達は気づかいにお礼を言うと部屋へと戻った。

揺れる町フェンズリー

「まさか待たずに寝てるとはね」

真っ暗になっっている部屋を見てわたしは溜息をついた。ローザたち残りのメンバーはすでに夢の中だ。

「そろそろ旅の疲れも溜まってきてる頃だししょうがないよ」

ヘクターはまるで神かと思う程優しい。そんなに人間が出来てないわたしは鼻息荒く空いたベットに潜り込んだ。

「お休み」

ヘクターの声がパーテーションの向こうから聞こえ、わたしもお休みを返す。横になって足を伸ばすと、足の裏がじんじんとする。わたしも普段、歩き回る方ではないので大分キツくなってきた。早く寝よう、と目を閉じた時だった。

（どうだったの？）

「うひょう！」

耳元で囁かれ、わたしは思わず声を上げる。口を塞がれ「しーっ！」
つと人差し指を立てるのはローザだ。

（な、何よ！？）

わたしも小声で返す。

（だからー、二人で夜の町に出て、何か進展あったかって聞いているのよ）

ローザの言葉にわたしはみるみるうちに顔が赤くなっていくのが自分でもわかる。

（な、な、何言ってるのよ！何もあるわけないじゃん！）

（えー？もったいない）

（い、いやいや、っていうかローザちゃん、何でそんなこと！）

（何で、って……気づいてないとも思ってたわけ？）

ローザの言葉がさっくりとわたしの胸に刺さる。

（……気づいてたの？その、わたしが……好きって）

わたしはパーテーションの向こうを指差した。ローザは心底呆れた顔になる。

（当たり前じゃない……。気づかないのってイルヴァぐらいだと思うわよ？）

通りでさつきはヘクターが同行を名乗り出た時点であっさり退いたわけだ……。

こそこそ小声で話すのに疲れてきたのか、ローザはテラスに出るガラス扉を指差した。『外で話そう』と言っているのだろう。わたしは頷いた。音を立てないようにテラスに出ると、屋敷の壁側に置いてある丸い石作りの腰掛けに座る。

「で、どうだったのよ、デートは」

ローザはわたしの顔を覗き込んできた。

「だから、本当に何も無かったってば。これは本当！」

わたしが強く言うところローザは、

「なんだー、つまんない」

と足をぶらぶらさせた。

「アンナの話しをしてただけだよ。……あと好きな色とか食べ物とか」

「え？何それ。それだけ？」

それだけとか言うなよー。がんばったつもりなんだよー。

「っーか、いつから気づいてたのよ……」

「えー？かなり前からだけど。リジア、ヘクターの前だけ女の子になっちゃうんだもん。かわいかったわよ」

まあ、自分でもバレない方がおかしい態度だったかもしれないと思うけど。

「普通なら向こうも気づいてるでしょ、って言いたいところだけど、彼、相当頭のネジ飛んでるっぽいからね」

ローザがさりと言う。

「それじゃ馬鹿みたいじゃない！止めてよ！」

「でもさー、あたしだってリジアがいつ相談してきてくれるのか待

つてたのに、結局全然言ってくれないんだもん。さみしいわあ」

「そりゃあ、わたしだって、遠慮してるところがあっただし……」

同じメンバーで色恋沙汰なんて、面倒だと思われる気はしていたのだ。

「でも普通、女の子っていったら、聞いてもいないのに好きな人の話をべらべらするもんでしょ？今時一人で悩むって漢って感じだわ。男じゃないわよ、漢って感じ」

そうかなあ、っていうかあなたに言われたくないんですけど。

「まあ、アンナとか見てるとそうかもしれないわね。『恋してるの楽しい！』って感じがしてたし」

ヘクターの前ではしゃぐアンナを思い出し、わたしは呟いた。

「リジアの顔、怖かったわよ。アンナがべたべたしてる時」

「うそ！？」

「そうよお、自分だってガツガツ行けばいいのに、じとーってしてたわよ。そんなんでもし、ヘクターが満更でもないなんてことになつてたらどうしてたわけ？」

そ、それを突かれると痛い。

「人に取られちゃったら諦める程度じゃ駄目よ！あんただでさえ趣味は暗いんだから、本気で呪術とかやりそうだし」

失礼だな！とわたしが反論しかけた時、ローザの言葉のある部分が引っかけ始める。何か聞いた事あるフリーズな気がしたのだ。

「あたしも応援してあげるから、これからはもっと……」

「ちよつと待って、ローザちゃん」

わたしは手でローザの話を制した。何か、何かが浮かび上がりそうな気持ち。くっ付きそうでくっ付かないパズルのピースをいじくり回しているような……。

「あ」

わたしの頭に光が射す。絡まった毛糸が解れて行く。

「な、何？どうしたの？」

「……起こして」

「え？」

「皆を起こして、今すぐ！」

わたしは立ち上がると、部屋へ掛け戻った。

わたしは全員の顔を見回す。イルヴァは今だに寝ているが構わず話し始める。

「アンナにイエトリコの魔封瓶を持って来るよう指示したのは誰か、わかった気がするのよ」

「本当？」

ローザの問いにわたしは頷く。

「別にものすごく意外な人物でもないから、驚くような事でもないけど、十中八九間違いないわ」

「エデイスか、マルコムかってこと？」

フロロが聞いてきた。

「わたしはマルコムだと思う」

わたしが言うつとアルフレートが興味深気に身を乗り出す。

「理由は？」

「さつき帰ってくる時にマルコムに会ったのよ。出掛けていた理由を聞かれたから『アンナが来ているかもしれないから』って答えた。そうよね？」

わたしがヘクターの顔を見ると彼は頷いた。

「マルコムは一言、『そうか』と言った。これって変じゃない？義理の妹が家に来るなら、普通に門を開けて入ってくるはずじゃない。なぜわたし達が『わざわざ家の外に行ったのか』聞きもしなかったのよ？」

「家に素直に入ってこない理由を知っているかのようだな」

「そうなのよ。アンナは自分が危険人物だとわかってしまった。だから直接訪ねてくる真似は出来ない、ってね。実際、アンナはエデイスさんだけに交渉する隙を伺っているんだと思う」

わたしはもう一度皆を見る。

「もう一つは、今回のことが『誰かの指示によるもので、アンナはその人物を庇う為に消えたんじゃないか』っていう話しの基本に戻るわよ」

アンナのショックを受けた顔、父親の指示だったことをほのめかした後、翌朝には消えていた彼女を思い浮かべた。

「父親に罪をかぶせてまでアンナが庇いそうな人物、っていったらエディスさんしかないと思ってただけど、マルコムでも充分あり得るのよ」

「なんで？単なる義理のお兄さんじゃない？そりゃ元は同じ一族の出で普通よりは絆深い可能性もあるけど」

ローザの言葉にわたしは首を振る。

「アンナは、マルコムのことが好きだったのよ」

皆がぼかんとした顔になる。

「アンナがエディスさんが結婚した当時の話しをした時のこと、思い出して。……『姉様が結婚して本当に悲しかった。でも幸せそうな二人を見て諦めた』……諦めたっていったのよ、彼女」

仲の良い兄弟が結婚した感想としては随分大げさ、というか阻む気でもあつたかのような表現だ。

「……正直、女性特有の勘、というか、鋭い指摘だなあという感じだ」

アルフレートが感心したように言った。

「冷静に考えてみれば、イエトリコの魔封瓶がどういうものなのか、真実を知っていそうなのはマルコムが一番可能性高いと思うのよね。アンナはあの反応だったし、レイノルズ氏といえば悪魔が封じられていたような物が無くなっているのに『家宝はあつたよ』なんて間抜けな返事よこすぐらいだし。エディスさんはそういう家庭で育った人だもの、知る機会は無かつたんじゃないかしら。というより知っていたらすでに持ち出していると思う」

「マルコムは？」

フロロの問いにわたしははまだ纏まりきっていない頭を回転させる。
「マルコムは……バクスター家とレイノルズ家は元々同じ一族だった、って言うてたわよね。どういった経緯で別れたのかわからないけど、イエトリコの魔封瓶はバクスター家の方に言い伝えられていたのかもしれない」

「ありえるな」

アルフレートが頷いた。

「で、どうする？」

「何とか、エデイスさんと個人で話せないかしら……」

わたしはあれこれ考えてみるが、どうやっても良い理由は思いつかない。

翌日、朝食を終えたわたし達は屋敷を出る。エディスさんと接触する機会を窺いたところだが、アンナを探すというのがわたし達に課された使命のため屋敷に居座るわけにもいかない。門をくぐる前にフロロが、

「俺が残る」

と言いついて裏庭の方向から屋敷に消えていった。隠れて潜入するつもりなんだろう。

「私達も町の外へ出る必要はないわけだな」

アルフレートが言った。アンナがすでにこの町にいることはわかっているのだから、もう町の中を回ればいい。町中なら昨日の黒衣の男のような者が襲ってくる心配も無い、というのもある。

「時間をもつたいたい。二手に別れよう」

ヘクターが提案すると、ローザがアルフレートとイルヴァの腕を取った。

「こういう組み合わせでどう？」

にこやかに言うローザの袖を引っ張ると、わたしは小声で抗議した。（こつというのが嫌だったから言わなかったのよ！）

（いいじゃない！本当はうれしいんでしょ！）

どん、と押され、よろけたわたしをヘクターが後ろから押さえてくれた。

「じゃあ、よろしく」

手を振り去っていく三人。

「……じゃああの三人とは反対から回ろうか」

ヘクターに言われ、わたしは大きく息をついた。

住宅街を抜けて、少し賑やかな通りに出た。なんだか甘い匂いがす

る。見回すと一軒の屋台に子供が多く集まっているのが見えた。

「これ、カステラの匂いじゃない？」

わたしが言くとヘクターはわたしの顔を見る。

「覗いていいとか？」

二人とも甘いもの好きだしね、と笑った。

屋台に近寄ると青いつなぎを着て腕まくりをしたお兄さんが、小さな凸凹がある鉄板を忙しくひっくり返している。二枚を重ねてある鉄板を広げると一口大のカステラが綺麗なきつね色で現れた。わたし達の顔を見るとお兄さんは「いらっしやい」と笑顔を見せる。

「20個で50リーフだ。どうだい、歩きながらも食べられるぜ」ヘクターがポケットに手を入れると素早く支払う。わたしは鞆に財布があるので出遅れてしまった。

「まいどありー、おねえさんかわいいから二個おまけしといたよ」

一瞬いい気分になるが、まあ女の子相手には同じことをしているのだろう。一瞬にして冷静になるのがわたしのかわいくないところ。

「はい」

カステラが入った紙袋をヘクターが渡してきた。

「え、いいよ。ちょっと横から貰うから」

わたしが断ると少し強引に押し付けて、

「俺が持つてるとリジア取らなそうだから」

そう言つて、一つ口に放り込んだ。

「またまた、そんなこと言つて自分が持つてると恥ずかしいからでしょ」

屋台のおにいさんに言われてヘクターは「ばれてるか」と笑う。なんてスマートな人なんでしょう。女っ気ない生活送ってきたなんて絶対嘘だわ。

ふと、屋台に首をつつこんでいる子供が目に入る。金髪、銀髪、茶髪と並んでいる頭を見ているとメダルの色みたいだな、と可愛らしさに顔がほころぶ。屋台のおいさんは子供たちを手でしっし、とあしらった。

「ほら、お前らには今日の分はやっただろ。さつさと帰んな」

「ガスリーがやってる日だと一日二個くれるのに」

「そうだ、ケインはケチだ」

「けち」

口々に言う子供をおにいさんは手を振って怒る。

「やるだけでもやさしいじゃねーか！　たく、マザーターニアに言いつけるぞ、物乞いみたいなマネしてるって」

子供たちは顔を見合わせると大人しくなる。ヘクターが彼らの肩を叩いた。振り向く子供の口にカステラを投げる。びっくりした顔をしながらも口を動かす子供たち。

「悪いねえ、お客さん」

おにいさんは頭を下げた。

「おにいちゃん、やさしいな」

「ケインとは違うな」

「お力ネ払ったものくれたもんな」

子供達はもぐもぐとしながら口々に言う。

「君たち地元の子？」

わたしが聞くと三人揃って頷いた。

「じゃあちよつと聞きたいことがあるんだけど、いい？」

地元の子供なら、アンナの姿を見たかどうか聞けるかもしれない。

子供たちは顔を見合わせるとこ、つと笑った。

「いいけど」

「教えてあげるかわりについてきてよ」

そう言うわたしとヘクターの手を引っ張る。

「え？　え？」

「僕たちのおうち」

「マザーターニアに会わせてあげる」

子供の手を振り払うのは気が引けて、引っ張られたまま走り出す。後ろから屋台のおにいさんの声で、

「こらー！　おまえたち、またか！」

と叫ぶ声が聞こえた。いつもこんな事をしているのか。

「ど、どこまで行くのよ」

「だからー、僕たちのお家だよ」

「『僕たち』って、兄弟なの？」

「違うけどそうだよー」

何だかわけがわからない。

子供たちに連れられて来たのは、通りを抜けてすぐの教会だった。レリーフを見てすぐにわかる。なぜならローザが信仰するフロー神の紋章がくつきり彫られていたからだ。

「おうちってここ？」

「そうだよ」

「うちのこの家だよ」

つ、つちのこ？と思ったが、フロー神は大地母神だった。おそらく「土の子」だろう。教会の扉が開いて、中から初老の女性が出てくる。白いローブ姿を見るにこの教会のシスターだろうか。

「リンク、サイモン、マイク、あなた達どこに行っていたの？」

そう言う私たちの姿に気づいて、微笑みながら頭を下げた。

「ガスリーのカステラ屋だよ」

「今日はケインだったから一個しかくれなかった」

「でもこのおにいちやんがもう一個くれたよ」

シスターの周りを駆けながら口々に言う子供たち。わたしなら目が回りそうな状況だが、シスターは落ち着いて静かに言う。

「またケインを困らせていたの？あなたたち、お庭の掃除も終わらせていないわね？」

子供達は一瞬気まずそうに顔を見合わせるが、すぐに騒ぎ出した。

「そんなことよりお客さんだよ」

「カステラくれたからお茶だしてあげて」

「ねーいいでしょー？」

「そんなこと言って、また無理言っで連れてきたのね？」

シスターはわたし達の方を見ると再び頭を下げた。

「すみません、遊んでくれそうな人を見つければ、こうやってここに連れてくるんです。お忙しかったら言ってくださいね」

「大丈夫だよ、この人たち僕たちに聞きたいことがあるんだって」
「早くおいでー」

またしても手を引つ張られ、そのまま教会内に入る。木造のベンチが並ぶ間を抜けて、祭壇脇にある扉を開けた。教会堂の裏が住居施設になっているのだろうか。入った先は土間の間になっていた。さらに奥に行くと数人の子供の顔がぱっとこちらを見上げた。年代も髪の色肌の色も様々な子供たちが部屋にいるのだ。

「また知らない人を連れてきたのね」

テーブルで物書きをしていた少女がわたしの手を取る子供を睨む。

「ここは孤児院なんですよ」

後ろから聞こえた声にわたしとヘクターは振り向いた。先ほどのシスターがやってくる。

「お茶を煎れますね」

「すみません」

「いえいえ、こちらこそ申し訳ないわ。貴重なお時間を頂く代わりにとっておきのお茶をお出ししますね」

わたしとヘクターは顔を見合わせ、二人揃ってお礼を述べた。

「お姉さん魔法が使えるの？」

わたしの手を引っ張って来た銀髪の少年がわたしの顔を覗き込み聞いて来た。ヘクターはすでに子供たちに囲まれてもみくちやにされている。

どの子もとても人懐っこい。みんな孤児なのだろうか。そう思うと胸が痛んだ。

「どうしてそう思うの？」

わたしが少年に聞くと、代わりに隣りにいた少女が答える。

「サイモンはローブを着ている人はみんな魔法使いだと思ってるのよ」

先ほどテーブルから少年、サイモンを叱っていた少女だ。

「ローブを着ていたら魔法使いとは限らないけど、今回は当たりよおねえさんは魔法使いなの。……見習いだけど」

二人の顔がぱあっと輝く。意外にも食いつきが良いのは少女の方に見える。

「見せて見せて！何でもいいから」

少女にせがまれて、何を唱えようと少し迷う。

「ライト」

短い呪文でふわりと光源が現れた。

「うわあ」

二人は思った以上にはしゃいでくれた。あまり魔法に縁がないのだろうか。

「すごいすごい！」

「ミーナはねえ、魔法使いになりたいんだって。お姉ちゃん教えてあげてよ」

サイモンが肩を抱く少女はミーナというらしい。

「そうね、もう少し大きくなったら学園に通えるようになるわ。そ

したらきちんと教わった方がいいわよ。それに今からたくさんの本を読む事。きつと役に立つから」

欠点ありまくりなわたしが未来ある子供に教えるのは気が引ける。わたしは簡単なアドバイスをするのに止めておいた。

「お姉さん、学園に通ってるの？もしかして首都の？」

ミーナが興味津々といった感じで聞いてくる。

「ううん、ウエリスペルトのプラティニ学園よ」

「うわあ、本校の方ね！」

別に本校の方がすごいということは無いが、ミーナはある程度は知っているようだ。

「あたし、きつと入学できる年齢になったらウエリスペルトに行くわ。そしたらお姉さん、教えてよ！」

きつとこの子が入学出来る歳にはわたしは学園にはいない。しかし否定するのもなんだかな、と思って頷いた。

「……ミーナ、ウエリスペルトに行くの？」

サイモンが眉をハの字にしてうつむく。この子はミーナのことが好きなのだ。なんてかわいい恋心なの！と一人燃え上がったわたしはサイモンにも声をかける。

「あなたも行けばいいのよ。学園にはちゃんと寮もあるし、魔法使いだけじゃなくて戦士、盗賊、神官、……色々学べるわよ。吟遊詩人のクラスだってあるしね」

「じゃあ俺、戦士になるよ！ミーナを守ってあげる」

ミーナは少し焦ったように頬を赤くした。

「な、何言ってるのよ。勝手に決めないでよ」

「えー……」

落胆するサイモンとわたし。……いかんいかん、感情移入しすぎてしまう。だって、サイモンってこの銀髪といい、歳のわりに綺麗な顔といい、ヘクターに似てない？

「ミーナ、サイモンは将来きつと良い男になるわよ」

わたしはミーナの肩をぽん、と叩いた。

「お茶が入りましたよ」

シスターがお盆を持ってやってきた。お盆には綺麗なカップと大きなポットが並んでいる。

「あなた達には今、冷たいジュースを持ってくるから、ミーナ、お客様にお茶を煎れてあげてちょうだい」

「はい」

シスターは子供達の為の飲み物を取りに戻っていった。ミーナは小さな手で器用にお茶の用意をしていく。わたしとヘクターがテーブルに着くと子供達も周りに集まってきた。

「お姉さん、学園には幾つから入れるの？」

ミーナがお茶の入ったカップをわたしの前に置きながら尋ねてくる。「学園に入りたいの？」

ヘクターが聞くとミーナは顔を赤らめた。

「十二歳になる年から入れるわ。ミーナは魔法使いになりたいんですって」

わたしが代わりに答えたと、ミーナは「あと二年かあ」と呟いた。「お兄ちゃんは戦士なの？」

サイモンがヘクターの腰にかけてあるロングソードを指差した。

「そうだよ」

「僕も戦士になれる？」

ヘクターは微笑むとサイモンの髪をくしゃくしゃと撫でた。

「それは君が決めることだな。でもきつと、なれるよ」

「俺は盗賊がいいなあ」

先程、わたし達をここまで連れてきた少年の一人、金髪の子が言った。すると次々に子供達が「俺も」「私は……」と発言していく。ついこの前までの自分がここにいる。わたしは何だか感慨深くなっていた。

「ジュース持つてきましたよ！」

シスターの声に子供達は一斉に集まっていった。ふう、とわたしが一息つく、なぜか残っているサイモンと目が合う。

「お兄ちゃんたちは夫婦なの？」

ぶおっ！わたしは紅茶を盛大に吹き出した。

「馬鹿ねえ、サイモン、まだ若いじゃない。夫婦じゃなくて恋人っていうんじゃない？」

「ゲホっうえほっ！ミーナ……それも、違う……」

喉を叩きながらわたしは訂正した。二人はキョトンとした顔だ。

「でも、今までここに来てくれたことのある冒険者さんたちはみんな、自分たちのこと『家族だ』って言うてたよ？」

「家族？」

わたしは聞き返した。

「うん、ここにいるみんなは血が繋がってないけど、みんな家族なんだよ、って言うたら『自分たちも同じ家族みたいなもんだよ』って言うてたの」

たぶん、ここにいる孤児たちを見て、冒険者たちは血のつながりなんてたいした事ではない、と言いたかったのではないだろうか。

「そうね、おねえちゃん達も家族みたいなもんだね」

まだ実感としてはあまり無いけど、学園でも『仲間とは命を預け、預かる存在である』と耳にタコが出来る程聞かされる話した。そんなわたしの話してもサイモンとミーナはにこにこ聞いていた。

「ところでサイモンたちに聞きたいことというのは何だったんですか？」

シスターがにこやかに聞いてくる。いかんいかん、流れるような騒ぎで忘れるところだった。

「この町で黒髪の女の人って見た事無い？昨日、今日の話しなんだけど」

わたしはアンナの特徴を細かく伝える。派手な彼女のことだ。見掛けていたら目にとまることもあったかもしれない。身体的特徴を伝えた後、わたしはサイモンを見下ろす仕草をした。

「……こういう感じで、『ふんっ』って顔するんだけど」

子供たちはぼかん、といった顔だ。ものまねはいらなかったか？と

思った瞬間、

「それってアンナのことじゃないの？」

「あたしもそう思った」

な、何で名前まで知っている！？

「知り合いなの？」

ヘクターが聞くとシスターがおずおずと切り出した。

「その方なら昨日の晩、教会にこられたんですよ。憔悴した顔で『泊めてくれないか』と言われたので、良い身なりのお嬢さんには申し訳ないですけど屋根裏に泊まってもらったんです」

「ぼくも一緒に屋根裏に寝たんだよ」

「僕も。屋根裏に入れるチャンスなんて無かったから」

「でもうるさいって怒られたよ」

子供にも容赦なく怒るとは、間違いなくアンナだろう。

「お知り合いの方だったんですか」

シスターが言った時だった。がたん！と土間の方で音がし、誰かが駆け出す足音が続く。直感的に誰なのかわかったわたしは叫んだ。

「アンナよ！」

わたしは立ち上がり土間の方へ駆け出す。教会へ続く扉が開けっ放しになっていて揺れている。わたしとヘクターはそのまま教会を抜け、通りへ飛び出した。

「どっち！？」

「こっちだ！」

ヘクターは叫ぶと走り出す。その後を必死で追いかけるわたし。な、なんか前にもこんな風に走らされた気がするんですけど！

がんばってはいるがやっぱりひらいていくわたしとヘクターの距離。その時、ちらりとアンナのものらしき黒髪が揺れているのを見つけた。よし！やっぱしそうだった！

次第に人気の無い通りまで入ってきた。こういうところは袋小路になっていると相場が決まっているのに馬鹿な奴め！段々悪役のような気分になってくる。

「つ、捕まえて!」

わたしが指差すとヘクターは速度を上げる。しだいにアンナの姿が大きくなってくる。もう少し!となった時、いきなりアンナが立ち止まり、こちらを向いた。両手を広げると、そのままヘクターにがしつとしがみつく。抱き合うような形となったままアンナが叫んだ。
「馬鹿!なんでもついてきたのよ!」

「あの、えっと……」

「何どさくさに紛れて勝手なことしてくれてんのよー!!」

アンナの頭にチョップを入れまくる私。

「いた!いた!いいじゃない!どうせ捕まるならやっところと思っただのよ!」

「良くない良くない!!」

絶対トラウマになったぞ、今の光景!わたしはアンナの髪を引っ張る。するとようやく身体が離れた。

「とにかく、落ち着いて」

ヘクターが静かに言ってもみ合うわたしとアンナを交互に見る。

「……で、何で逃げたのかしら?」

わたしが聞くとアンナはそっぽを向きつつ、膨れっ面になった。

「アンナさん、何で勝手に一人で出て行っただんです?」

ヘクターが言くとアンナは気まずそうに目を伏せ、

「……アンナって呼んでくれたら答える」

と呟いた。こ、この女はとことん……。なぜかヘクターはわたしの顔を見ている。

「よ、呼んであげれば」

自分でもびっくりする程の低音が自分の口から出てきた。にこやかに出来ない子供ですいませんね。ヘクターが頭を掻き、口を開いた。アンナは目を輝かせてヘクターの顔を覗き込む。

「……、いや、そういう風に言われると呼び難いんだけど」

アンナはがくつと肩を落とすと再びそっぽを向いた。

「じゃあ教えない!」

はー、とわたしは溜息をつく。ほっとしたのではない。なんだか馬鹿馬鹿しくなってきたしまった。会えたはいいものの、またこの人のペースに付き合わされるのか……。

「とりあえず、皆と合流しましょう」

そう言ってわたしはアンナの腕をがしつと掴んだ。

「な、何すんのよ」

「こうでもしないと『ヘクターが腕組んでくれるならついていく』とか言い出すんですよ」

うっと言葉に詰まるアンナ。

「さあ、行きましょう」

自分でも補導員のようだと思いながら歩き出した。

「バクスターのところには行かないわよ」

膨れっ面のまま言うアンナにわたしは頷いた。元々連れて行くようなとは思っていない。

「あの教会のところならどうです？」

勝手に話し合いの場を選んでいいのかという気もするが、シスターたちに挨拶もしておきたい。というか、あの状況だとわたし達の方が悪者に捉えられている気もする。

「わかったわよ。……あたしもきちんとマザーターニアにお礼を言いつきたいし」

「あら、意外にも常識あるんじゃない」

「どういう意味よ！」

アンナが大声を上げた時だった。ぴん、と空気が張りつめたのがわかる。見えない空気の壁に捕まったような、妙な感覚。隣りでヘクターが腰のロングソードを抜いた。その仕草にわたしは背中に嫌な汗が噴き出す。

「今日は人数が少ないんだな」

聞き覚えのあるしゃがれた声。最悪の展開だ。

「だ、誰よ……敵なの？」

振り向いた先にいる黒衣の男と、剣を構えるヘクターを交互に見ながらアンナが聞いてくる。

「まあ、多分……ね」

相変わらず顔はローブに覆われていて見えない。

「やっぱり生きてたのね」

わたしが言つと顔の中で唯一見える口元が笑みを形作った。

「なんだ、あの生意気なエルフはいないのか。せつかく今日は戦い方を変えて来たのに」

戦い方を変えてきた……？まるで変幻自在のような言い方じゃない

か。どうする……？ 奴はどう考えても魔術師なのだから、わたしがメインにならなきゃいけない。とはいっても火のエレメンツや爆発系の魔法は町の中では使えない。しかもわたしが唱えるのだ。はっきり言って普段から駄目なもんが実践で制御出来るわけがない。わたしは出来るかぎりの防御系魔法を思い浮かべた。

情けないが町中に逃げた方が得策だ。そう思い、相手の第一陣を防ぐ方法のみに集中するべく頭を回転させていた時だった。

「伏せる！」

ヘクターの声が響き、顔を風が撫でる。

一瞬、何が起こったのかわからなくなつた。反射的にアンナの腕を取り、半歩下がったわたしの目に映ったのは、ヘクターの剣と男の腕からのびる何かがぶつかり合う光景だった。ヘクターがわたしとアンナを庇う形で対峙している。金属のこすれ合う音が耳に響いてきた。男の腕についているのはセスタスのような腕輪型の鉤爪だ。黒くヌラヌラと光った刃が不気味さを醸し出している。

接近型に変わっている！？

ヘクターの剣が鉤爪をはじくが、逆の手がさらに伸びる。それを受け止めたヘクターの顔が歪んでいくのがわかった。腕力、スピードともに顔半分から窺える老人のものとは思えない。数度、金属音が暗い通りに響き渡る。明らかに防戦一方のヘクターにわたしは何とか相手の注意が逸らせないかと考えた。

震えるアンナの手を握りしめた時、男の攻撃を避けたヘクターの腹部に相手の蹴りが直撃する。ヘクターが吹っ飛び、道ばたに積み上がる樽にまともに叩き付けられた。

「エネルギーボルト！」

わたしの呪文が完成し、男に向かって真っ直ぐ飛んで行く。が、ボウン！という音を立てて、男がわたしの放った魔力の塊を腕で叩き落とした。

「邪魔だ」

男がわたしの方に向き直る。鉤爪を振り上げ、地面を蹴った。する

といつも間に立ち上がったのかヘクターが男の後ろから剣を振るのが見えた。咄嗟に男がわたしに背を向け、二人の武器が再びぶつかる。

「……逃げる」

ヘクターが声を絞り出した。一瞬、何を言われたのか理解するのに時間がかかる。

「逃げる！」

荒い声にアンナがびくつと肩を振るわせた。その事が逆にわたしの体を動かしてくれる。アンナの腕を掴むとヘクターと男が対峙する場とは逆に走り出した。

「ち、ちよつと！本当に逃げる気！？」

「……邪魔にしかならないのよ、わたしは」

アンナに言い聞かせるため振り向いた時、男の体が浮き上がりヘクターに向けて黒い爪を振るうところが見えた。

路地裏を抜けて明るい通りに出た時、足を止める。

「どうするの！あのままじゃヘクターがやられちゃう！」

アンナはわたしの腕を振り払い、更に何かを言おうと口を開いたが、途中でそれを止めた。わたしの目が赤いのに気がついたのかもしれない。わたしは息を整えるとアンナの両手をとった。

「アルフレート達を探してきて。町の西側にいるはずだから、頼んだわよ」

「さ、探してきてって……」

「アルフレートは耳が良いの！名前を連呼してればすぐに見つかるはずよ！わたしはやることがあんのよ！」

わたしはアンナの肩を叩くと走り出した。ちらりと振り返るとアンナもわたしが言った方角へ走り出すのが見える。ひとまず安心する。わたしはある建物を見つけると中へ駆け込んだ。

「いらつしゃいま……」

黒いバーテン姿の青年を突き飛ばすと階段を見つけ、駆け上がる。

「ちよつとちよつと！」

青年が後ろから追いかけてくるが気にせず三階まで走り込んだ。

「ちよつと、何な……」

「路地裏の方角はどっち!?」

文句を言おうとした青年の声にかぶせてわたしが怒鳴ると、青年は反射的に右方向を指差す。

「こ、こつちかな」

「ありがと!」

右側にあった部屋の扉を勢い良く開け放つと、倉庫のようで簡易棚に乾物が並んでいた。素早く入り込み窓を開ける。

いた!下にヘクターと男が剣をぶつけ合う姿があった。

「うわわ、何やってんすか、あいつら……」

わたしの後ろから覗き込んだ青年が焦りの声を出す。

「あんた、わたしの体押さえてて!!」

「ええ!?……つてちよつと、あぶな!」

窓から大きく身を乗り出したわたしを、慌てて青年が後ろから抱きかかえてくれた。なんとか上からサポート出来ないかと来てみたのだが、失敗は許されない。わたしはグローブの下の手が汗ばんでいるのを感じた。上手くいくかどうかわからない、自信も無い行動だが何もしないなんて嫌だ。わたしは唇を噛むと呪文を唱え始める。下ではヘクターが男の両手から繰り出される攻撃を受け流してはいれるものの、上着には血が滲んでいるのが見えた。お願い、堪えて!わたしは背中中の短剣を窓枠に勢い良く突き刺した。

「な、何するんですかあ!」

背中から青年が悲鳴を上げた。

「うるさい!二人とも死んじゃうわよ!これ無いと!」

両手で術印を結ぶと『力ある言葉』でそれを完成させる。

「ウィンド・プロテクション」

風のシールドが、短剣を中心に上に向かって伸びていった。次!再び呪文の詠唱に戻る。ヘクターが男の腕を薙いだ。が、痛みを感じないように男も反撃の手を止めない。静かにわたしは完成した呪文

を発動させる。

「エア・ブラスト」

空気が歪み、圧縮された風の刃が路上に転がる樽に触れると爆発を起こした。男の背中が壁となつて、ヘクターには爆風が行かないような物を狙つて撃つたのだ。

「なんだ!？」

上手くいったようで男は辺りを見回している。その間にヘクターが剣を振りかぶるが寸でのとこで受け止められた。

「くそ!」

男が舌打ちする。まずは成功、問題はここからだ。男が上にいるわたしに気がつくのは時間の問題。出来うる限りの早さでわたしは次の呪文を唱える。あと、あと一説、紡ぎ出せばいける。わたしは光る右手に神経を集中させた。頭が妙に冴えている。全てが普段よりもスローに感じる感覚。

「……そこか!」

男が飛んだ。三階にいるわたしの高さまで。まるで化け物だ。

「ひ、ひやあ!」

わたしの腰を掴む青年の情けない声が響く。男がわたしに向かつて黒く光る鉤爪を振るい下ろした。

「ファイアーボール!」

わたしの一声に大きな火の玉が男に向けて飛び出していく。次の瞬間、鼓膜がいかれるんじゃないかと思うような轟音、熱波。

「ぎやあああああ! あ………つて、熱く、ない?」

青年が悲鳴の後、呟く。先ほど貼っておいた風の結界のお陰で熱気が頬を撫でたぐらいで済んだのだ。

「く、そ………」

もうもうと上がる煙の中、赤く剥き出しになった肌から炎を燃え上がらせながら男が落ちていくのが窺えた。

魔法の演習で教授たちが張った結界を突き破ったファイアーボールだ。普通なら消し炭になっているはずだが魔法への耐性まであるの

か、男はきちんと両足で着地した。が、すでにロープも吹き飛んでいて赤黒い筋肉が剥き出しになっている。

「ちくしょう！」

男の最後の言葉が吐き出された。ヘクターの剣が、男の胸元を貫通させる。ずるり、とその体が地に伏せた瞬間、

「消えた!？」

わたしは思わず叫んでいた。また、町の外で会ったときと同じように消え失せてしまったのだ。何なの、あいつ……。ということはまた現れたりするのだろうか。

「あ、ちよつと、危ないですよっ」

青年が下を見て言った。ぐらり、とヘクターの体が傾き、倒れる。わたしは小さく悲鳴を上げると、今度は下に向かって駆け出した。

「ヘクター！」

壁に背を預け、倒れるヘクターの姿を見て駆け寄る。抱き起こすと息が荒い。わたしはヘクターの上着を脱がすと傷を確かめる。

「やだ……」

こんな状態で戦っていたのか。脇腹から大量の血がシャツに染みている。後は腕や頬に小さな切り傷。混乱とショックで泣きそうになるのを堪えて短く呪文を唱えた。簡略しているのでは無く、わたしに出来る唯一の回復呪文だ。

「キュアネス」

右手から出る小さな光をヘクターの脇腹に押さえつけた。ヘクターが小さくうめいた。

「ごめん、ちよつと我慢して」

少しずつ、少しずつ傷が小さくなっていくのはわかるが、これでは駄目だ。

「大丈夫ですか……」

涙で霞む目で振り返ると、先ほどのバーテンの青年が心配顔で覗き込んでいる。あれほどの爆発があつたからか、様子を見に来た町の人もいる。その中の1人が傷を見てか声をかけてきた。

「それじゃ間に合わんだろう」

見ると冒険者風の女性だ。剣士らしき姿だが呪文も使えるらしく精霊語を唱え出した。

「ヒーリング」

女性がヘクターの腹部にかざした手から光が漏れている。わたしが唱えた時とは比べ物にならない早さで傷が塞がってきた。とりあずほつとした時、女性が顔をしかめる。

「いかん、毒を受けているな」

「え……」

ヘクターの青い顔を見て、わたしは再び手が震えてきた。無意識に女性にすぎる目線を送ってしまったのだろう、女性は首を振った。
「私は解毒の呪文までは覚えていないんだ。毒の種類もわからないし、早く魔法医のところに運んだ方がいい」

頭がぐらぐらして、痛い。働かない自分の思考にイライラして余計に涙が出てくる。ぽん、と肩に置かれた手に反応するのにも時間がかかった。

「大丈夫よ」

聞き慣れた声に隣りを振り返る。ローザだ。ヘクターの顔や腹部の様子をテキパキと見て、呪文を唱え出した。指先が小さく光る右手で首もとを触る。ふと、背中が暖かくなった。イルヴァが後ろから抱きしめてくれたのだ。髪から漂う良い匂いに、わたしはようやく涙を拭うことができた。

「完全に人間じゃないな、それは」

アルフレートが組んだ足をぶらぶらさせながら言った。

隣りの部屋ではローザがヘクターの毒を治療している。手助けしてくれた剣士の女性はローザの検診だけで毒の種類を確認できる力に感嘆していた。ただ、治療には時間がかかるということなので、あのバーテンの青年が店の部屋を貸してくれたのだ。

今、わたしは先ほどファイアーボールを放った倉庫部屋にいる。回収し忘れていた短剣を窓枠から引き抜いた。

「でも、がんばったじゃないか」

似合わない言葉を言うアルフレートに思わず笑ってしまった。

「それはそうと、そろそろ離してくれない？」

アンナが自分の腕を掴むイルヴァを睨む。

「えーん、こわいですう」

棒読みで言い返すイルヴァ。

「離してやれ、イルヴァ。そのお嬢さんは逃げやしないさ。なんて

いったって自分のせいで人が一人、大怪我してるんだからな」

アルフレートの言葉にアンナの顔が強張った。眉間には皺が寄り、俯いてる姿を見てわたしは何か声を掛けようか迷ったが、止めた。何を言っても白々しい気がする。わたし以外にアンナをフロアしそうな人間はここにはいないので、必然的に沈黙が部屋を覆う、と思ったらアンナが口を開いた。

「……全部話すわよ。はあ、まさか追いかけてくるなんてね」

「当たり前だろ。我々の仕事をばかにするな」

「ばかにするなです」

アルフレートとイルヴァに続けざまに言われ、アンナは少し落ち込んだ様子だ。

「まずはなぜ、我々を置いて一人で出て行っただか、だ」

アンナは少しの間、口を閉ざす。何から話すべきか、と迷っているのだろ。

「そうね、始めに言っておきたいのは姉様に援助をしに行くというのはあたしの勝手な意思で」

「父親は単にお前が姉に会いに行く、というのを聞いたただけなんだろう？」

「気がついてたの？……その、あたしの嘘だつて」

アルフレートが深い溜息をつく。

「悪いがレイノルズ氏には書簡を送って質問した。ただ単に『家宝を持って行く』云々は怪しすぎたんで気づいたが、まさか援助の話し自体が作り話とはな」

「そうなの？」

わたしが聞くとアルフレートは頷く。

「さっきこの女を探しに行った先の酒場で聞いた。バクスター家は議員としての名誉は失っていたが、金には困った素振りが無いな。

なんでもフロア神の教会にある孤児院に援助していたり、上手い金の使い方でも十分町の人間の心を掴んでるよ」

わたしはあのサイモン達のいた孤児院を思い出す。あそこに援助し

ているのか……。

「……それはあたしもこの町に来て初めて知っただけだね。本当に経済的に困つてると思つてたんだから。にしても、お父様にもバレちゃったのか……。困つたな」

「別にエディスさんが困つてるつて聞いたから、つて言えば、父親なんだし許してくれるんじゃない？」

わたしが言つてもアンナは首を振る。

「ないない、よそに行つた娘のことなんて面倒見きれん、て終つちやうわよ。けちだもん」

ああ、そういえばローザもそんなこと言つてたつけ。

「じゃあ、どうして困つてるつて思つたのよ」

「言いたくないけど、あたしの早とちりとしか……。姉様から『毎日大変ですが、何とかやっていきます』なんて手紙が来たらそんなに大変なのかと思うじゃない。バクスター家のごたごたはずつと聞いてたし……」

「本当に馬鹿なんだな。巻き込まれたこっちのことも考えろ」

アルフレートが吐き捨てた。アンナはすでに涙目だ。

「ちよつと、今責めてもしようがないでしょう？とりあえず、全部話を聞いてからにしましょう」

「その言い方だと話し終わつたら責めるつて感じですね」

イルヴァが突つ込んでくるがシカトさせていたたく。

「で、エディスさんの方からイエトリコの魔封瓶の話があつたのね？」

アンナは頷いた。

「……マルコムが頼んでるんだけど、つて前置きで、なんでもバクスター家からうちのご先祖が持ち出しちゃつたらしいのよ。それを持つて来てくれないか、つて」

レイノルズ家が元々バクスター家から分かれた一族なのだとしたら、そんなこともあつたのかもしれない。それをマルコムが知つた、とこのも不自然ではない。

「言い伝えを聞いて、不思議には思ったんだけど、ほら、あたしもお父様も知らないような話だったし。でもお父様は援助なんて断るに決まってるって思って、あたしには持てるお金なんてたかがしれてるし」

「で、盲進しちゃったわけだ」

アンナはアルフレートに頷いた。

「一人で出てきたのはあなたたちを巻き込みたく無かったから、っていうのが大きいけど、本音を言わせて貰えばお父様に知られなくなかったから。まあもう無理みたいだけど。……でも怒ってないわ。こうなるべきだったから」

そう言つて少し笑った。

「あの瓶からあんなのが出てきた時は『どうしよう、間違つた物持ってきたのかも』っていうのでショックだったんだけど、だんだん『知つていてこれを欲しがってるんじゃないか』って思い始めたのよ。だって似たような物は地下に無かつたし。少し前から魔術の類いに嵌っているって聞いてたのもあつて……。それであたし、だんだんあの人が何をしようとしているのか怖くなったの」

エディスはマルコムに言われて妹に頼んだだけとはいえ、マルコムは悪魔を呼び出したあと何をしようとしていたのか、それを知つたエディスをどうしようと思つていたのか、確かに不安になるだろう。「しかし、だ、お前一人で乗り込んで何が出来る？お前がやろうとしていたのは親に怒られたくない一心で動いていただけじゃないのか？」

「……あたしは……あたしなら姉様を助けられると思つたんだもん！」

「フェンズリーに来ても屋敷の周りをうろついていただけのやつが？笑わせるな。今、仲間がエディス一人を外に連れ出すように屋敷に張っている。それでも我々は役たたずかね？」

アルフレートがにやりと笑うとアンナは驚きの声を上げた。

「姉様を？」

「勝手な真似と文句言いたいか？」

「違うわよ」

アンナは深いため息をつく。

「そういえばアンナは賢者ウォンの顔は知らないの？」

わたしは黒衣の男が現れた時のことを思いだし聞いた。

「残念ながら会ったことは……。あの男がそうだったの？」

「見た目はどんぴしゃなんだけどね。ただそんなおじいさんがセスタス両手に暴れ回れるとは思えないけど」

わたしは苦笑する。アルフレートは顎に手を当て何やら考えこんでいる。すつ、と手を下ろすとわたしに向き直った。

「私が動いてやるか」

そう言うのと窓を開け放つ。ヒラリと体を翻すと外へ飛び出していくではないか。

「ちよつ、ここ三階！」

わたしが慌てて窓の下を見ると、何事も無かったようにアルフレートが通りを歩いていく姿があった。

「何者なの？あいつ」

アンナの言葉にわたしが肩をすくめた時だった。

「アンナ！」

部屋の入り口から声がかかる。わたし達は一斉に声の方向に振り返った。白い肌に艶やかな黒髪。穏やかな顔を憔悴の色で歪めている。エデイスだ。隣にはフロロが腕を組んで立っている。

「姉様……！」

「アンナ！心配したのよ」

エデイスさんが腕を広げ駆け寄ると、アンナは彼女の胸の中に飛び込んだ。

「姉様！エデイス姉様！」

その瞬間、アンナの体がふらりと傾く。わたしは慌てて支えた。

「アンナ！」

エデイスさんが叫ぶ。

「……安心して気が遠くなったのかもしれませんが。ずっと神経張り詰めていたと思うので……」

わたしがエディスさんに言うと、イルヴァがアンナを抱え上げた。

「他にベッドが無いか聞いてきます」

「勇ましいなあ」

フロロが感心したようにイルヴァを見上げた。

魔女っ子、夢をみる

イルヴァがアンナを抱えて、エディスさんもそれに付き添い部屋を出ていったのに入れ代わりに、ローザが入ってきた。

「どうだったの!？」

わたしが聞くとローザは胸を張った。

「あたしが治療出来ないわけないでしょーが。少しタチ悪い毒だったけど、もう少し休んで体力回復すれば大丈夫。多分、相手の武器に塗ってあった毒みたいね」

あの黒光りした鉤爪がそうだったんだろうか。わたしが怪しく光る刃を思い出しているとローザがわたしの肩を叩く。

「それよりヘクターが呼んでるわよ」

「わたし？」

なんだろうか。

「早く行ってやんなさいよ」

ローザに急かされ部屋を出るが、隣りの部屋の扉を見て緊張する。

『なんで逃げなかったんだよ』とか怒られたらどうしよう、と胸がドキドキしてきてしまう。

深く深呼吸した後、意を決して扉を開けると簡易ベッドに横たわるヘクターの姿があった。近寄ってみると穏やかな寝息をたてているではないか。

「……呼んでるなんて、嘘じゃん」

そう呟くが、ローザに感謝した。ヘクターの顔は綺麗に傷が消えている。ローザが全て治療したのだろう。わたしはベッドの脇に座ると、少し躊躇した後、そっとヘクターの頬に触れた。温かい。当たり前前のことになぜか目頭が熱くなる。

「綺麗な顔……」

わたしは思わず口に出していた。部屋の明かりに反射する銀髪、形の良い眉、すっと筋の通った鼻。ヘクターの手を取ると両手で握り

しめた。

「……あつたかい」

涙が頬を伝う。よかった。わたし、逃げなくて正解だったよね。

どのくらいの時間そのままだったのか、いつの間にか夕焼けのオレンジ色が部屋に入ってきていた。ヘクターの瞼が動く。わたしは慌てて手を離れた。

「……リジア？」

ヘクターがわたしの頬を撫でる。

「うん」

「もしかしてずっといてくれた？」

「……うん」

わたしは今更になつて恥ずかしさに顔から火が出そうになった。ヘクターが起き上がる。

「あ、無理しなくていいよ！」

わたしは慌てて止めようとするが、ヘクターはベッドから足を下ろし大きく伸びをした。

「いや、大丈夫。特に問題ないし、やけに良く寝た気分」

そう言つて肩を回す。確かに顔色もいいみたいだ。

「あつ！そういえばっ」

わたしははつとして、ヘクターのシャツをめくり上げた。綺麗に傷痕もない腹筋が現れる。ほつと胸を撫で下ろすわたし。

「……あの、もういい？」

ヘクターの困つたような顔にわたしは我に返った。

「わっわつとつゴメン！」

シャツを素早く下ろす。何やってんだわたし……。

「大丈夫だよ、俺、このくらいの怪我なら初めてじゃないし」

ヘクターはそう言つとわたしの頭をばんぽんと叩いた。

「……本当に？」

「うん、まあ流石に毒受けたのに気付いた時は『やばいな』と思ったけど」

ヘクターは苦笑する。わたしは血で染まっているシャツを見て、唇を噛んだ。

「あのさ」

「ん？」

「あの時、『逃げる』って言ったのは、アンナがいたから？それともわたしだけでもそう言ったの？」

わたしが聞くとヘクターは困ったように口を閉ざす。暫く沈黙が続いたことでわたしはヘクターの答えを聞いた気がした。

「わたしは……きっと分岐点にいたんだと思う。あそこでアルフレートたちを呼びにいつて、間に合っていたとしてもきっと何かを失っていたと思う」

「……うん」

「ヘクターが間違っていたとも思わない。……ううん、たぶん、正解だったんだと思う。でも」

「ありがとう」

ヘクターがわたしの手を掴んだ。彼のグレイの瞳に、自分のシルエツトが見えた時、わたしは無性に恥ずかしくなって目を伏せてしまった。

「何言ってるのか、よくわかんなかったでしょ」

「いや、よくわかったよ」

同じ歳頃のはずの男の子の手はわたしの手を覆い隠す程大きい。

「……シャツ、変えなきゃなー」

ヘクターが自らの血で染まるシャツを見つめながらぼつりと言った。とんとん、部屋がノックされた。慌てて手を放すわたしとヘクター。一瞬の間を置いてローザが顔を覗かせる。

「……あら、目覚めた？流石に回復は早いわねー。体力ある人は違うわ。……と、エディスさんが話しあるって」

わたしはヘクターと顔を合わせると立ち上がり、扉に向かった。

「邪魔しちゃってごめんなさいねえ」

廊下を歩く途中でローザが耳打ちしてきた。

「……殺すわよ」

「あらあら、怖い」

前を歩くヘクターは頭を掻いている。倉庫部屋に入るとフロロとイルヴァ、エデイスさんが待っていた。

「……アンナは？」

わたしが聞くとイルヴァが下を指差した。

「店員さんの仮眠室を借りてます。まだ起きてないみたいですよ」

「そう……。アルフレートも戻ってないの？」

「アルはウォンの住居、探しに行ったんだって？じゃあもうすぐ戻ってくるんじゃないの」

フロロが答えた。

「大丈夫でしょうか……」

エデイスさんが心配そうに呟く。

「大丈夫ですよ、うちらの中でも一番、何があっても死にそうになり奴だし」

わたしが手を振って答えるが、エデイスさんの顔は晴れない。

「でも……彼は、ウォンはとても危険な人物です」

「え、……って、何、ウォンってやっぱり生きてるんですか？」

エデイスさんが頷いたことで、わたし達の中の空気が少し張りつめた。だとしたら、やっぱり黒衣の男は賢者ウォンで合っていたのだろうか。

「でも、ギルドで聞いて来た話しでは葬式までやったって話したんだよ？」

フロロが聞く。

「そうです、彼は……ウォンは一度、死んだのです。そして、バクスター家の方で葬式をあげる事になっていました。ウォンとバクスター家は懇意にっていて、身よりの無いウォンとの約束になっていたそうです。でもそれがいけなかったのです。ウォンはそのこと

をネタにしてマルコムを脅迫して、自分の研究の協力を要請してきただのです」

「ちよちよちよ、ちょっと待って、全然話しが飲み込めないわ。一旦死んだのに生きてたってこと？」

混乱するわたしにエディスさんは頭を振る。彼女自身、どう話していいのか迷っているようだ。暫く沈黙したのち、ゆっくり話し始めた。

「ウォンの研究は晩年、不老不死の研究に大きく傾いていきました。名声を得るようになった黒魔術の研究はすでに、頭には残っていません。老いた魔導師には、自然の流れなのかもしれませんが、突っ込みどころ満載の台詞にわたしの頬は引きつりまくるが、穏やかな空気をまとった彼女にどう言っているのか浮かばなかった。

「永遠の命を手に入れるため、ウォンが最初にとった方法は自らの細胞を元に新しい体を作ることでした。……失敗でした。どうやっても、若い新しい体にウォンの意識を移すと、見る見るうちに老いた姿に変わっていったそうです。次に考えたのが人間よりも強固な存在と自分の体の融合です。これが今の彼の姿になります。モンスターの中でも人型に近いもの、トルルやデーモンなどと自分の体のコピーを次々と融合させていったのです」

「一度目に会ったウォンが魔術師系のモンスターとの融合、次に会ったのが肉弾戦系のモンスターってことね」

わたしは唇を噛んだ。

「体が消えたのはなぜです？」

イルヴァが珍しく質問する。

「たぶん、本当に絶命する前に次の体に意識を移すよう、ウォンの研究室が何かに移動するようになってるんじゃないの？」

どうやって、と聞かれたら困るがウォンは元々黒魔術で名声を得た偉大な魔導師だ。レポート系の魔法なのだろう。エディスさんは頷くと再び話し出す。

「それでも見た目が老人の姿になるのは変わりませんでした。彼が

手に入れたいのは力では無く、永遠の命です。そこで思いついた方法が悪魔や神に近い存在との融合です。神はもちろんのこと、神の従属である闘神、邪神の従属である悪魔にも寿命はありませんから……バクスター家と元々懇意にあったウォンは、イエトリコの魔封瓶のことをどこからか知っていました。それが数百年前にバクスター家の先祖が悪魔を封じた物だということも、いつからかレイノルズ家に流れてしまったことも」

ふう、と一息ついた。

「ウォンはある日、自分の体のコピーをバクスター家の屋敷の前に置きます。まるで屋敷を訪ねてきた最中に発作で倒れたかのようにそれを発見したマルコムは疑いもなく葬式を出す事を決めたのです。フェンズリーの中でも大きな式になりました。町人の中にも涙を流すものは多かったです。……しかし、彼はそのような人々をも裏切ったのです。ある晩、私とマルコムの前に彼が現れました。そして私たちをのしつたのです。『あれは研究で作り上げた私の分身である。勝手に自分を殺したお前達を許さない』と。マルコムは動揺していましたが『すぐに間違いを発表しよう』と告げました。が、ウォンは首を振ったのです」

「『私は今以上に穴蔵に籠ることにしよう。死んだことにしてくれていい。それで君のフェンズリーでの名誉は守られるだろう。ただ、一つ条件がある』そう言つて不気味な笑顔を見せました。以前の彼には見られなかったものです。思えばモンスターとの融合で顔つきが変わつていたのかもしれませんが」

「その条件がイエトリコの魔封瓶ね？」

ローザの言葉にエデイスは頷いた。

「私もマルコムも知らない物でした。その時ウォンから説明を受けたのは『魔人が封印された瓶であり、バクスターの先祖は魔人の力を受けて財を成したのだ。封印が解けるにはいまだ早い、私ならその封印が解ける』というものでした。たぶん、あなたがたもアンナから聞いたのがその話しではないでしょうか。私がアンナに話した内容がそれだったので……」

わたし達は頷いた。

「私はアンナに手紙を書きました。瓶の外見の特徴を、そして父様にはなるべく気づかれないように、と。そして長旅の危険を考えて、アンナではなく誰か信頼できる若い者をよこしてくれ、と。私の言い方が悪かったのでしょうか。逆にアンナを心配させて自ら家を飛び出すまねをさせてしまいました。アンナが家を出たという書簡がバクスター家に届くのと同時に、マルコムがイエトリコの魔封瓶が危険なものである、という先祖の伝聞を見つけました。私とマルコムはアンナを心配しましたが、ウォンにしか封印が解けないのであれば大丈夫だろう、と思つていたのです。しかし間違つていたことがすぐにわかりました。首都周辺で悪魔の姿が確認された為、フェンズリーでも警戒するようにという通達が首都からきたのです。マルコムは『アンナと護衛の冒険者には何も知らない振りをすること』を言ってきました。……言い訳だと思われてもかまいません。」

これは保身ではなく、余計な混乱をさけるためだったのです」

「アンナが聞いたらウォンのところに乗り込みかねない、と思ったんじゃないませんか？」

わたしが聞くとエディスさんは迷った素振りの後、小さく頷いた。

「……アンナが家を出たと聞いた時点で考えてしまったのがそれです。あの子を巻き込むのは絶対に避けなければいけないというのが私とマルコムの見解でした。それなのにあなた達が来て、肝心のアンナがいない時は私とマルコムは本当に動揺してしまったのです。

あなた達だけにでも事情を、ということも出来ない状況でした。ウォンはなぜか屋敷での会話などを知っていることがわかったのです」
「げっ」

盗聴、という言葉が浮かび、わたしは思わず声を上げてしまった。

「それでいきなりウォンがわたし達の前に現れたわけね」

「そうですね……。こんなことならはじめから事情を話した上で、私とマルコムが町を離れば済んでいた話だったのです」

そう言い終わるとエディスさんは涙を拭いた。巻き込まれた方としてはそうして欲しかったというのが本音だが、全てを失うことへの怖さはわからなくもない。

「気にしないでください。危険を請け負うのがわたし達の仕事ですから」

これはわたしの本音だ。そうでなかったらアンナをエディスさんに会わせた時点で帰る準備をしている。

「かつこいいこと言うじゃないか」

よく知った声で皮肉を言われ、わたしは扉の方向に振り向いた。アルフレートが腕を組み立っている。

「アルフレート！ど、どうしたの、それ」

彼のクリーム色のマントに大きな穴が空いているのだ。

「ウォンの家に行ってきたんだよ。後悔したがね。ウォン本人が出かけたんでその隙に、と侵入したらウォンのコピーだからしがらみが襲いかかってきた」

動きはアンデットのようで『中身が無い感じ』だったが、と付け足して笑った。

「で、どうしたの？」

「破壊してきた」

あつさりという。

「じゃあ、もうウォンは復活できないんじゃないの？……今、意識を持ってる体はどうなのかしらないけど」

「そうだろうな」

アルフレートが言うときエディスさんが立ち上がる。

「……お願いです。マルコムを助けてください。……ずうずうしいお願いなのはわかっています。今晚、ウォンとマルコムは屋敷で会う約束をしているんです。その時、マルコムは協力を断るつもりだと言っていたんです」

「協力、つてもうマルコムさんに出来ることなんて無いんじゃない？」

わたしが言うのを遮り、エディスさんは首を振った。

「悪魔が手に入らないと知った彼は、新しく要求してきたことがあるんです。……それが」

エディスさんがおずおずと指差したのはなんと、わたしの顔だった。がたんつ、と椅子が倒れる音がしてヘクターが立ち上がった。その彼の肩をアルフレートが叩く。

「落ち着け」

「わ、わたし！？な、なんでまた……」

エディスさんに詰め寄ると彼女は困ったように目を伏せた。

「私も少し聞いただけで『面白い人間を見つけた』としか……」

確かになぜウォンがわたし達を襲うのか謎ではあった。最初の戦闘の「ホールド・ウィップ」でわたしの動きを封じようとしたことも、今考えると不自然ではあったのだ。

「リジアは確かに面白いですけどねえ」

イルヴァの緊張感のない台詞にわたしは睨んで抗議する。面白いだけではいいさんと融合させられてたまるか！

「ウォンの研究所を吹っ飛ばしてきたんだ。もう何も出来ないはずだ。問題はマルコムの方だろう」

アルフレートに言われて全員、はっとする。

「まさか、殺されたりってことはないわよね」

ローザがおびえた声を出した。

「わからんぞ。とにかくバクスターの屋敷に戻った方がいい」

アルフレートが部屋を出て行く。わたし達も続いた。わたしは部屋を出る時にエディスさんに声を掛けた。

「エディスさんはアンナの元においてあげてください。あとは、わたし達にまかせて」

エディスさんは頷くと、深く頭を下げた。

バクスターの屋敷は暗いまま明かりが灯る気配が無い。前庭に人が倒れている姿を見つけて、わたしは慌てて駆け寄った。わたし達も知っているメイドのおばちゃんだ。眠らされただけのようですーと寝息を立てている。ほっと胸を撫で下ろし、イルヴァに頼んで木陰に運んで貰った。

「こんなことするなんて、騒ぎを起こす気満々じゃない」

わたしは鼓動が早くなるのを感じた。

「急ごう」

ヘクターに言われ、わたしは立ち上がる。屋敷の玄関を開けると、中も暗闇に包まれている。フロロが耳を立てて辺りの音を拾う仕事をした。

「こっちだ」

駆け出す彼の後ろ姿を全員が追う。

「こっちは何があるの!？」

昼間、屋敷内に張っていたフロロにわたしは質問した。

「たしか……ホールみたいになってた」

「広い方が最終決戦にふさわしいじゃないか」

アルフレートがふふん、と笑う。調度品が並ぶ様子が美しい廊下を走り抜け、家の中には大きな扉が見えてきた。フロロがドアノブに飛びつくが、首を振った後、懐から針金を取り出す。その様子を見てイルヴァがフロロの肩を叩いた。下がってろ、というジェスチャーをするとカー杯ウォーハンマーを振り下ろす。バコン！と凄まじい音を立てて扉が吹っ飛んだ。怖い。

「う……」

中の光景を見て、思わず私は呻いた。普段は音楽ホールとして使われていたらしき部屋はグランドピアノが鎮座しており、形いい長椅子と綺麗な絨毯が目にとまる。

しかし今、この部屋の主役となっている姿は巨大な刃を肩あたりから指の方向に向かって生やした半モンスターの男、賢者ウォン。腕自体が刃と化した彼はわたし達を見て不敵に笑った。

ウォンの足元に倒れているのは黒髪を自らの血で染めたマルコムだ。床に彼の血が円を広げていくのがわかる。

「あの女の居場所は吐けないなどと言うものでね……。実に残念だよ、マルコム。君のことは赤ん坊の頃から知っているとこのに。

……まあいい、『もう一つのお目当て』が自ら飛び込んで来てくれたようだから」

ウォンはわたしの目を見遣る。ヘクターとイルヴァがわたしの前に立ちはだかった。ナイツに守られるお姫様状態に少し焦るが、今のウォンの言いように眉をひそめる。あの女とはエデイスのことか。ということは彼は事情を知る人間は全て消すつもりだということだ。それよりも『もう一つの目的』という言い方が引っ掛かる。わたしの方がオマケってこと？

「冷静になった方がいいぞ、冒険者諸君。今ならまだマルコムは息をしているぞ。君らの行動がマルコムのこれからを左右するのだから」

そう言つて、腕の刃をマルコムの喉元に突き付けた。息を飲むわたし達とは対象的に、アルフレートがずいっと前に出る。

「人間風情が駆け引きで上をいこうなどとは笑わせる」

思いつきり悪役らしい台詞を吐くと、上着のポケットをまさぐった。と、アルフレートは何かを取り出す。

「それなら我々が駆け引きに使うのは、これだ」

手を掲げた先にあるのは握り拳大の黒いガラス玉だった。なんじやそりゃ、と思ったが、光りが当たると気味の悪い模様が見える。それはまるで人間の脳みそのように見えた。ウォンの顔色が明らかに変わった。始めは驚愕の表情を浮かべていたが、次第に露骨な怒りへと変わる。

「……貴様っ！ エルフ風情がっ！ コソコソと嗅ぎ回りおって……！」
思い切りの罵倒に気味が悪くなる。部屋にウォンの吐き捨てる悪態だけが響き渡った。

「虫けらのくせにつ、許さん、許さんっ！ 殺してやる、殺してやる…… 殺しテヤル…… 殺すコロスコロス」

呪いの言葉を吐き続ける彼の声がだんだんと人間のそれとは掛け離れていくのがわかる。明らかに声帯からして人の物ではない声に、わたしは身震いしていた。

「があああアアアっ！」

耳を覆いたくなるような一吠えと共に、ウォンがアルフレートの方へ飛び掛かる。がしかし、空気が弾ける音をたててウォンの体はアルフレートの直前で止まった。アルフレートのシールドだろう。自分だけに事前準備をしているところが彼らしい。

次の瞬間、アルフレートは手に持っていた黒い球をフロロに向かって投げつけた。

「ほいつ」

「げえっ、俺かよ」

ウォンの標的がフロロへと変わった。獣のような咆哮を上げながらフロロに向かって刃を次々と繰り出していく。

「ちょ、ほっ、はっ、とっ！」

ぴょんぴょんと飛び跳ねながら、それらをかわしていくフロロ。その間にわたしとローザはマルコムに向かって走り出した。

「援護お願いね！」

ローザの言葉にわたしはウォンの動きに注意を払うことを忘れない。

ローザは血溜まりを気にもせずに、マルコムの手腕に座り込んだ。

「どう？」

「意識が無いけど、息はあるわ」

ローザの言葉を聞いてわたしは風のシールドの呪文を唱え始める。

ローザも神聖呪文の詠唱を始める。複雑な呪印とルーンの組み合わせがマルコムの手腕の深さを窺わせる。わたしは腰の短剣を引き抜くと、床に突き刺した。

「ウインド・リフレクト」

圧縮された空気の壁が短剣を中心に広がっていく。ウォンの攻撃をかわせる程の威力は期待出来ないが、無いよりいい。

「ありがとう」

お礼を言うローザの顔には玉のような汗が浮かんでいた。ローザの体力も気にかかる。わたしはウォンの方へ目を向けた。

「くそがあ！」

ウォンが自分の攻撃を避け続けるフロロに吐き捨てる。その間にもヘクターとイルヴァが武器を振り上げているのだから、それらを受け続けているウォンの体は人間のものではない。……少し間抜けな光景にも見えるな、と思った時、

「邪魔だ邪魔だジャマだジャマダ！」

ウォンの周りに黒い霧が集まりだした。不穏なマナの動きに私は思わず立ち上がる。

「危ない！」

そう叫ぶわたしの声と被せて、アルフレートの呪文が完成した。

「コントロール・スピリット」

無数の光の精霊が部屋に漂い始める。それは次々と黒い霧に飛び込んでいき、消えて行った。大半の黒い霧はそれで消えていき、残りがヘクターとイルヴァに向かって襲いかかるが、二人とも難なく避けていく。床に触れた霧が酸のように床板を溶かしていくのを見て、わたしは安堵すると共に背筋が寒くなった。

ヘクターが踏み込んだ。フロロの方へ目を向けていたウォンの一瞬

の隙について、彼のロングソードがウォンの肩を貫く。

「がっ……」

ウォンが苦悶の表情を浮かべるその顔に向かって、イルヴァのウォーハンマーが振り下ろされた。次の瞬間のグロッキーな光景を想像したわたしは思わず目を伏せる。みしり、と嫌な音が部屋に響いた。
「ぐ、が……」

ウォンの声が聞こえてわたしは恐る恐る目を開ける。顔が不自然に曲がった老魔術師がふらりとよろけている姿があった。聞き覚えのある叫び声からして、今のウォンはデーモンとの融合タイプだろう。体の頑丈さは感心すら覚える。

「ところでさあ、これって何なの？」

尻尾をふりふり、フロロがウォンに向かって尋ねた。ウォンは目を見開く。

「オマエには無用のモノだ……。さあ、カエセカエセカエセ

……！」

「そんな言い方されたら返せないな」

挑発するような台詞を言うフロロにウォンは怒りを現わにした。

「いいからよこせ！」

フロロに腕の刃を振り下ろす。

「じゃあ返してやるよ」

フロロが黒い球を投げつけた。ウォンの振り上げた刃に向かって。

一瞬のことなので目で追えなかったが、ウォンは驚愕の表情を浮かべていたはずだ。

ウォン自身が、彼の望むものを叩き割った。

「があああアアア！」

何度目かのウォンの咆哮が部屋に響き渡る。

「クソツクソツクソツ！死ぬのか？死ぬのか！？シヌノカアアア
！」

鳥肌が立つような叫びを上げながら、のたうちまわる賢者ウォン。その彼と、ふと目が合った。ぞわり、背中に冷たいものが走る。

「……体、からだカラダカラダからだ……アタラシイから、だ、ダ……」

ウォンの体が宙を舞った。わたしは目をつぶる。後ろからローザが抱きしめてくるのがわかった。どんっという音と共に顔に何か生温い感触がした。うつ、気持ち悪い……。

うつすらと目を開けていくと、目の前で黒い魔術師がわたしに手を伸ばす姿があった。胸の真ん中から剣を生やした彼は、ゆっくりと地面に落ちていき、消えた。後ろから彼を討ったであろう人、ヘクターは剣先を見つめるとゆっくりと立ち上がった。

「ま、また消えたけど……」

わたしが渴いた喉から声を搾り出すとアルフレートが首を振る。

「今回の『魔界に帰った』んだ」

わたしはオットーの町で、霧のように消えて絶命したデーモンを思い出した。

「……う」

背後からの声にわたしは慌てて振り返った。

「マルコムさん！」

マルコムは胸の辺りを摩ると少し呻く。

「あ、まだ完治してないから、動かないで」

ローザが諭し、彼を優しく横たえる。ローザの呪文の詠唱は歌のよう美しい。

「……君らに助けられたのか、面目ない」

「何言ってるんですか、あなたに死なれたらエデイスさんに合わせる顔ないですよ」

わたしが言くと、マルコムは眉間に皺寄せた。

「……エデイスは？」

「町の酒場でアンナと一緒にです。大丈夫、無事ですよ」

わたしが言い終わる前に勢い良く起き上がるマルコム。

「一緒にいるのか！？……っつ」

「だからまだ起きないで！」

ローザが押さえつけるがマルコムはその手を取る。

「だめだ……、一緒にいたら駄目なんだ！アンナを、アンナが危ない！」

「ど、どういうこと……？」

予想外の言葉に部屋が静まり返る。フロロですら真剣な顔になった。

「エデイスは、……私とアンナを恨んでいる。ウォンに情報を流していたのは……彼女なんだ……」

アルフレートが立ち上がる。

「早く行くぞ」

「で、でも」

わたしがマルコムの胸元を指差すとマルコムが首を振った。

「もう、大丈夫だ。出血は止まっている。……たぶんウォンの穴蔵にいると思うから早く行ってくれ」

「その穴蔵ならもう埋まっているが」

アルフレートが気まずそうに言う。

「じゃあ『核』は壊したんだな？」

核、とは……さっきの黒い球だろうか。

「このこと？」

フロロがまっ二つに割れた黒い球を差し出すとマルコムはほっと息をついた。

「それだ……、じゃあもうウォンは復活しないな」

「これはウォンの意識の集合体ということだな？これが核になって他の体を動かしていたというわけか」

マルコムが頷く。アルフレートがわたし達の肩を叩き、「急げ」と声を荒げた。マルコムには、

「あとで詳しい話しをしよう」

と声をかけると走り出した。わたし達も慌てて後を追う。

「すまない」

後ろからマルコムの声が聞こえた。

黒い悪魔と魔女っ子

「何がなんだかわかんないわよ！」

先を走るアルフレートにわたしが叫ぶ。

「二つあったんだ」

「え？」

「二つあったんだよ、あの『核』は」

「それって……、ウオンのものと……」

「エデイスは人間をやめてるってことだな」

アルフレートの言葉に息を飲んだ。

「じゃあエデイスのはどうしたんだよ、アル」

フロロが質問する。

「……すでに破壊して、穴蔵の奥に眠っている。まずいな、エデイスに気づかれたら、ヤケクソになったりするかもしれないぞ」

「でも、それならエデイスはもう倒れているはずじゃない！」

ウオンの最後を思い出してわたしは叫んだ。

「核が死んだら他の体に復活は出来ない。しかし『最後の体』は動き続けるんだ！」

わたしはウオンが自分に飛びかかってきた様子を頭に浮かべる。

「じゃ、じゃ何で壊したのよ！」

「スぺアか何かかと思っただよ！ウオンのものより魔力が弱かったから！」

「喧嘩よくないですう」

イルヴァの大声が玄関ホールに響き渡った。

町を出ると街道を逸れた先の森の入り口で、アルフレートが足を止めた。

「この先なの？」

わたしの質問を無視して、何やら唱えているアルフレート。これは精霊語だ。一瞬、辺りが光に包まれた後、目の前の森の景色がほんの少しだけ変わった気がする。

「……この先にエデイスさんがいるってことは、彼女も魔術が使えるってことでしょうか？」

「そういう繋がりでウオンの片棒担いでたのかもしれないな」
アルフレートが鼻であしらった。

「でも、エデイスが魔法使えるならなんで教えてくれなかったのよ、アンナは……」

わたしがぼやくとアルフレートが人差し指をわたしの目の前にずいっと突きつけてくる。

「な、なによ」

「言わなかったかもしれない。でもあのお嬢さんは一言も『エデイスは関わっていない』とも言っていないんだよ」

わたしはアンナが酒場の物置部屋で語り出した姿を思い出す。

（魔術に嵌っているって聞いてたし……）

（あの人は何を考えているのか怖くなったの……）

（あたしなら姉様を助けられる……！）

アンナの言葉がフラッシュバックする。わたしは思わず呻いた。

「そんな……引っかけ問題みたいな」

「しょうがないだろう。我々が勝手に思い過ごしていただけなんだ」
ふと、わたしはあの後、エデイスさんが現れた時のことを思い出した。アンナと再会して、アンナは気を失った。考えてみればあれは安堵して気が抜けたのではなく、眠らされたのだ。アルフレートがあ場に残っていれば見抜いていたに違いない。わたしも魔力を感じたりは出来るのだが精霊の動きまでは見えないのだ。

わたしは言おうか迷ったが、アルフレートから返ってくる言葉が何となく想像出来てやめた。

「……やっぱり、常に六人揃って行動することが大事だと思うの」「わたしの言葉に一同『はあ?』』という顔をする。フロロが背中に飛び乗ってきた。

「それは俺のこと言ってるの?」

「……あんたは特別」

「さ、行きましょ」

ローザの言葉に皆、森の中へと足を踏み入れた。わたしとアルフレートが『ライト』の呪文を唱える。

「アルが前行って先導してよ」

フロロの言葉にアルフレートは首を振った。

「あの結界さえ解けば、すぐそこだよ」

言われたフロロは「本当かよ」と呟くが、何かを察知して顔が変わる。

「……何か掘ってる音がする」

わたし達にはもちろん聞こえない。アルフレートが唯一頷いた。

「……ウォンの研究所を掘っているんだろうな」

暗闇の中、髪を振り乱し瓦礫を掘り返す女の姿を想像して、わたしは身震いした。ヘクターがわたしの肩に手を置き、「大丈夫」と言ってくれる。わたしはほっとするが、彼の顔もいつもの優しさが消えていることに気がついた。剣を振るう時、いつもこんな顔をしている。

わたしもがんばらなくては、と拳を握りしめた。

わたしが想像していたものに遠くない光景が目の前に現れた。瓦礫と土砂で埋まる洞窟の前で、穴を掘り返しているエディス。その手は素手だった。

改めて鳥肌が立つわたし。エディスとは少し離れたところに倒れて

いるのはアンナだ。思わず息を飲んだが外傷があるようには見えない。

よっぽど夢中になっているのかエディスはわたし達には気がつかないようだ。わたしはローザにアンナを指差すと、彼女も頷く。忍び足でアンナに近づこうとした時、

「何をやっている？」

アルフレートがエディスに声をかけた。おい！

わたしが抗議しようとする、エディスがゆっくり振り向く姿が見えた。

「……もう来たの？」

振り向いたエディスの顔は別人に変わっていた。穏やかさも、柔らかさも消え失せている。

「マルコムが教えてくれたんでな。お前がここに来るはずだと」

マルコムの名前を聞いた途端、エディスの顔から笑顔が消える。眉を片方だけくい、と上げた。

「あなたたちをもう少し、引っ張っておくんだったわね。……いや、ウォンが不甲斐ないのかしら」

「『核』ならもう無いぞ。私が破壊した」

アルフレートの言葉を聞いてもエディスには動揺がない。ふふふ、と笑い出した。

「そう、……ならもういいわ。考えてみれば私にはもう、必要がないのなもの」

言い終わった瞬間、エディスの口から聞き慣れない言語が紡ぎ出されて行く。耳に不快な、人には発音出来ないような言葉。

「くそっ」

アルフレートが舌打ちした。素早く何かを唱え始める。

「オル・エヴァイトス！」

アルフレートの呪文が完成し、彼の右手に光の魔法陣が現れた。これって……、わたしの脳裏にあの雨の日が浮かぶ。次の瞬間、かっ
と開いたエディスの口に光が収縮し始めたではないか。

「あ、あれって!？」

ローザが悲鳴を上げた。エディスからブレスが放たれる。辺りを覆い尽くすのは目を開けていられないほどの光、熱気、轟音。わたしは悲鳴をあげていたと思う。でも、それも聞こえなかった。

「前を見る!」

アルフレートの言葉に我に返り、わたしは目を開けた。またしても彼のお陰で助けられたのだ。エディスがこちらに向かってくる姿を見て、わたしは横に逃げ出す。彼女の体もまた、人間のものとは変わってしまった。額からは大きな角が双壁を成し、背中からは黒い羽根で覆われた翼。間違いない。エディスはあの悪魔と融合している!

元いた位置から衝撃波を感じて振り返ると、イルヴァのウォーハンマーとエディスの手から伸びる赤黒い刃がぶつかり合っていた。イルヴァの顔が見えるうちに苦痛に歪んでいく。エディスの顔はあの瞳孔が見えない赤い瞳に変わっていた。エディスが体を捻り、そのままイルヴァの体に蹴りを入れる。まともに受けて吹っ飛ばイルヴァ。そこへヘクターが剣を走らせた。エディスは片腕でそれを受け止めるともう片方の腕をヘクターに突いてくる。ヘクターもかろうじて剣で受け流した。

「フレイム・ランス!」

アルフレートが炎の槍を飛ばす。エディスは舌打ちするとその場を飛んでやりすごした。その光景になぜかわたしの中で、何かの違和感が芽生える。どうして……。

「アンナ!大丈夫!？」

ローザの声に我に返り振り向くと、ローザがアンナを抱き起こしていた。

「アンナの具合はどう?」

わたしが聞くとローザはアンナの顔色を確かめる。

「……眠らされてるだけみたいね」

「……じゃあ、起こすのは止めときましよう。こんな場面、見せる

「こない」

わたしは唇を噛み締めた。

「ローザはアンナを連れてどこか遠くに避難しておいて」

「……リジアは……？」

「わたしは、……ちよつと確かめたいことがあるから」

わたしが言うのとローザは黙って頷いた。アンナを抱え、引きずるように離れていくローザの背中をちらりと見てから、わたしはエディスとの戦闘の場に戻った。

目を離れたのはほんの少しだったと思うのだが、戦況はかなり悪化していた。

まずイルヴァが腰を曲げたまま動かない。どこか折れているのかもしれない。ヘクターがエデイスと渡り合っているが、どう見ても防御に回っているだけだ。エデイスの腕を振り回す姿は明らかにめちやくちゃで、それがかえって反撃に回れないようになっていているのかもしれない。

アルフレートはヘクターがかわし損ねたエデイスからの一手を防御系の魔法で援護し、たまに精霊を飛ばしたりしているが簡単に避けられている。フロロもウオンと戦った時のように罔になろうとちょっかいを出しているが、相手にされていない。

わたしはアルフレートのすぐ横に走り込むと、唱えておいた呪文を放った。

「エネルギー・ボルト！」

魔力の塊がエデイスに向かっていく。が、いとも簡単に体を避ける。でも、期待した通りの動きだ。

「……練習ならこんな場面でするなよ」

アルフレートが術の印を手で結びながら言った。額には汗が滲んでいる。

「ちよつと思いついたことがあるのよ」

わたしも次の呪文を唱え始めた。

「なんだ？ 適当なアイデアは出すなよ。お前の王子様もそろそろ体力限界なんだ」

「エネルギー・ボルト！」

わたしはもう一度同じ呪文を放つ。

「……おい、ふざけるな」

こんな初級も初級の呪文が通用するなんて思っていない。アルフレ

ートがわたしを睨むのと、ヘクターのロング・ソードが宙を舞ったのは同じタイミングだった。それでもエディスはその場から一步下がった。ヘクターにとどめを刺そうとすれば可能だったはずだ。

わたしの呪文を避けるために、彼女は下がったのだ。

その間に、イルヴァが足下に落ちてきたロング・ソードをヘクターに投げ返した。

「悪い」

ヘクターが柄を握る。わたしはアルフレートに耳打ちする。短い言葉だったが、彼には言いたいことが通じたようだ。少しの間、眉間に皺寄せていたが、すぐに呪文の詠唱に入る。

わたしはその間にエディスの背後に走りこむ。普通なら死角にはなりそうにない相手だが、見るからにエディスは悪魔の力を持て余している段階だ。元々の彼女が戦闘という力を持っていなかった為だろう。それが充分チャンスになる。

ヘクターがエディスの攻撃を避け損ね、頬から血を流した。彼の動きも相当足に來ている。イルヴァが苦痛に顔を歪めながらも加勢に飛び込んで行った。

もう少し、もう少し、がんばって！

どん！という衝撃音と共にヘクターとイルヴァが吹っ飛んでいく。エディスの動きの精度が明らかに上がっていた。次は、次のチャンスはない！わたしは呪文を唱え終わるとアルフレートに向かって手を挙げた。それを合図にアルフレートが呪文を放つ。

「カーズ・イクスプロージョン」

黒い光球が、エディスの周りを取り囲む。一つでも触れれば爆発を起こし、それが周りを誘爆していく呪文だ。

「ちっ！」

エディスが地を蹴った。空に舞うように高く飛び上がる。翼は、広がらなかった。

「エルメキア・ディバイン！」

わたしは指先から伸びる光の触手をエディスに向かって投げつけた。

「……！」

いとも簡単に捕まるエデイス。彼女はまだ背中の翼を使うまでにはなっていないのだ。今の呪文はウォンが私に使ったものと同じ、魔法のロープで相手の動きを封じるもの。普通だったら人間が悪魔相手に使って通用するような呪文ではない。ウォンがわたし相手に使ったときのようにその場で切られるか、発動すらないのかもしれない。しかしわたしの放った触手はエデイスの動きを完全に捕らえていた。

驚くような表情を浮かべていたエデイスが、次第に狂ったように暴れ出す。聞こえてくる悲鳴がわたしの胸を締め付けた。やらなきやられるのだ。この呪文の欠点は対象がわたしの視界内ということだ。そのためにエデイスには単独になってもらう必要があった。例えばこの、空に浮かぶ彼女のように。

「アルフレート！」

わたしは叫んだ。アルフレートがトドメを刺すべく、口を開く。そのときだった。

「やめて！」

アンナの声にわたしは肩を振るわせた。思わずエルメキア・ディバインの呪文を解きそうになる。

「行っちゃ駄目！」

ローザとアンナがもみ合っているのが気配でわかる。

「……アンナ……」

エデイスの口から漏れたのは、まぎれもなく彼女の声だった。

「わたしは、今、何をしているのかしら。……でも、それは私には最後までわからないのでしょうね」

呟く彼女の言葉は懺悔のようだ。

「なに、悪役になるのはなれている」

アルフレートが苦笑すると光輝く矢を放った。深くエデイスの胸に突き刺さったそれは、彼女が地面に落ちてくるのと同時に消えた。

「姉様、姉様！」

アンナがエデイスに駆け寄っていく。この後、わたしは彼女に何と声を掛ければいいのかのさう。

膝から崩れ落ちた時、わたしの目の前に幻影のようなものが現れた。まるでそこにいるかのように鮮明だが、わたしにはこれが実体のないものだとなぜか理解した。黒い翼を持つ異形のもの。彼は語りかけてきた。

『我が名はヴォールドール。ようやく帰ることが出来た。力無き人間よ、礼を言う』

悪魔らしからぬ台詞を残し、悪魔ヴォールドールは空に消えていった。

アンナがエデイスの亡きがらを抱き抱える横で、ローザがイルヴァの治療をしている。イルヴァの顔色はかなり悪そうに見えた。ローザもかなりキツイのさう、疲労の色が濃い。わたしがアンナに声をかけようと近づいた時だった。

「……アンナ」

森の入り口方向からやって来たのはマルコムだった。アンナは振り返り、マルコムの姿を見た瞬間、小さく悲鳴を上げる。マルコムは自分の胸元を見遣ると苦笑した。

「大丈夫、もう傷は塞がっているから」

アンナはほお、と溜息をつく。今のやり取りで、わたしは重大な勘違いをしていたことによく気が付いた。アンナがマルコムを想っていたわけではない。二人が二人とも、お互いを想っていたのだ。それがどうしてエデイスと結婚したのか、などと聞く気はない。誰が悪いのか、なんて今となってはあまり興味が無かった。

ヘクターにおんぶされたイルヴァは露骨に不機嫌な顔だ。

「しょうがないだろう、お前を抱えて動けるのはヘクターぐらいなんだから」

森を歩きながらアルフレートがイルヴァを窘めるが、イルヴァは頬を膨らます。

「イルヴァは誰の肩も借りたくないんですよ」

ヘクターは苦笑いだ。こんだけジェラシーが沸き上がらない光景も無いかもしれない。みんなドロドロのへとへとだ。割と元気そうなのはフロロくらいか。アルフレートも今回ばかりは相当キツかったに違いない。服についた泥がそのままだ。後ろからはマルコムがエデイスを抱えながら歩いている。隣にいるアンナは目が腫れて真っ赤だ。しかし、どこか覚悟を決めたような、強い力を宿していた。

「薔薇風呂入りたいわあ」

ローザが力無く呟いた。

「ローザちゃんも疲れたでしょう」

陰の功労者の背中をぽん、と叩く。

「あんたは元気そうねえ」

ローザの声には感心の色と呆れた様子が混じっていた。魔法を唱えることで疲弊したことが無いのが唯一の自慢であるわたしだ。……ローザとわたしの魔力を交換できたら一番戦力アップになるような気がしてならない。

町の明かりが見えた時、言いようの無い安堵感が訪れた。ほっと息を吐くわたしのローブをフロロが引っ張る。

「そっぴやさあ、リジアの魔法すごかったね。悪魔を縛る魔法って何なの？」

「あれは、……彼自身が動きを止めたのよ」

エデイスは始めからアルフレートの呪文やイルヴァやヘクターの攻

撃を避けていた。神属に近い存在であるはずならわたし達の攻撃なんて通用するか怪しいはずだ。それなのに、避けていた。フロロは首を傾げた。

エデイスの動きを見ていて、違和感を覚えたわたしの脳裏によぎったのがウォンと対峙した時のことだ。ウォンはわたしの放ったエネルギー・ボルトを腕ではじき、消滅させた。少し気を逸らせる程度になればいいと思って撃つたものだったが、結構シヨクだったわたし。たぶんデーモンとの融合体だったのだろうが、それで擦り傷にもならないものが悪魔に効くわけない。

「オットーの町で戦ったデーモンが、倒れたあとどうなったか覚えてる？」

デーモンに始まる魔界の住民は、絶命した瞬間塵と消える。こちらの世界に現れた時に纏ったかりそめの肉体が消えるからだ。わたしもオットーの町で初めて目にしたのだが『その後、どこへ消えたのだろう』という疑問が残った。

「肉体が滅んだ瞬間、元の世界に戻るのよ」
自ら答えるわたし。

「自信ある言い方だな」
アルフレートが言ったが、わたしは確信していた。あの自分の名を名乗った悪魔ヴォールドールが言っていたから。『ようやく帰れる』と。

封印から解かれてさっさと帰りたい彼は、あえて肉体を滅ぼすことを選んだ。それに加えて、エデイスも肉体的な戦闘のスキルなど無かったのが幸いして勝てたのだろう。

「エデイスは、何をしたかったのかしら」
ローザがゆっくり呟くと、後ろからマルコムが答える。

「屋敷に戻ったら、ゆっくり話そう。君たちに全て話しておかなくてはならない」

薄暗い光の談話室、わたし達はソファに身を伸ばしていた。マルコムがお酒の瓶を棚から取り出し、

「……お茶の方がいいか」

わたし達を見渡し、はっとしたように呟いた。

「あたしが煎れてくるわ」

アンナが立ち上がる。メイドのアリョーシャさんはエディスさんの遺体を清めているからだ。彼女は大泣きしながらも、何も聞かなかった。マルコム夫妻と家にずっと一緒にいたのだ。何か感じるものがあつたのかもしれない。

「……エディスはずっと、自分の居場所を欲しがっていた」

アンナが部屋を出るのと同時に、マルコムが口を開いた。

「夫婦になつてからも一度も、私のことを名前で読んだことがなかった。当たり前だろうな。私の気持ちが中途半端なことに気がついていたらからだ」

ふう、と息をつく。

「アンナに初めて会つたのは婚約の話でレイノルズ家と顔合わせした時だった。婚約の話し自体気乗りのするものじゃなかった私は時間丁度に屋敷に戻ればいいと思って町をうろついていたんだ。結婚を断る気はない。この歳まで好き勝手にさせてもらった恩が父親にあつたからだ。今考えると、さっさと屋敷に戻ればよかったんだ」

「……町中でアンナと会つたんですね？」

「父が援助している孤児院の前だった。マザーターニアが植えたマーガレットが咲く庭を眺めている彼女に会つたんだ。アンナと目が合った瞬間が、二人にとっては永遠だったんだ」

くさい台詞だが、あまり突っ込む気になれない。会つた瞬間からお互いを愛してしまった二人が、鮮明に思い浮かべられたからだろうか。

「名前を尋ねたらレイノルズの名前を出すじゃないか。私は今までにない幸せを感じたよ。このお嬢さんが私の婚約者じゃないかとね」

二人で時間になるまで色々話した。短い間だったけど、確かにアンナは私を想っていると感じたんだ。そして屋敷に戻った。そこで初めてアンナは父が決めた婚約者の妹だと知ったんだ」

「顔は同じなんだから良いじゃないか」

アルフレートの台詞にローザが思いきり頭を叩く。アルフレートがうずくまった。

「その日から結婚までは、エディスは幸せそうだったよ。私はただ動揺するだけだった。卑怯だが迷っていたんだ。このままいざこざを起こさず結婚をするべきか、それとも本心を告げるべきか。何度かレイノルズ家の人との話し合いの場があったが、アンナは何も言わなかった。それが彼女の答えだと受け取ったよ。……それで諦めたんだ」

回想しているのか、目を瞑るマルコム。わたしは同じ言葉を言う二人を笑う気にはならなかった。

「それから逆は逆にアンナに会うのが怖くなってしまった。結婚はしてしまっただ。会って再び気持ちが蘇ってしまったらどうするんだ？ そんなことは許されない。そんな気持ちは不幸しか生み出さない。そんな時だった。アンナから手紙が来たんだ」

胸元にあるポケットを探る。中から一枚のくたびれた紙が出てきた。「手紙自体はエディスに宛てたもので、姉のいなくなった日々の暮らしの寂しさを綴ったものだった。嬉しそうに読み上げるエディスが最後の一枚を渡してきたんだ。『あなたにも書いてあるわよ』そう言われて、これを渡してきたんだ。その時の顔は、……たぶん自分でも分かりやすい顔をしていたんじゃないか、って思うよ」

手紙を開く。

「親愛なるマルコム。きつと姉は幸せに暮らしているものと思います。そしてそれを願っています。教会のマーガレットは今年も咲くのでしょうか。……短い文章だろう？ だが、涙が止まらなかったんだ」

静まり返る室内、マルコムの声だけが響く。

「エデイスは何も言わなかった。気づいたからだろうな。それから、彼女は驚く程変わった。見た目はあの穏やかな笑みを浮かべたままだった。でも、いつも、どんな時でも、あの顔しかしなくなった」わたしの脳裏にも、あのエデイスさんの微笑んだ顔が思い出される。「それってきついな」

フロロが眉間に皺を寄せた。

「一番変わったのが、バクスター家の事情だがね。君らもよく知っていると思うが父が逮捕される。罪には問われなかったというのに自ら命を断ったことで、悪い噂が後を絶たなかった。私も嵐のような日々を送るはめになったが、エデイスの方がやけにがんばっていた。今思えば、必死だったんだと思う。私達夫婦の関係がおかしくなった代わりに、バクスター家というものに固執しているようだった。……次第に情勢が回復して、『あとはあなたの代になれば首都に帰れますよ』とエデイスは言ったんだ。私はこれを拒んだ」マルコムは頭を振った。

「これが一番の後悔だ。これが彼女の分岐点だったんだろうな。……そうとも知らずに私は、首都でのバクスター家の言われようにつきり表舞台に立つ事が嫌になっていったんだ。……エデイスは一瞬抜け殻のようになった後は、病的に魔術の類いにのめり込んでいく。そんなタイミングを見計らったかのようにウォンが現れたんだ。父が死んでから、一度も顔を見せなかったというのに！」

「姉様からの定期的な手紙が来なくなったのがその頃からよ」

紅茶の匂いをさせながら、大きなトレーを持ちアンナが戻ってきた。アンナの言葉を聞いて、わたしは爪を噛んだ。エデイスはマルコムの気持ちに気づいた後も、アンナに手紙を送ることを止めていなかった。妹を心配する気持ちは消えていなかったのだ。それがウォンの登場によって消えたということだ。アンナから紅茶を受け取りながらわたしは尋ねた。

「これからどうするの？」

「……姉様のお葬式をここから出すから、ここに残るわ。明日から

忙しくなる」

そっか……。そういう準備もあつたっけ……。

「あなた達まで引き止める気はないわ。お父様が来たらうるさいと思うの……。本当は姉様を見送って欲しいけど」

アンナが苦笑する。

「大丈夫？」

ローザが聞くと、「大丈夫よ」と今だ腫れた目で答えた。その瞳には、決意が見られる。わたしの予想だけど、アンナはエデイスを見送った後もここに残るのかも知れない。なんとなくだが、そんな気がした。

望郷の町ウエリスベルト

「それじゃ……」

翌朝のフェンズリーの町外れ、マルコムが用意してくれた大型馬車の前でわたし達は挨拶した。マルコムが皆と握手する。

「気をつけて」

「これから、大変でしょうががんばってください」

わたしは精一杯の応援を送るしかなかった。マルコムは町の人と首都の方に、起こったありのままを説明するつもりだと言う。悪魔の出現があつた以上、国に説明しなくてはならないらしい。元領主の話しを理解する人間は少ないと思うが、それでも良いと語った。ヘクターとアンナが握手する。

「……あなた、あたしが本気じゃないって見抜いてたのね」

ヘクターは苦笑するだけだ。

「マルコムより先に会いたかったわ」

そう言ったアンナの言葉は、真剣に言っているように聞こえた。アンナがわたしに手を差し出す。わたしはその手を強く握った。

「元気で」

「あなたと話した時間が一番楽しかったわ」

思わぬ言葉に目頭が熱くなるわたし。

「考えてることが分かりやすくて」

続いた言葉に涙が引つ込む。

「彼、意外と頑固そうだからがんばってね」

耳元で囁かれ、わたしは顔を赤くした。何かを言い返そうとするが、涙が出てきて上手く話せない。そんなわたしをアンナが強く抱きしめた。

一頭引きとはいえ大型の馬であるコルバインのスピードは早い。全

員がゆったり出来るほどの荷台を悠々と運んでくれる。アルフレートとフロロは御者席にいる。物珍しい馬車に乗れるのが嬉しいらしい。わたしは豪快に寝息を立てるローザとイルヴァを眺めながら今回の旅を思い返していた。

「アンナと何話してたの？」

ヘクターに聞かれてわたしは汗が噴き出す。

「いやっ大したことじゃないよ」

思わず声が裏返り、ヘクターは不思議そうに首を傾げた。誤魔化すようにわたしは窓の外景色を眺める。帰りは行きと違って、ウェリスペルトまで直線の道のりだ。周りの景色も大分違うように見えるのは気のせいかな。

「リジア」

ヘクターに呼ばれ、わたしは振り返る。いちいち緊張してしまうんだよなあ、いまだに。

「何？」と言おうとしたわたしの口が止まる。ヘクターの顔が真剣だったからだ。心臓が跳ね上がった。

「リジアに謝っておきたいことがあるんだ」

わずかな間、わたしは「何かあったっけ？」と頭をフル回転させる。だめだ。思いつかない。

「え？え？何？」

「昨日、酒場の上で話した時のこと」

昨日……、ああ、酒場のベット借りたのって昨日のことだっけ。色んなことが起こり過ぎて、時系列がめちゃくちゃになっている。

「あの時、深く考えずにリジアの話しを『よくわかる』なんて言っただと思う。あの場ではそう思ったのは本当なだけだよ」

ああ、わたしがよくわからないことを口走ってた時のことか。よく覚えてるなあ。というか恥ずかしいので触れないで欲しかったり。

「……ウオンがリジアの体を狙ってるかも、って話しになった時」少し誤解されそうない方にわたしは吹き出しそうになったが、堪える。真面目な話なのだ。

「俺はすごく嫌だな、って思ったんだ」

真剣に話すヘクターにわたしは顔の温度が上がってくるのを感じ始めた。

「上手く言えないけど、そんなことは絶対に嫌だなんて思った。今までいい加減に剣を振るっていたわけじゃないけど、そんなことからだけは絶対にリジアを守らなきゃいけないと思ったんだ」

「うん、……ありがとう」

擦れた喉から必死で声を出すわたし。

「なんとなく、リジアが言ってたことはこういうことだったんだろ
うなってると思ったんだけど、違った？」

そういうことだよ。わたしは言いたくても言えなかった。声を出したら涙が出そうだったからだ。それにしてもこの人、あんな会話をそんなに真剣に聞いていてくれたのか。改めてヘクターをいい人だと、わたしは感じた。

「本当の話しなんだろうな」

学園に戻ったわたし達がメザリオ教官に報告にいつて、彼が言った第一声がこれであつた。反論しようとしたわたしを教官は手で制する。

「ああ、いい、わかっているから。本当のことだつていうのはもうわかっている。ただ、それでも言いたくなつたからだ」

ふー、とやたら長い溜息をつく。

「わかつている、とは？」

ヘクターが聞くと教官は「連絡が入つたんだ」と言つた。

「首都の方から悪魔の出現の報告が来たのと、フェンズリーのバクスター氏からも報告があつた」

マルコムだ。わたしは別れてから二日しか経っていないが、アンナの顔を思い出して胸が熱くなつた。

「詳しいことは今回もレポートにまとめてもらつとして、ごくろうだつたな」

教官はそう言つと、わたし達の成績カードに「A+」と書き込んだ。

早く帰ろう、というわたしの発言はローザに却下される。

「フローラが心配じゃないの!？」

ああ……。

「ああ、そついや、そんな名目で旅に出たんだつたな」

アルフレートが疲れた声を出した。

「イルヴァも早く帰りたいですう」

「まあ、ちよつと覗いて行こうよ」

イルヴァと対照的な反応をするヘクター。

「俺、もう泊まっていこうかな……」

「そうしちやいなよ」

わたしはフロロの言葉に頷いた。ぶーたれながらもローザ宅に移動する一行。

「あら、おかえりなさい」

ローザの姉、カミーユさんが迎えてくれた。

「こんにちは。相変わらずおきれいですね」

わたしが手揉みしつつ言うと、

「ほほほ、若いうちからおべっか使つと録な人生にならないわよ」とカミーユさん。あ、相変わらず素敵な性格でいらっしやる。

「さ、早くフローラに会いましょ」

白を貴重にした素敵な廊下を歩いて温室へと急ぐ。

「フローラ！」

ローザが扉を開け放った。ひょこつとベビーベッドから、懐かしい顔が覗いた。

「あ、もう貰ってるのね、餌」

わたしはベッドの脇にあるお皿を指差す。細かく刻んだコマツナが、こんもりと盛られていた。

「……なんか大きくなってるないか？」

アルフレートが少し嫌そうに呟いた。言われてみればそんな気がしないでもない。

「……入ってみる？」

フロロの言葉に全員が一瞬、沈黙したあと頷いた。

「期待してそんしたわね」

フローラの体の中にある小部屋にぎゅうぎゅうと身を寄せ合いながら立っていると、ローザが正直な感想を漏らす。

「まあこんなもんでしょ。外見だって大きくなってるのか微妙なところだったし」

わたしが言つと、フロロが「一足半！」と叫んだ。

「何が？」

「部屋の広さ。俺の足、一足半ほど大きくなってる」
あつそう。

「寝泊まりはキツイけど、荷物ぐらい置けるんじゃないかな」
ヘクターの言葉にローザも頷く。

「あ、それいいかも。着替えとか置いとくのでもいいじゃない？」

「えーでも、何かかわいそうじゃない？動くのに重くなったりしないの？」

ぎちぎちに荷物を詰めこまれたフローラちゃんを想像して、わたしは言った。

「いや、ロボットだろ？これ」

冷ややかなのはアルフレートだ。確かに転移装置が付いてたり、中
にいる分には生き物らしさが皆無だが。

「あんたのそういう所が大嫌いよ」

「私はお前のそういう偽善的な所が大嫌いだ」

言い返され、ムキー！となるわたしをヘクターが「まあまあ」と止
める。その時、微かに部屋が振動し始めた。

「何！？」

「フローラが移動してるんだよ」

フロロが制御室という名の実際は表が見られるだけの部屋を開け、
指差した。窓の外の景色がくると動く。外で見た時よりも大分
巨大化したコマツナが映ると、そこへ近づいて行った。

「お腹空いたみたいね」

わたしが言うつとアルフレートが鼻で笑う。

「ほらみる、重さを感じるぐらいなら、我々がこんなにぎゅう詰め
でいる段階で動けるわけないだろ」

確かにそうだ。わたしが納得しているとローザが声をあげた。

「あたしたちも御飯にしましょ。お腹すいたでしょ」

相変わらずローザのお家で出される食事は豪華だ。フロロじゃないが、隠れて住みたいなんて考える。あ、でも隠れてたら御飯は出ないのか。

「しかし疲れたわねー」

ローザがロブスターのグラタンを口に運びながら呟いた。

「でも首都にはまた行きたいよね」

わたしが言うといルヴァが何度も頷く。

「私は気乗りしないな。もっと芸術や文化に触れられる都市がいい」
アルフレートが言った言葉に、フロロが「似合わない」と笑った。

「リーダーは？」

ローザが言うといヘクターはぐつと喉に詰まらせる。

「急にリーダー扱いするなよ……」

ヘクターが水に手を伸ばした時だった。

「ヴィクトール」

ローザの本名が呼ばれ、カミーユさんが部屋に入ってくる。……本名が呼ばれる時、これは怒っている時だぞ、とわたしは身構えた。

「何でしょう、姉さん」

ローザも緊張で顔を引きつらせながら答える。カミーユさんの顔はにっこり笑顔だ。これが逆に怖い。

「あなた、今回の旅で自分の立場を忘れてたりしなかったわよね」

ローザの肩がびくん、と跳ねる。これはあれだ、『カマキヤラ出したりしてないよな』ということだ。そして答えは『いいえ』だ。

「普段はお父様も大目に見て下さってるけど、お父様も付き合いがあるようなご家庭では話しは別よ？……どうなの？」

笑顔のまま詰め寄るカミーユさん。

「だ、大丈夫だと思います。お父様に恥を掻かせるなんてそんな……」

自分のことを『恥』だというローザは流石に可哀想だ。愛嬌があつていいじゃないか。しかしカミーユさんは目は笑っていない笑顔でローザに近づいて行く。

「フエンズリーのバクスター氏からわざわざご連絡があったわ。『お宅のお嬢さんに大変お世話になった』って」

しん、とする室内。マルコムだ。ローザちゃんの身元をアンナあたりから聞いて、連絡してくれたんだろう。『お嬢さん』という言葉を使ったのも、彼なりの配慮だったのかもしれない。今回はもの凄く余計な事だが。

「えっと、その、あの……」

ローザがじつとりと汗をかいているのがこちらにもわかる。

「あなた、未だに自分も立場がわかっていないようね！」

「ごめんなさい！」

鬼と化したローザの姉力ミユさんと、ローザの追いかけてこがしまった。

「あーあ……」

わたしは溜息をつきつつ、今度の旅は『依頼通りの内容』でありますように、と祈るのだった。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4713q/>

タダシイ冒険の仕方2

2011年2月27日17時56分発行